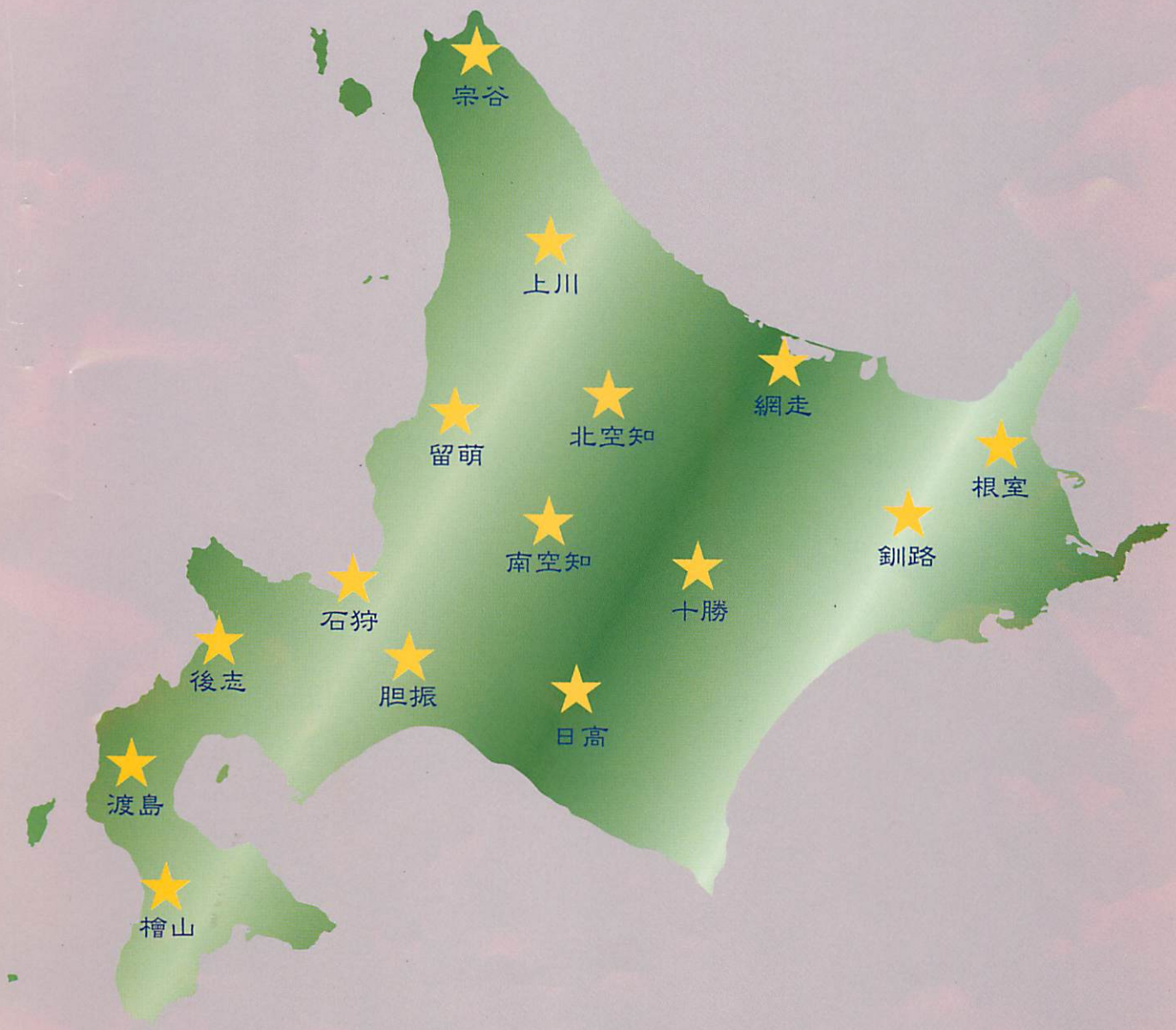
40周年記念誌



北海道高等学校教育研究会

高教研

あの日、あの時、あの場所で…

昭和47年８月１日、札幌市石狩会館に於いて、10周年座談会が行われました。
右から、梶浦初代会長、成田初代事務局長、大塚２代事務局長

毎年、北海道厚生年金会館が、全体集会の会場になります。

来賓控室（平成３年）
左から、高畠８代会長、宮森副会長、蓮田道高校長協会会長

会場前（平成４年）
寒い中、全道各地から集まります。

創立30周年記念大会（平成５年）
3,685名の参加がありました。

全体講演

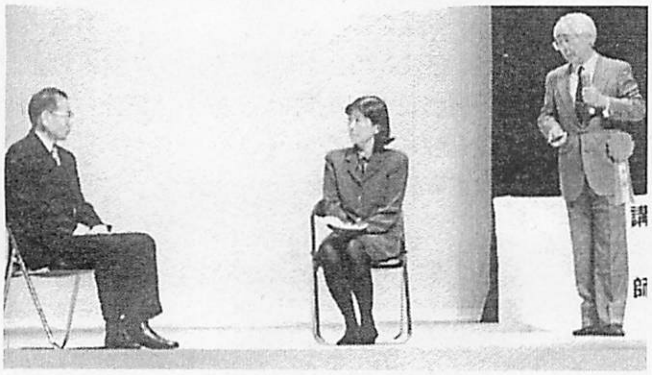
あの年、この年…

平成５年　午前の部
「技術革新の現在と社会の変容」
京都大学名誉教授　伊東　光晴　氏

平成６年　午前の部
「自然と人間」
作家　C．W．
ニコル　氏

講演後、会場から、質問や感想も出されます。

染谷10代会長と固い握手！



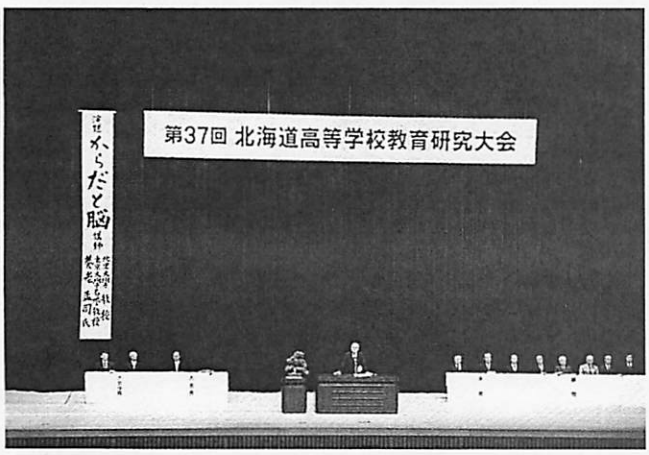
平成９年　午後の部
「カウンセリングを体験してみませんか」
～やって・見て・話し合って触れるカウンセリング～
北海学園北見大学助教授　中野　武房　氏
教育相談のあり方を考えるロールプレイングも行われました。

平成10年　午後の部
シンポジウム　「今　こどもの心は」～問題行動の背景を探る～
パ　ネ　ラー　渡部正行氏、小菅正夫氏、槍田英樹氏、中村廣治氏、坂口由美子氏
コーディネーター　宮森正勝氏

受付（平成13年）
ダンディーな受付係があなたをお待ちしております。

会場入口（平成13年）
ここで、それぞれ、新年の挨拶が交わされます。

教科部会（平成13年）
教科ごとに綿密な打ち合わせが行われます。



田村13代会長より（平成12年）
壇上には、来賓、顧問、大会役員の方々がいらっしゃいます。

全体集会会場（平成12年）
厚生年金会館大ホールが埋まります。

役　員　会

平成14年6月3日 13:00～　於 札幌市教育センター

地区支部長と教科部長により、高教研の全般的な決裁が行われました。

事務担当者会議

平成14年6月3日 15:00～　於 札幌市教育センター

本部事務局を代表して、島14代会長からの挨拶。

各教科事務担当者と本部事務局が、運営について詳細に打ち合わせをしました。

平成14年度から、新しく情報部会が加わりました。

目　次

発刊の辞 …… 北海道高等学校教育研究会会長　島　隆 …… 1

祝辞 …… 北海道教育委員会教育長　相馬秋夫 …… 2

札幌市教育委員会教育次長　本間英昭 …… 3

北海道高等学校長協会会長　沖野隼夫 …… 4

高教研40周年に寄せて …… 第10代会長　染谷昌志 …… 5

第11代会長　綾井健二 …… 6

第12代会長　武田泰明 …… 7

第13代会長　田村　勸 …… 8

全体講演この10年（講演要旨） …… 9

地区支部～この10年の歩み～ …… 23

教科部会～この10年の歩み～ …… 41

分科会研究成果一覧 …… 55

研究紀要一覧 …… 74

年表　高教研40年のあゆみ …… 77

高教研登録会員数および大会参加者数の推移 …… 89

本部事務局の歩み …… 90

編集後記 …… 91

記念誌発刊に寄せて

北海道高等学校教育研究会
会長　島　　隆

昭和38年５月25日、札幌南高校で本研究会の設立総会が開かれ、翌昭和39年２月１日に第１回研究大会が札幌旭丘高校で開催されました本研究会も、40周年という記念すべき年を迎えることができました。これも偏に、発足当時の「各教科の立場から本道高校教育を前進させたい」という熱い願いと「あらゆる角度からの研究や発言が自由になされる場」がほしいと思っていた多くの教員の願いを実現させるべく努力された諸先輩の先見性と実行力、そして、ご支援いただいた北海道教育委員会、札幌市教育委員会、北海道高等学校長協会をはじめ、本会を支えてくださいました本部役員、支部・教科部会役員、本部事務局、そして、いつも積極的にご参加いただきました先生方のご協力の賜と感謝申し上げます。

また、本会の盛会を願いご講演いただいた講師の皆様、ご指導・ご助言賜りました各教育委員会指導主事の方々に衷心より感謝し、御礼申し上げます。

高等学校は、昭和23年戦後の極めて困難な条件の下で出発し、幾多の困難を克服しながら発展をとげております。本研究会は、本道高等学校の発展に寄与するため、時代の課題を的確に捉え、課題解決のための実践発表や研究発表を中心に活動を行い、着実に努力を重ね成果を挙げてまいりました。この自由な立場から参加された会員の熱意ある研究と研鑽の成果は、研究紀要に溢れており、本道教育に大きく寄与しているものと確信しております。会員各位の努力に、重ねて心からの敬意を表します。

今、社会の急激な変化に主体的に対応できる力、生きる力の育成を目指して教育改革案が出されています。学校週五日制が完全実施され、ゆとりの中で生きる力を育成しようと、学校行事を精選するなどして、授業時間を確保する工夫を各学校で行なっております。しかし、学校外での勉強時間の減少や自学自習欠如からもたらされる基礎・基本の徹底不足が学力低下という不安感を生じさせて、高等学校新学習指導要領の実施前から改革案が出されるような感は否めないと思います。このような状況にある時、学校は流行に振り回されることなく、不易の部分を確実にすることが、地域から信頼される学校になるのではないかと考えます。そのためにも、一時間一時間の授業の大切さが重きを成してきます。新しさも大切ですが、過去の実績を見直し、検証して新たな授業を組み立てることも必要ではないでしょうか。ＴＴ授業のあり方でも、総合的な学習の時間のあり方でも過去の実績の見直しや検証から得るものは多々あると思います。

このたび、記念すべき40周年に当たり、記念行事として、40周年記念誌を発刊することになりました。この記念誌を通して高教研のこれまでの運営をはじめ、地区支部、教科部会の活動について回顧するとともに、過去の研究実績の見直しや検証を行なっていただけるものと思います。この記念誌が新教科「情報」の教科部会の新しい出発と共に高教研発展の礎として活用されることを願ってやみません。

本誌の編集にご尽力くださいました関係各位に心から感謝申し上げ、発刊のことばといたします。

祝　　辞

北海道教育委員会
教育長　相　馬　秋　夫

北海道高等学校教育研究会が設立されましてから、本年で40周年を迎えられましたことは、誠に喜ばしく、心からお祝い申し上げます。

本研究会は、昭和38年５月に設立され、翌、昭和39年２月に札幌旭丘高校を会場として350名の会員の参加により第１回研究会が開催されて以来、日頃の研究成果や授業実践などの交流を通して、本道の高等学校教育の充実・発展に大きく貢献し、3,400名を超える会員数を誇る、規模、活動内容ともに、全国にも類を見ない、総合的な教科研究会として、発展されてまいりました。

本研究会がこのように隆盛を見るに至りましたのは、設立に当たって奔走された先輩諸氏はもとより、その意志をしっかりと受け継ぎ、本会の運営にご尽力されてこられた歴代会長をはじめとする役員の方々のご努力と、会員各位が、高等学校教育に対する時代の要請に応えるべく、各教科の立場から本道教育の前進を願い、本会を自主的な研究の場として守り育ててこられた熱意によるものであり、ここに深く敬意を表する次第であります。

また、各学校における実践研究の発表の場として活用されてまいりました本会の研究紀要は40号を数え、それぞれの時代における教育課題の解決を目指そうとする会員各位のご努力の結晶として、本道高等学校教育の大きな指針となるものであります。

さて、今日、我が国の教育を取り巻く環境は、変化の激しい時代の中で、大きな変革期を迎えており、学校教育においては、心の教育の充実、個性を伸ばし、多様な学校選択が可能となる学校制度の実現などの視点から教育改革が進められており、高等学校教育におきましては、総合学科や単位制高校などの設置や、創意ある教育課程の編成など、生徒の多様な実態やニーズに柔軟に応えることを目指した特色ある学校づくりが進められております。

このような状況の中で、北海道の未来を担う創造性豊かでたくましい人材を育成するため、各高等学校においては、豊かな人間性や社会性、国際性を培う教育や自ら学び自ら考える力を育成する教育、生徒一人一人の個性を生かす教育などの充実が求められております。

また、完全学校週５日制の実施や来年度からの新学習指導要領の実施など、当面する課題の解決を含め、変革の時代における高校教育の在り方について、幅広い視点から研究を進めることが大切でありますことから、本研究会の活動に寄せられる期待は大きいものがあります。

この40周年を機に、本研究会がこれまで果たしてこられた役割を改めて思い起こし、本道高校教育の発展のために、今後一層のご研鑽を重ねられますことを心からご祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。

祝　　辞

札幌市教育委員会
教育次長　本　間　英　昭

このたび、北海道高等学校教育研究会が創立40周年を迎えるに当たり記念誌を発刊されますことは、誠に意義深く、お喜び申し上げます。

本研究会は、昭和38年に発足して以来今日まで、高等学校教育の課題を的確に把握し、実践に基づいた研究成果を着実にあげてこられました。会員の皆様の熱意と真摯な努力に対して、心から敬意を表します。

現在、我が国におきましては、種々の教育改革が進められていますが、その中でも高等学校教育はこれまでにない大きな転換期を迎えており、今後の方向性については、教育関係者のみならず、社会全体が関心を向けております。平成12年にＯＥＣＤが実施した15歳生徒の学習到達度調査（ＰＩＳＡ）によれば、日本の子どもたちは、数学的・科学的リテラシー、すなわち知識や技術を実生活の場面に活用する力は、国際的に見てトップグループに入っておりますが、宿題や自分の勉強をする時間は、調査参加国27ヵ国中最低となっております。高等学校に入学してくる生徒のこのような実態は、学習意欲や学習に対する興味・関心の向上という課題を、私たちに投げかけております。

平成15年度から高等学校で新学習指導要領が学年進行で本格実施されますが、その基本的なねらいは、学力を知識の量のみではなく、意欲・思考力・判断力・表現力まで含めてとらえる新しい学力観の下、ゆとりの中で特色ある教育を展開し、子どもたちに基礎的・基本的な内容を確実に身に付けさせ、自ら学び自ら考えるなどの「生きる力」をはぐくむことにあります。ＰＩＳＡの調査結果が示している、学力意欲や学習に対する興味・関心という面での課題の解決は、まさにこの「生きる力」をはぐくむ教育と密接に関係するものであり、教育改革の最大の課題ともいうべきものであります。高等学校教育に携わる者が、生徒の実態をしっかりと見据え、課題解決を目指して個に応じた指導と特色ある実践を積み重ねていくことの重要性は、今後一層大きくなるものと考えます。

また、高等学校においては、必修科目の最低単位数が大きく減じられ、各学校で独自に教科・科目を設定することができるようになりました。さらに、大学で学んだ成果やボランティア等の学校外の学修の単位認定が可能となるなど、教育課程においては、各学校の裁量の幅が一層拡大することとなり、各学校、研究団体における主体的かつ創造的な取組が大いに期待されるところであります。

本研究会は、このような今日的な教育課題を積極的に受け止め、「時代の変化に対応する高等学校の創造」という研究主題の下で、常に時代の先を見据えた研究を続けられているとともに、毎年研究紀要を発行し、高い専門性を有するとともに教育現場での実践にしっかりと根ざしたすぐれた研究を発表されております。これは、本研究会がまさに本道の高等学校教育の研究の中枢を担っていることの証であり、今後とも本道の高等学校の実践的な研究の先導的役割を担っていただくことを期待しております。

このたびの本研究会の創立40周年を契機とし、会員の皆様の一層の研鑽と、本道の高等学校教育の充実・発展のためのお力添えをお願い申し上げましてお祝いの言葉といたします。

祝　　辞

北海道高等学校長協会
会長　沖野隼夫

この度、北海道高等学校教育研究会が創立40周年を迎えられましたこと、誠におめでとうございます。心よりお喜び申し上げます。

この40年の間、本研究会は北海道高等学校教育を担う教員の研修の場として情報提供や課題提起を行い、北海道教育の資質向上に努めてこられました。これまでに、本研究会の充実・発展のためにご尽力された歴代会長を始めとして、役員の方々及び縁の下の力持ちとして会の運営に当たられた諸先生方のご努力、並びに会員として研究会に参加された先生方の教育に対する熱意に深く敬意と感謝の意を表するものであります。

本研究会は、昭和38年5月25日に、「高等学校教育の充実、振興を目的として、講演会、研究会の開催、機関誌（研究紀要、会報）の発行等を行い、会員相互の研修と識見の向上に努める」ことを目的として創立され、以後毎年1月上旬に全体集会、13に及ぶ教科部会が開催されております。10年前の創立30年（平成4年）までの高校教育を振り返りますと、研究会発足当時は戦後のベビーブームが高校に押し寄せた時であり、高校への進学率が急激な伸びを見せました。70％台であった進学率が5年で10％増え、昭和50年代には90％を超え、現在は97％にもなっております。このような生徒の急激な増加が教育に様々なひずみを生み出しました。経済の高度成長も手伝った高等学校学習指導要領第4次改訂では、教育の系統性が重視され教育内容のレベルアップが行われ、知識の詰め込み教育を行い始めました。学力テストが多く行われ、「受験戦争」・「落ちこぼれ」と言う言葉が生まれたのもこの頃でありました。これを機に高校教育の改善が叫ばれ始め、学習指導要領の第5次改訂では、「学習指導要領の『基準』としての性格を和らげ、ゆとりある、しかも充実した学校教育を重視して教育内容を精選し、個性や能力に応じた指導を行う」よう方向を転換したのであります。

創立30周年以後の10年間は、バブルがはじけて高度成長が影を潜め、中卒者の減少を迎え学校の統廃合が始まり、多様化したニーズに応える高校教育から一人ひとりの子供の個性を尊重し創造性を育てるとともに、学ぶ意欲と基礎基本を大切にする教育が強く求められるようになってきたのであります。そのため、第6次改訂では、「基礎的基本的な内容の指導の徹底、家庭科男女必修化による男女平等教育の推進」等が行われました。また、ゆとりのある生活の中で、子供たちが個性を生かしながら豊かな自己実現をできるよう、学校週5日制が平成4年9月から月1回、平成7年4月から月2回、そして平成14年4月から完全学校週5日制がスタートしたのであります。また、教育改革国民会議は、①人間性豊かな日本人を育成する教育を実現する、②一人ひとりの才能を伸ばし、創造性に富んだリーダーを育てる教育システムを実現する、③新しい時代にふさわしい学校づくりとそのための支援体制を実現すると言う3つの視点の教育改革が重要であるとの提言を行い、文部科学省は平成13年1月に「21世紀教育新生プラン」を明らかにしました。

孔子の言葉に、「吾十五にして学に志す、三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順う。七十にして心の欲する所に従えども矩を踰えず」というのがあります。創立40周年を迎えられた本研究会が、急速に進む教育改革の波を真っ向から受け止め、会員数の減少に歯止めを掛ける策を講じ、惑わずに本道教育のために邁進され、天命を知るまで本道の高校教育がさらにいっそう充実発展するように寄与されることを強く願い、お祝いの言葉といたします。

30年から40年へ

第10代会長　染　谷　昌　志

新しい年が訪れて、お正月にかかわる数日が過ぎますと、高教研の研究大会の準備が始まります。事務局を中心に前の年から準備そのものは進んでいるにしても、大会直前の緊張は独特な高まりを感じるものです。伝統と実績を誇る全道的な教育研究団体としての高教研を、このたびも充実した運営に、と願う気持が強くなってきます。私が事務局の仕事についていた当時に、多くの方々にご理解とご支援を頂いたことを、感謝しながら思い出しております。

高教研について考えるとき、同時に高校教育のあり方のことを頭に浮かべていることに気づきます。教育課程の改訂の精神を生かそうとする努力がある一方で、あらたな学校づくりへの先進的な取組もありました。外からの刺激を共有し、反芻するとともに、日常の研究や実践から発信していく動きも見られました。

平成５年１月の大会は、創立30周年を祝う記念すべき年にあたりました。そのとき、私たちは、高教研が30年目の節目を迎えて活力に満ちた壮年期に入ったと考えました。壮年とは、心身共に成熟して最も元気盛んな働きざかりの年ごろ、ということです。この壮年期としての高教研の情熱と行動力は、40年目の現在もさらに確認され、継続されていってほしいと考えます。

そのころの呼びかけに、大会の研究テーマについての次の提言があります。

「これからの高校教育のあり方について、“時代の変化に対応する高校教育の創造”ということが、当面の、ある意味では永遠の課題になると考えられます。ここで大切なのは、学校のうちにある私たちが、地域や家庭との接点に立って、どのように自ら意識の変革を図り、具体的に行動していけるか、ということになります。もし私たちが、学校の内側としての理論構成や効率化に力をかけすぎて、学校外で生まれつつある価値や文化に注目することを怠るならば、私たちの狙いとする多元的で開かれた学校づくりから遊離していくことになります。」

このような趣旨で、これまでの研究テーマである「高等学校教育と学習指導の現代化を推進する」を改訂して、「時代の変化に対応する高等学校教育の創造」とすることに役員会で話し合いました。教育内容の現代化という点については、教科研究を中心としてきた高教研にとって、教科教育の体系、系統性を今日的な視点でとらえる動きとして評価されてきました。しかし、教科それぞれの研究推進とともに、「教科を通して」あるいは「教科を越えて」、生徒一人一人の判断力と創造性を高めるための教科担当者の実践力が、より強く求められるときになってきました。こうした取組は、40周年の本会の課題でもあると考えられます。

高教研の運営の中で当時の話を二つ出しますと、一つ目は平成６年１月の厚生年金会館改修工事による、中島体育センターでの大会開催です。経費節減のため会場の椅子運びなどに多くの会員のお手伝いを頂きました。もう一つは、会員登録数の漸減を止め、併せて会計の安定を図ることでした。このため魅力ある講師の選定と、各教科部会の活性化に努めることになりました。また、平成６年度から非会員の大会参加料をアップして、会員の登録料プラス大会参加料と同額にしました。

大会講師としては、（４年度）明快な分析の経済学第一人者の伊東光晴氏、耐えて勝つを強調した野球の古葉竹識氏、（５年度）自然と人間の調和を進めるＣ．Ｗ．ニコル氏、必要とあそびを提唱する北大の若井邦夫氏、（６年度）教育にも共通感覚をという哲学者で思想家の中村雄二郎氏、初の女性講師で国際交流の実践・理論家の杉岡昭子氏がおられました。文末になりましたが、40周年を祝し、高教研の全ての関係者のご発展をお祈りします。

思い出すままに

第11代会長　綾　井　健　二

高教研が40周年を迎えたという。私的なことにわたり恐縮だが、私は5年前に教職生活を終えた。改めて振り返ってみると、39年間の教職生活が高教研の歴史とほぼ重なっていることになる。一教師としての自分にとって、高教研はどのような存在であったかを思い返してみたい。

高教研が設立されて第1回の研究大会が開かれたのは昭和38年1月のことである。記録を見ると、札幌旭丘高等学校を会場として参加者は335名。中央教育審議会会長の森戸辰男氏による「高校教育の問題点」という講演があった。まだ20代の教員として千歳高校に勤務していた私は、この大会に参加したような印象がある。誠に恥ずかしいのだが、木造校舎が普通の当時、竣工して日も浅い水準を抜く近代的な校舎に目を奪われ、肝心の研究会の記憶がまことにあいまいなのだ。私が研究会に参加したのは、勉強に行って来るよう、学校の誰かから強く勧められたからだったと思う。

その後、社会科部会の研究発表者に指名され、「日本史教材の精選」に関するテーマを与えられて、それがきっかけで関係の書物や論文を読み、自分なりに考えをまとめ、授業でも実践してみて発表したことがあった。何年も経ってから、偶然に出会ったその時の助言者の先生に、「あの時の先生の発表資料を今でも持っていますよ」と言われて、ひどくうれしかったこともある。

その後、旭丘高に転勤することになり、事務局のお手伝いをするようになった。第2回大会からは参加者が大幅に増え、暖房のある体育館を有する札幌静修高校が会場になった。大会前日の会場のパイプ椅子並べ、当日の下足係などを勤めた記憶がある。

会員数はさらに増え、第5回大会から、全体会場は札幌市民会館になった。この大会では、会場の入口付近で高教研反対のビラなどが配られ、教職員団体に所属していた教師としていささかとまどいも感じた。当時、国際的な冷戦構造のもとで、国内でもイデオロギー的な対立が激しく、それが教育の世界にも影響を与えていた。そのため、高教研に対して「体制側の御用研究会」という見方をして反対する空気もあった。そうした中で、北海道の高校教育の充実のために、真に主体的で自由な研究・研修の組織を育て上げようという関係者の共通理解と努力によって高教研の基礎が築かれ、その後の充実・発展が保障されたことは特筆すべき事である。

その後、大会参加の度に自分の狭い視野を広げるきっかけを得ることができ、日々の実践を見直すヒントを得ることができた。また、社会科部会の運営委員や助言者を委嘱されたこともあったが、このような機会を与えられたお陰で、多くの人々と出会うことができ、多くのことを教えていただいた。

再度、旭丘高勤務を命ぜられたことから、第33回と第34回大会には会長として関わることになった。登録会員数はかつて六千名を数え、全道高校教員の半数近くが会員という時期もあったが、その後は減少傾向が続き、私が関わった時には四千名台になっていた。

会員数の減少は高教研の財政面を直撃する。各方面に協力要請や補助金増額などの働きかけも行ったが、国内すべてで財政縮小が課題になっている状況で、なかなか結果には現れてこなかった。その分、本部事務局の費用をぎりぎり削って、当時の島隆事務局長（現会長）以下、旭丘高教職員が運営を支えてくれた。そのご苦労に心から感謝している。

今日、高校教育をめぐる課題は高教研発足当時よりも大きなものがあるのではないだろうか。改革や提言等も色々なされているが、教育の成果は、日々生徒に接する教師一人ひとりの実践の質に左右されることは昔も今も変わらない。教育を取り巻く変化の速さと深さがかつてないほどの状況であるだけに、教師一人ひとりが視野を広げ、柔軟で創造的な教育活動を生み出していくための研究・研修の場の重要性は一層増している。全道から全教科の教員が一堂に会して開かれるこれだけの規模の研究会組織を有することは、全国的に見ても稀であり、すぐれた伝統といえるであろう。一人一人の教師を含め、すべての関係者の参加と協力によって、高教研が今後も本道高校教育のために充実した歩みを続けられるように願っている。

40周年によせて

第12代会長　武　田　泰　明

北海道高等学校教育研究会が40周年を迎えられ、誠におめでとうございます。

私が初めて高教研に参加したのは、会が発足して6年目位の昭和43年度大会頃と思いますが、満員の熱気に包まれた市民会館ホールで行われた開会式の途中、職員団体の論客と思われる人から長い説明付きで5点位にわたって質問が出され、それを何ら動ずることなく捌いた司会者（当時の旭丘高・大塚教頭）の鋭さに驚き、さらに、あれだけの多人数を前にして堂々と挨拶をする大会長（長瀬校長）を尊敬の眼差しで見つめていたことを思い出します。それから約30年を経て、私自身がその大会長の役を仰せつかることになるとは夢にも思わぬことでありました。

旭丘高校に赴任して1年目は35回大会に当たる年でした。それまで十年来続いている会員の漸減減少を如何にして歯止めをかけることができるか、また、参加者が激減する一日目の午後を魅力的なものにするにはどうしたらよいのか、早急に取り組まなければならない課題でした。

すぐに取り組めたのは後者の方でした。心の教育の必要性が声高に叫ばれ、誰もがカウンセリングマインドを身につけたいという思いがある中で、ではカウンセリングを実際にはどう進めたらよいのか、という戸惑いが多くの人にあるはずだ。そこでカウンセリングの実際場面に気軽に触れてもらう場面を設定してみようということになりました。日本学校教育相談学会北海道支部という組織に、私自身が設立当初からかかわっていたこともあってそこのメンバーに出演をお願いしたところ、快く引き受けていただき、結果としてかなりの数の増加につながりました。

また、旭丘高校長には、高音研と高文連音楽の長という役がついていますが、その会で若い先生方の管楽器による演奏を聞く機会があり「こんな素晴らしい音色を多くの人に聞いてもらう場を作ることができないだろうか」という発想が生まれ、一日目の昼休みのミニコンサートの開催になりました。これも午後に残ってくれる人を多くした一因であろうと思います。1年目の35回大会では網走地区高音研の方々による管楽器の演奏、36回大会では石狩地区高音研の先生方に金管・木管楽器による演奏をお願いしたのですが、いずれも手弁当で快く参加してくれました。

とはいえ、会員数の減少は、前年度に大問題になった不正経理問題絡みもあって、団体会計からの援助が厳しくなったこともあり、思い切った改革なしには歯止めをかけることはできないという思いに至りました。歴代の会長にも意見を伺いながら、一日目は午後開催にすることで参加しやすくし、経費も節減できるという見通しの下に、37回大会から実行という決定をして退職に至りました。

高教研会長は2年間でしたが、全教職員が事務局校としての誇りを持ち、しかも年間を通してかなりのエネルギーを使って業務に当たってくれたことを決して忘れることはできません。

終わりになりましたが、高教研が40周年を期に益々の発展をしますよう、そして会員各位のご健勝をご祈念申し上げます。

今世紀の主題は「建前から本音へ」

第13代会長　田　村　　勸

戦後57年、優にその三分の二にあたる間本会は地道に活動を推進してきた。この40年の足跡は、その間の日本の後期中等教育研究の流れを端的に物語っていると言えよう。そして次年度は、今世紀教育改革の第一歩とする新学習指導要領を実施に移す初年である。

さて、縁を得て本会事務局校に平成11年4月に赴任した。積年の課題と対峙した2年間、運営業務の重さを感得したものだった。活動は新春1月の大会に集約されるが、中でも1日目全体集会の講演内容を決定する責任は大きい。当然のことながら、学校組織並びに会員個々の研修に、日常的かつ具体的に資するものとなるよう、その企画に腐心したものである。

まず、第37回大会には『唯脳論』（青土社）で代表される北里大学教授（東京大学名誉教授）養老猛司先生を講師にお迎えした。当時科学誌『日経サイエンス』で好評連載中の対談「脳の見方、モノの見方」の名ホスト役であった。日本を代表する若手研究者をゲストとする内容は専門色が濃くなるが、ホストの明快な論理は冴え毎回読者を魅了していた。更に養老先生への思いを決定づけたのは、総合誌『文藝春秋』'95年5月号掲載の「さらば東大……」であった。解剖学研究現場と大学事務方社会との書類が、全くと言っていい程不一致なものであったと述べておられる。大会当日の演題「からだと脳」を、「教育現場・学校と教育理論・学問」に置き換えると、より分り易かったのではないか。養老研究所長としてのライフワークの一つに「人体博物館」の設立計画を持ち、人体中の自然、あくまでもその事実を追求し、科学的真の思考を深めることで、世界に通じる生命観と社会観を持つ若者を日本から輩出しようと八面六臂の毎日を送っておられる。

つぎに、第38回大会には「ユング派心理療法」を日本に確立された当時の国際日本文化研究センター所長、現文化庁長官（京都大学名誉教授）河合隼雄先生を講師にお迎えした。著書『中空構造日本の深層』（中公叢書）の神話、民話、昔話を取り上げ「均衡の日本」と「唯一統合の欧米」とに比較分析する論考は読者に深い感慨を与えている。そして、河合先生への思いを決定づけたのは、『カウンセリングを語る』上下などを含む講談社プラス＋α文庫であった。中でも『青春の夢と遊び』（岩波書店シリーズ「生きる」初出）は、講師依頼に京都へ向うフライト中に読み、演題「青春の夢」となったこともあって、大切なメモリアルブックとなった。時流にも適合したこの講演は論点を心に置き、子どもの個性と、学校での営為と責任との間に起こる指導者の葛藤とについて、平易な言葉で進められたので会場の方々に分りよかったと思われる。個々の教育現場の体験こそが指導力を培い、教師としての職能を高めると先生は日頃現場に声援を送っておられる。この後も国政の活力源となるポストに就かれ、今世紀に相応しい日本文化を創出する新規で具体的方策が、河合語録として広く発信されている。

ところで、日本の古来から連綿と続いている集団（社会）的建前と、明治以降驚異的はやさで我国に出現した個人（欧米）的建前、この二つの建前がカオスとなり、益々本音（真実）の見えにくい昨今になっていると言えるのではないか。この度の改革は教育に限らず、急速な情報化、グローバル化、環境悪化などの諸課題の解決に向け、集団とか個人に拘らず本音からの発想が待たれていると思われる。この様な時、我国の将来について貴重な考えを持つお二人に出合えたのは実に幸運であった。東洋、なかでも日本の実態に重心を置く両先生の論考は、接する人との間に透明な信頼を湧き立たせていくことだろう。本会の研究活動が一層深められることにより、建前（従来）型とされる学校現場が、本音を主軸とする新しいものに率先して変革されるよう願ってやまない。

全体講演この10年

（講演要旨）

第30回研究大会・午前の部

技術革新の現在と社会の変容

京都大学名誉教授　伊東　光晴　氏

1980年代は技術革新の時代であった。たとえば、長野県坂城市という小都市には、市場占有率世界第１位の企業が６社あり、その１つは内視鏡をつくる会社であり、国際ファックスと国際宅急便で受注と配達を行っている。現在の日本を支えているのは、こうした無名だが最先端の技術を有した企業であり、ＩＣ革命と通信革命がその技術を支えている。

現在通信革命は高度にデジタル化されている。従来の人間の声を波動で伝える方法では一回線で一通話だったものが、コンピューター原理（２進法）の応用で人間の声を高さで計る方法では一回線1000通話、さらに、光ファイバー、光通信による革新により一本で数万通話が可能になってきている。また、光ケーブルにより長距離通信の革新が行なわれ、長距離情報の完全復元が可能になっている。こうして、たとえばＡＴＴ（アメリカ電信電話会社）は、西海岸と東海岸を結ぶ長距離通話に専念し、他の短距離通信を競争市場にするなど市場の革新も行なわれている。こうした通信革命は「世界」の距離を近くし、たとえば近年の「東欧革命」も、西欧と東欧の距離の短縮が大きく影響しているということができる。一方金融市場にも革新が起こっている。たとえば東京六本木のアークヒルズでは最先端のＯＡを駆使して24時間の国際金融業務が行なわれている。ニューヨーク、ロンドンといった他の金融市場との距離がますます近くなり、分単位百数十万円の差益が生み出されている。

もう一方の技術革新の軸になったのはＩＣ革命である。トランジスタに変わりＩＣが登場したのは1959年で、最初日本では電卓需要として普及した。それがアメリカへ波及したのである。昭和50年代には集積回路、60年代には超ＬＳＩが登場した。たとえばこの技術をＮＥＣはパーソナルコンピューターにつぎこみ、富士通は産業ロボットにつぎこんだ。これらの技術は時計にも数値制御自動旋盤として用いられ、日本はドイツの技術を凌駕するほどになった。ところで、共産圏はこれらの先端技術を「ココム規制」で受容できず、技術的な立ち遅れが経済的立ち遅れを招来したと考えることができる。

さて今日の日本は、こうした先端技術を駆使した多品種少量生産を可能にしている。たとえば自動車産業においては汎用は30％、特注が70％となっている。安くて丈夫で長持ちという本来の機能とちがった、自分の個性に合う特注品を今の日本人は求めている。こうした生産は「虚業」ともいえるが、今や「虚業」なくして日本の産業は成り立たなくなっている。しかし、自動車産業は実は日本の最先端産業ということはできない。日本の最先端の産業はたとえば大分県別府市にあるハンディキャッパーを使用したオムロンの工場である。そこではハンディキャッパーの残存能力をコンピューターが調べ、それを充分に発揮する障害者の自立システムができている。技術革新が福祉と結びつき、単に再配分の問題ではなく、生存権に立脚した産業のあり方が模索されている。技術革新の最先端とは、こうした、技術を人間のためにつくりかえ、社会のあり方を変えさせるものでなければならない。

第30回研究大会・午後の部

耐えて勝つ

野球評論家　古葉　竹識　氏

31年間の野球生活で狭い世界しか知らない人間だが、「この選手達をクビにならないようにするにはどうしなければならないか」と、いつも考えていた。

監督時代、「お前はどうしてベンチの隅にばかりいるのか」と言われたが、あそこが一番便利な所で、キャッチャーの立場で全体を見ることができる。私は「常に集中力を持って決してボールから目を離すな。どんな展開になっても最後まで捨てるな」と言ってきた。ベンチには25人の選手が入る。監督は25倍の集中力で観察しなければならない。つまらないミスをすると隅に呼んで注意する。終了後や翌日に、文句は絶対言わない。すべて試合中に話合って納得するようにした。攻守交替の時に、どんなことでも決して見逃さないで注意した。注意すれば選手は一所懸命になる。

昭和50年、長島巨人を破って129試合目で初優勝したが、衣笠や高橋慶彦ら内野手の協力が大きかった。相手監督の動きをよく見てベンチに教えてくれた。それで勝った試合が４～５試合はあったと思う。大洋時代に中日の落合にはよくサインを見破られた。彼は相手ベンチの動きを実によく観察している。南海時代お世話になったヤクルトの野村さんは相手投手の癖や細かいデータを皆に教えてくれた。山本浩二でも衣笠でも、良い選手は皆相手投手の癖を見抜く力がすばらしい。

大洋へ行って、過去10年間のドラフト１・２位の一軍選手が、ヒゲの斎藤と中山以外いなかったのでびっくりした。（広島には10人近くいた）有力選手がしっかり育っていなかったのが、大洋のチーム作りが遅れた原因だったと思う。

プロ野球は60人の枠があり、チームに協力できずにトレードされたり、力不足なら仕方ないが、体を痛めてやめるような悔いが残らないようにしてやりたい。高校野球を指導する人は、肩や肘を痛めるようなことをさせないでほしい。高校生で無茶をすると殆どプロで通用しない。甲子園で腕が折れても投げぬくというのは純粋な気持だろうが、それは間違っている。預かった子供達を故障させずに一人前にしてやるのは、教育者も同じだと思う。

最近は子供達にアルバイトなどをどんどんやらせるのが、早く自立させるのに良いように言うが、親も子も自分勝手になって家庭崩壊に繋がってはいないか。まずきちっとした物心がつかないと駄目ではないかと思う。

私には三人の息子がいるが、健康管理を第一に育ててきた。みんなが一つになって協力しなければ良いチームはできない。家庭も同じで、兄弟皆が長く付合ってゆけるような嫁さんを見付けるよう話している。

札幌には古葉会もあり、毎年何回か来ている。ぜひドーム球場を作って、プロ球団を作ってほしい。そして私を呼んで下さい。

第31回研究大会・午前の部

自然と人間

作家　C. W. ニコル　氏

前に私はエチオピアの大変美しい所で国立公園の新設に尽力した。政府の士官に任命されて様々な困難に挑戦した。

まず治安が必要だった。公園内の交易路をねらう山賊と貴重な動物を売りさばく密猟者を掃蕩するのだ。私自身も武装して22人の部下と共に６ヶ月の戦いで野蛮な山賊を片づけたが、私も自分が驚く程の獰猛な人間になっていた。危険な罠を使う悪質な密猟も多く、私一人で203人も逮捕した程だ。

次なる敵は賄賂で、せっかく密猟者を何十kmも離れた街へ護送しても釈放されてしまう。我々は犯人を捕えたその場で痛い目にあわせ、思い知らせる他に術がなかった。

又、大切な事はそこに住む人間だ。強制移住も検討されたが、私の考えで村人には公園の仕事を与え、自然との調和を目指した。

まず、殆んどの人が字を知らないので、一人一人に国立公園の意味を説明した。しかし村は本当に貧乏で大変だったのだ。学校もない、警察も来ない、仇討ちが横行する、子供は６歳までに67％死んでしまう。やがて部下の家族にも発疹チフスのため死者が出始めた。薬の調達を国連にも求めたが「お前は医者ではない」というセクショナリズムそのものの断り。給料の半分を１個１ドルのヤミ薬につぎこんだが足りず、私は誰

を救うかを決定する神様になっていた。初めは美しい自然を守るつもりで来た私だったが、すぐに自然保護の中で人間を忘れてはいけない事を悟った。人助けの為、ずいぶん芝居やウソをトリックに使ったし、畑作りや教育にも手を染めた。

村人が木を伐りすぎると生態系のバランスが崩れて砂漠化や害獣の大発生が起こる。村人の生活を守る為、沢山のヒヒを射殺せねばならなかった。これも自然保護なのだ。見学者や動物の為だけではなく、そこに住む人間の為まで考えなければ自然保護はできない。私はいつも混乱し、つらかったが、やりがいはあった。獰猛なニコルは消えていたのだ。

やがて私は国立公園のすべての存在が水の循環に支えられている事を悟った。そして生涯をかけてこの水を守ろうと思うようになった。しかし、とうとうレインジャーには勝てない敵、すなわち最新の武器を持ったゲリラが現われた。私は止むなくそこを去る事になり、日本に帰って来たのである。

平和で美しい日本の自然に喜んだのも束の間であった。自然破壊のペースの速い事。そして昔の様に自然と遊ぶ子供が何と少ないことか。ネイチャー（自然）がマイネイチャー（自分の人格）を作るのである。豊かな、変化あふれる日本の文化、「日本人」の危機ではないだろうか。

日本は世界的にも豊かでお金も使っている。しかし自然を守る人が本当に足りない。私もこれからそんな人材を育成する学校の仕事を引きうける。グチを言ったり、悩んだりしていないで、具体的に行動しなくてはいけないと考えるからである。

第31回研究大会・午後の部

こどもが発達するとき

－必要とあそびのあいだ－

北海道大学教授　**若井　邦夫　氏**

最近の教育には「間（ま）」がない。時間的なゆとりがなく短時間のうちに色々なことをしようとし、空間的なゆとりもなく活動場所が限定されている。また、仲間の「間」もない。つまり対人関係が希薄で大勢の人がまわりにいても、そこに仲間ができない。これではダイナミックな学習活動にはなり得ない。

北大教育学部では、今年度後期から子供の出会いと発達を描いた文学作品を取り上げ、グループで登場人物の性格・成長等の分析を行わせ、報告させるという試みを始めている。グループで読むことにより作品の捉え方が違ってくることもあり、グループ作業の楽しさを再発見したという声も聞かれた。

乱暴な言い方をすれば、もっとのんびりとしたゆとりがあっても良いと思う。つまり、最近の文化は「死に急ぎ」の文化に見えてしまう。見通しのある目標に向かってではなく、ただ闇雲に急いでいるように思える。親にいつも「早くしなさい」と言われる子供達、算数・国語の悪いところのみ指摘され体育・図工の良い部分に目を向けてもらえない子供達。人間にとって一番のくせ者は「不安」であり、「ビリでも良い、一生懸命やれば良い」といった、不安状態に陥ったときの「逃げ場」を用意してあげることが必要である。

また、「厳しさ・方向づけ」という父親の役割と「困ったときの駆け込み寺」的な母親の役割とが、最近の親子関係の中で逆転してしまい、これが最近の問題点の一つになっているのではないだろうか。

ところで自分の高校時代を思い出すと、「わかるか？」という確認を繰り返した後しまいには「わかれ！」と言った数学の先生、李白の詩の朗誦をしてくれた漢文の先生のことが忘れられない。理屈だけでなく「感覚のひだ」に刻み込まれることもある。化学の実験なども印象に残っている。興味・関心・動機づけがいかに大切か。更に、いろいろな人との出会いが重要であり、出会いが発達を促す。教師と生徒との出会いは選択できないが、教師の人間性がその際に問われると思う。

発達の姿にはいろいろある。見廻りながら目標に向かう「探検コース」、遠まわりをしても確実に向かう「巡検コース」、最短コースを強引に進む「急行コース」など。この際、「ジグザグ」、あちらこちらに登る間に「ズデン」という転び、つまり道草・無駄があっても良いのではないか。道草の良さ、無駄の効用もあり、時間だけを考えた「効率」教育で果たして良いのだろうか。また、失敗から学びとる力のような「生きていく力」を育てていくことも必要である。

最後に高校教育への期待を述べると、この時期はしっかりした自分を作る時期であり、「自ら怒り己を恥じる」存在であってほしい。行動・判断基準をしっかりもち、必要なときには自己主張できる主体性が求められている。自分で何も決められない子供がいる一方、自己主張のしっぱなしの子供も多い。

「自ら怒り、己を恥じる」ということについて共に考えていきたい。

第32回研究大会・午前の部

「共通感覚と自己実現」

明治大学法学部教授　**中村雄二郎　氏**

哲学とは生命力の発現を手助けするものである。そういう点から考えると教育と非常に近い。今の時代、その哲学と教育が変になってきてはいないか。このように不断の問いかけを発するところから、本当の哲学や教育は始まる。同時に否定を通して発見する喜びも得られるのであるが、私が哲学や教育を考える際のキーワードの一つにしているのが、「共通感覚」ということばである。

「共通感覚」とは英語でいうコモンセンスである。このことばは現在、常識という意味でとらえられているが、もともとは「人間の五感を統合して働かせる感覚能力」のことを意味していた。この「共通感覚」から人間のあり方をとらえ直せるのではないかと考えている。人間を単に論理の面から、あるいは単に感覚の面からとらえるのではなく、両者をオーバーラップして結びつけるのが「共通感覚」である。

ハンナ・アーレントは共通感覚を喪失すると人間は感受性を持たないロボットになると指摘し、カントは共通感覚とは、他者の立場に自己を置く能力だと言っている。また、ジャンヴァティスタ・ヴィーコは共通感覚を忘れた近代の科学主義に疑問を投げかけている。

現代の生活世界には情報があふれている。知識が増えすぎてものが言えない状態、予備知識でこと足りる状態になっている。生の自然や生の人間をみることができなくなっているのである。我々は周囲にめぐらされた多くのバリヤー、多くの偶像を取りのぞく必要がある。例えば、科学を考えてみよう。私たちは科学は普遍的で論理的で、かつ客観的である、だから科学は常に正しいと思ってきた。しかし、人間関係や生活世界はこれらの普遍性や論理性・客観性ですべてわりきれるものではない。人間関係や生活世界の中にはうまく証明できないものがたくさんある。人間関係は数量化できないものなので、科学の分析的・論理的手法が役立たない場合もあるのである。科学が取り残したもの、忘れたものを人間関係や経験の中から考えるべきなのである。

今までは科学的方法を取らないと学問として認められなかったが、科学の知と違う知のあり方があるのではなかろうか。それが経験ではないかと思われる。世界のどこにも「人は経験によって学ぶ」という意味のことばがある。ギリシア語では「受苦せし者は学びたり」である。我々は行為し、そのため受苦に直面し、その受苦を通して新たな認識を持つようになる。多くの困難をうち克った経験こそが、本当の学習になるのである。

ところで、子供たちは自己発現を目指すにあたって、自分にとって、何が必要か、何が大事かを知ることができず、自己を限定してしまいがちである。これらは感覚を働かすことにより、おのずと分かってくるものなのである。共通感覚・感受性をできるだけ抑えないようにする、そうすることにより新しいものが見えてきて、活力もでてくるのである。そこに自己発現の可能性がひらけてくるのである。

最後に質疑応答の中から、共通感覚と個性の関係についてと、いじめ問題についての内容をまとめてみた。

○個々人が共通感覚をフルに発揮することにより、自分を知ることができ、個別化することができるのである。共通感覚の違いが結局は個性となる。

○いじめが起るのは、痛みを感じることを知らないからである。また、互いをおもいやることを知らないからである。このように考えると共通感覚がないからだと言える。

第32回研究大会・午後の部

「故郷忘じがたく候」の旅

札幌国際プラザ専務理事　**杉岡　昭子　氏**

今回の講演は、国際交流とコンベンションをその主な仕事とする札幌国際プラザでの活動を中心に、私が行ってきた仕事を整理するつもりで引き受けた。

国際プラザの機能の一つであるコンベンションは一般に、他の地域から人・物・情報を呼び込むシステムと定義されるが、雪まつりにせよオリンピックにせよ北方都市会議にせよ、もともとは冬の暮らしを楽しくしたいという日常的な動機から始まったものである。つまり私は、コンベンションとくに札幌方式のそれには町づくりのためという重要な目的があると考える。

一例として北方都市会議を紹介する。厳しい冬を快適に暮らすための国際会議として、6ヵ国9都市の参

加で始まったこの会議は、1977年以来続いており現在では8ヵ国22都市の参加に広がっている。こうした話し合いの中から、冬でも遊べる木製遊具や冬の景色に色彩を与える常緑樹の植樹やレンガ・ナトリウム灯の使用などが札幌の町づくりに活かされているし、スパイクタイヤや融雪剤による塩害などの共通課題も早くから認識された。降雪予測システムなどに代表される札幌の寒冷技術も世界に認知されるようになり、札幌は北方圏の拠点都市としての役割を担うようになった。

もう一つの機能である国際交流について、私は国際交流には方程式があると考える。歴史をタテ軸、世界と結ばれた現在をヨコ軸としてとらえたとき、地域を知りその特色を世界と結ぶことが重要である。この際、外から自分の属している地域を見ることが重要であり、外に出てはじめてその特性が理解できるのだと思う。

私は、出身地の山陰地方のある地域に赴き、次に網走のある貝塚と北方民俗博物館を見学してはじめて、北海道・札幌という地域の特性がわかり、同時にこの地域が北方圏の一部であることを体感できた。タテ軸と同時に北方圏の一部というヨコ軸をとらえる姿勢が国際交流の原点であろう。

こうして北海道の文化や歴史を学んでいくと、まだ見えないはずの未来も歴史的必然からある程度見えてくるように思われる。それは北東アジアに中心軸を移すことである。

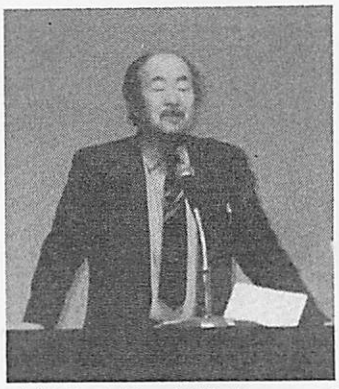
国際プラザでは北東アジアネットワークの構築というインフラづくりに取り組んでおり、「故郷忘じがたく候」をタイトルに三極交流の旅を企画し、三回のうち二回までをすでに実施した。これらの旅から感じたのは、現地を直接見てはじめて体感できることの重要性であり、我々はこの方法によってそれぞれの地域の歴史（タテ軸）をもっと理解しなければならない。

更に、未来と現在をつなぐという視点に立つと、一番大切なのは地球を守っていくことであり、そのためには世界の人々と手を組むことが必要である。今まで地域から地球を見ていたが、次に地球から見た場合、そこから見えてくるバランスを大切にして地球を守るためにどのような国際交流をすべきかを考える必要がある。そのためにも北方民俗の自然への理解を学びそれを現在の日本に結びつけていく必要があり、北海道はその発信源になりうると思う。いずれにせよ、我々の住む地球＝故郷を、「故郷忘じがたく候」とはならぬように守り言葉にしていきたいと思う。

第33回研究大会・午前の部

「人間－進化の道からずれた動物」

京都大学名誉教授
日本福祉大学教授　**河合　雅雄　氏**



人間の進化をどう考えたらよいかを今日のテーマとする。人間の進化を知るには猿の研究が不可欠である。一体人間とはどのような生物であるのか、攻撃性・残虐性、文化という二つの問題から考えたい。

すべての生物は必ず死を迎えるが、個体は一つの種の中に存在し、種という命をできるだけ永く保とうとする。その媒介者が性で、遺伝子を残していく。より良い子孫を残していくために生物は優れた雄を選ぶための戦いをする。攻撃性とはあらゆる生物が進化に参与するために備えられているものである。人間も思春期から青年期にかけて攻撃性が高まっていく。抑制の仕方が難しく、家庭内暴力、校内暴力という問題を生じることもある。抑圧しすぎると登校拒否、神経症など自分を損傷する行為に至る場合もある。多くの生物は攻撃性を抑制することが遺伝子に支配されており、生得的に備わっている。例えば日本鹿の雄の大きな枝分かれした角は相手の殺傷を防ぐためのものなのである。

ロレンツによれば生物は「同じ仲間ではできるだけ攻撃しない、殺さない、決して食べない」という掟を持つが、これを破った二種類の動物が、集団を形成した肉食獣と霊長類である。後者は大脳が進化した結果、個体の欲望が増大し、仲間を殺し食べるようにもなった。これは残虐性であり、悪そのものが芽生えたことを意味する。人間はその霊長類を受け継いでおり、進化とは関係のない残虐性を増幅させていった生物である。人間は攻撃性や残虐性の抑制の方法を自分達で作る運命にあった。約束・掟・道徳・制度・組織・宗教・婚姻関係・風習などによって調整しているが、これらは大きな意味で文化的所産と言える。人間は自分達で作ったそれぞれに異なる行動系・生活様式・価値体系を持った民族集団を作っているが、人類全体としてどううまくやっていくのかという非常に大きな問題を抱えている。

環境のカテゴリーとして自然環境と文化環境を考えることができる。文化環境とは自分が創出した制度や宗教、価値観などを指す。人間は長い間この二つの環境が進化の舞台だったのである。すなわち、人間は五百万年前に猿から分かれて以来ずっと自然・人間・文

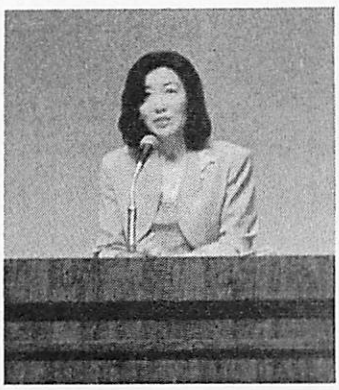
化が一体となって進化して来た。人間の生活は何百万年もの間変わらずに同じだった。しかし一万一千年前に農耕という大変な事件が起こり、飛躍的に食糧を手に入れられるようになった。文明社会に突入したのである。以来人間は自然に依存する社会から一転して、自然の破壊と改変によって発展して来たが、今では自己を破壊し自己を改変するようにまでなってしまった。自己破壊とは個体では自殺、集団では戦争であるが、後者は人類全体が滅ぶかもしれないという種のレベルにまで及んでいる。自己改変では遺伝子・染色体の操作・借腹・無精生殖・臓器移植・免疫の問題・遺伝子工学など考えれば怖いことが現実のことになろうとしている。

自然環境の中にある猿は一万年後も十万年後も変わらないだろう。しかし猛烈に増大する文化環境の中にある人間は進化の法則の力が及ぼされなくなって、自己改変に突入してしまい、百年後のこともわからないギリギリのところまで来ている。人間はどうあるべきか、どの方向に行くのか、ということを真剣に考えなければならない。人間は自然の中で育って来たのだという原点に戻るべきである。

第33回研究大会・午後の部

「世界の中の日本と日本人」

北海学園大学教授　**山中　燁子　氏**



「現代」の重要なKey wordの一つは「balance」であり、諸問題を考察する時には両者のバランスに配慮することが大切である。情報とプライバシー、集団と個人性、男性と女性、知識と感性、仕事と余暇など背反する二つのもののバランスに配慮できることが大切な時代になってきている。

他の重要なKey wordは、GlobalizationとRegionalizationとそれらを認識するIdentityであろう。Globalizationとは、国際化・地球規模化のことであり、その三つの側面とは、一つには意識や視野の国際化、即ち地球の一員としての意識を持つことである。二つめは活動の地球規模化であり、最後のものはネットワークシステムの地球規模化である。

Regionalization（地域化）とは、地理的・機能的・文化的なものであり、例えば「北方圏」という言葉もあるように、それには重層的発想も必要である。

Identityとは広義の「個性」であり、他との比較から浮かび上がる独自性である。今後、独自性としての個性が増々重要視される時代となるであろう。

我々の郷土「北海道」のidentityとは何であろう。「広い」「開放的」などと言われる我々の地域の個性を今一度見直すことも重要である。人と人、国と国の交流という視点からそれを分析することも今後は必要かもしれない。

人口・環境・ＰＫＯ・経済・人権など国連では将来の問題を解決すべく地道な活動をしている。また、教育の実践にも力を入れている。それは、教育こそが貧困地域の弱者の人権に最も関係するとみなされているからだ。

ＡＰＥＣについて言えば、大阪大会で議長国日本に対する各国の批判があったことは残念だった。国際社会に仲間として受け入れられるために何が必要かということを考えることが必要となろう。

少くとも政府は積極的に東アジア地域の主導権を握ろうとはしていない。

沖縄基地をはらむ日米関係は、二国間だけではなく世界の問題なのだという視点でとらえることも重要だ。世界の安全保障はagainstからwithの時代に変わったという人もいる。混迷が続くロシアについて述べると、日本の対ロシア経済活動は官民とも韓国や欧州諸国に遅れをとっている。

日本人も今や世界各地で活動しているが、各地で評価を低めている日本人がいることは残念だ。国際社会で配慮の足りない言動をする日本人・日系企業の話を聞くことは残念だが、日本はともかく北海道のファンが少なからず存在することも事実であり、うれしい経験もたびたびあった。

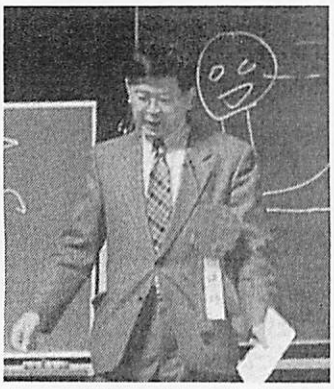
中国では日本人ではないと誤解され、とても親切にされたが、日本政府の過去への賢い清算なくしてはいつまでたってもアジアの一員とみなされないと思う。

21世紀へ、「気概」「豊かさ」そして地球の仲間に対する愛などが今後のビジョンとKey wordとなるであろう。

第34回研究大会・午前の部

「大むかしと現代」

国立歴史民俗博物館副館長　佐原　真　氏



最初は絵の話です。子供のときに絵を描いた経験のない大人はまずいないのに、大人になるに従って絵を描かなくなります。その理由を探っていくと、想像力（＝創造力）の問題にぶつかります。子供の絵は実に想像力（＝創造力）に富んでいます。大人が子供の絵のすばらしさを理解できないのは、想像力をどこかにしまい忘れてしまったからなのです。大むかしの人々も、子供と同じような絵を描きます。

つぎは道具の話です。石斧で木を１本切り倒す間に、鉄斧では、４本倒すことができます。チェーンソーは鉄斧の百倍の仕事をこなすことができます。こうした効率の向上を私たちは「進歩」と呼んできました。パプアニューギニアやオーストラリアの原住民の人たちは、1950年代に鉄器へ移行しました。オーストラリアのイル＝ヨロン島の人々は、鉄器によって仕事が効率化されて生じた余暇の時間を、なんと昼寝の時間に充てたそうです。これを聞いて、はじめ私は笑ってしまいました。ところが、多田道太郎によると、余暇とは「何物にも拘束されない時間」のことで、人がいろいろと想像＝創造できるのは、まさにこうした時間においてなのだそうです。イル＝ヨロン島の人々は正しい余暇の時間の使い方をしているわけで、おかしいのは、仕事を効率化してその浮いた時間を更なる仕事に費やしている、我々の方ということになります。

現代は大むかしと全く切り離されて存在しているのではありません。たとえば、日本人は皆と同じであることを強く志向する羊型人間であるといわれます。さかのぼれば、古墳時代の昔から、同じ型の墓をつくることで仲間であると確認しあってきたわけです。また食文化にしても、日本の多くの地域では長いこと肉を食べる習慣が見られませんでした。今も、肉は食べるようになりましたが、内臓や血はほとんど食べません。これは大むかしに、大陸の騎馬民族が日本までやってこなかったことと関係があると思います。去勢の習慣がないのも、同じ理由でしょう。さらに、数学の水準が高いのも、縄文土器にみられる豊かな数の世界に由来しているのではないでしょうか。戦争も大むかしからありました。しかし、戦争が増えるのは、農耕牧畜文明が栄えるようになってからであり、人類史上ほんのつい最近の現象といえます。

大むかしのことを知らなくても別にかまわないと言う人が時々いますが、過去と切り離された今はない、ということは忘れてはいけないと思います。

第34回研究大会・午後の部

「子供を観る眼－教育臨床心理の立場から」

北海道大学教育学部教授　横湯　園子　氏

教育臨床の立場から現代の子供を観ると共通点が２つある。

① 深い傷を負うと、その傷が癒されることなく青年になっていくケースが多い。生きていく上で自己選択しなければならない時、その傷の深さ故に自ら選択することができない。

② 傍から見ると良い子であるのに本人の自己評価が低い。

この２点をクリアするために自尊感情を高めていく手助けをすることが大切になってくる。心に深い傷を持ち自分は価値のない人間だと思っている者に対して「素敵な人物」だと伝えていくためには、自己愛を高めることから始めなければならない。横湯先生は次のような具体例を挙げて説明していた。小学６年の頃よりいじめの対象になっていた少女が遺書を書くが死にきれず、田舎から東京へ家出を繰り返す。東京では寂しさを紛らす目的で複数の男性と知りあうようになっていた。この頃カウンセリングすることになる。母が見せてくれた少女の遺書の中に学校側の指導・助言に対する批判があった事、小学４年の頃から母が仕事に出たため寂しさを紛らすためにダイヤルＱ２を利用していた事等がわかった。彼女の行動力・エネルギーが素晴らしいと母親に伝えると、それが切っ掛けとなり彼女と母親との間で会話が弾むようになった。東京への家出が繰り返されるので、東京がいかに危険な場所であるか説得しようとしたが上の空であった。子供の理解できない行動の裏には重い過去を背負っている場合がある。彼女の場合はいじめ・暴力にさらされてきた事から起こるストレス性障害が原因なのだと考えるに至った。よだれを流しながら東京の事を語るのはその後遺症によると判断した。家出をくい止めるためには東京に対して現実感を抱かせなければならない。例

えば北星余市高校へ転学し東京出身の友人ができれば徐々に現実感を持つことが可能ではないかと考えた。卒業後に東京へ行けばよいのだからと理解させていく過程で受験勉強しなくてはならないという意識が徐々に生じてきた。カウンセリングの中で少女は「小学4年までの自分は大好きだった」とよく話していた。どこかに自分を好きになる気持ちを引き出すことによって積極性が生じてくる。夢の実現には時間がかかるが、自己選択が自から可能になってくるのである。

この他に2つの事例を挙げ、私達の聞く姿勢がいかに大切であるかを強調していた。言葉によってではなく、沈黙の中で体で語る子供もいるのでそれを聞きとる感性を我々は磨いていかなければならない。子供が語る事柄に我々が自分の経験を重ね、いろいろな価値観を提示しながら子供に話しかけていく。対立することも時にはあるが、その中で子供は価値を選択していくことができるのである。

第35回研究大会・午前の部

「国際化と私たちの暮らし」

神戸市外国語大学教授　**浅井　信雄　氏**

－規制緩和の方向が
良いとは限らない－

会社の倒産も多く見られ、現在は先行き不透明な安心・安全が保証されない時代である。日本人は契約社会の厳しさを認識する必要がある。規制緩和の方向に日本は進んでいるが、アクセルとブレーキのバランスが大切である。一方で株式の空売りを防ぐため、規制を強化しようとする動きもある。それはそれでよいのではないか。アメリカで「政府は規制緩和の名のもとに監視を怠っている」という記事が新聞に書かれたが、規制緩和は100％善ではない。また、緩和の方向に進んだことで、アジアの経済はおかしくなって来たとも言える。インドネシアなどでは、経済不安が社会・政治不安へとなりつつある。完全に自由化していない中国では、今のところ金融不安はない。すべてを市場の原理にまかせることは良いこととは限らない。ルールを作るのは結局人間であり、根本のところをしっかりと押さえることが大切である。

国際政治というものは、国益で動いているものである。共同声明や文書はよく読まなければ、わからないのにわかった気持ちになってしまう。これが国家間の誤解につながる。

国際化とは身近な問題である。例えば、京都国際会議の結論は、一口で言うと「省エネに努めましょう」だが、電気をどんどん使い、効率・便利・快適をとるか、環境をとるかの問題となる。

－国際化を考える上での注意－

国際交流とは、お互いの共通点と相違点を理解し合い、共生の道を探ることであるが、国際化を考える上でいくつかの注意すべき点がある。

(1)　諸外国の知識の絶対的な不足
(2)　自分、自分の国中心に考える傾向
(3)　多様な世界への認識のために視点移動
(4)　（国と国の関係をみる）水平的な視点と（政治の歴史を学ぶ）垂直的視点が必要
(5)　単純化してステレオタイプにならない
(6)　結果にこだわるのではなく、原因を考え、総合的にみる全体的評価の必要性
(7)　偏見・先入観は簡単にはなくならない
(8)　イメージの力の大きさ。特にテレビ等の映像的イメージは、インパクトが強いため修正するのが大変で、危険性がある。

これらにあわせて、事実と解釈について一言したい。キューバ危機の解釈が、事実が明らかになったことで変わってきた。解釈はとても重要である。解釈がなければ事実も意味をもたない。

－これからの国際化、国際交流－

ここ最近、日本中心の考えから、日本の問題を世界の中で考える視点を持って、解釈・解決しようとする方向に進んできた。これからは、世界（人類）の問題を世界（人類）の視点で考えて解決していくことが必要であろう。

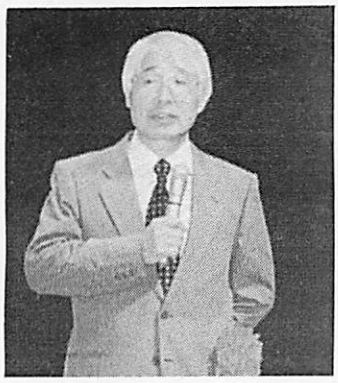
同様に、国際交流も、外国からものを取り入れる・まねすることから、人間的交流へ進んできている。これからは、世界の問題に対して日本人が人類に共通する解答を見つける能力を身に付けていくことが必要である。

すなわち「もの」と「人」が「国際舞台」で有機的に共生していくことである。

第35回研究大会・午後の部

「カウンセリングを体験してみませんか」

北海学園北見大学助教授　中野　武房　氏



－やって触れる－
カウンセリングの
基礎体験－

まず、座席の隣の方と雑談を３分間位行ってください。コミュニケーションの大切さとともに、雑談とカウンセリングの違いを考えてみると、カウンセリングの大切な点として、傾聴、共感的理解、秘密の保持、沈黙の時間を大切にする、そして質問を極力抑える等のことがある。教育相談においては、相談者がこころを開くためにこれらは密接な関係がある。

次に、傾聴体験を隣の方と役割を分担し、交互に３分間ずつ実施してください。３分間聴き続けることはどうですか。時間のない時でも、生徒の思いを３分間でも聴いてあげて欲しいものです。傾聴の態度として表情・うなずきなどの身体言語や声の調子（トーン）などがある。相手への関心が強く、集中し、出会いを大切にする気持ちがあることが求められる。

技術が身に付いて、教育相談がスムーズに行われることが大切である。その技術として「受容」「繰り返し」「沈黙」「要約（疑問文で要約して返す）」「質問・リード（ことばを変えて、投げ返す）」などがある。

－見て触れる－ロールプレイング（役割演技）－

母親が高校一年男子の登校拒否のことで相談、学級担任が対応する。最初に、教育相談の手法を取り入れたプレイ。次に「短期療法」の考えをふまえたプレイを実施。先生役、母親役を演じた側の感想を述べ合い、第三者としての観客の感想を出して、相手の気持ち、演者の気持ちを体験して気付きを深めていくのがロールプレイング（役割演技）の基本である。母親のつらい気持ちを受け止め、親の心理過程を洞察して、親自身が子供とともに考えて問題解決の方向に歩み出す支援が教師に求められている。それには時間のかかる場合もあるが、相談者が納得できる結論を、相談者の気付きと主体的意思で生み出せることが大切である。

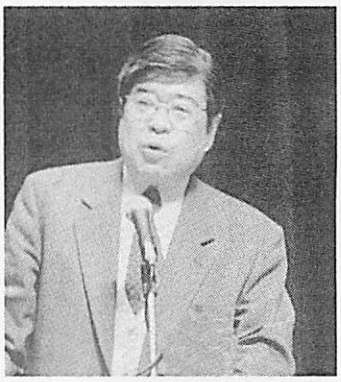
－教師の役割－まとめにかえて－

教師の役割性格（教える、注入、形式、道徳などの傾向）を自覚し、何でも教えるという姿勢でなく、自己のふりかえりの時間を毎日持ってみたい。ゆっくり、じっくり、ゆとりある生活を教師は持つ必要があるのではないか。生徒の精神衛生は教師の精神衛生から。

第36回研究大会・午前の部

「変革期の高校教育を考える」

ノートルダム女子大学長　梶田　叡一　氏



今、「変革期」とよくいわれる。しかしそれは、2000年が近いからではない。教育の空気を甘いものから本質に向け、教育の大きな流れを転換すべきときだからである。

ここ10年から15年の間、リベラルな風潮が広まり、楽しい授業をしよう、評価も良いところを見ようというきれいごとでその場限りの考え方があった。一方、学校現場では退学、犯罪、いじめ、学校嫌い、勉強嫌い、勉強のわからない生徒が増加しているなど様々な問題が現われてきた。

それらの原因の１つには、これまで導入してきた欧米の習慣・教育制度が今のリベラルな風潮と合わなくなってきていることが考えられる。300年ほど前の江戸時代中期の寺子屋では個別指導がなされ、発表形式も取り入れた自由な考え方をしていた。ところが、130年前の明治維新に際し欧米の習慣が多く入り、50年前の敗戦時には6.3.3.4制が導入され、授業も講義式の中央集権的なものに変えてしまった。それは同時に、カリキュラム、先生の役割、生徒と先生の関係も変えることとなった。導入当時はどうにかなったものが、130年、50年経た今、身の丈に合わないところがでてきて、カリキュラム、生徒指導、学校運営上で様々な問題を引き起こしているのである。私たちが学校・家庭・社会のそれぞれの立場に於いて、きちんと為すべきことを考えておかないと大変まずいことになるだろう。

現在の教育状況は70年代から80年代はじめのアメリカを想起させる。当時リベラルがもてはやされていた時代であったが、５つの問題――暴力・器物破損・自動車による事故死やけが・薬物乱用・セックス――が指摘されていた。1983年に「危機に立つ国家」という全国規模の報告書が出されあまりにもリベラルで甘い教育（例えば、テストはしない、評価は非常に甘くするなど）にようやく反省が加えられた。高校は単位取得に加え基礎学力テストに合格しなければ大学入学資格と見なされなくなった。また、従来は大学は「入り易く出にくい」と言われていたが、ＳＡＴ（大学進学能力基礎テスト）で９割とっていても、スタンフォードやハーバードと言った全国区の有名大学には入りづらくなり、「入りにくく出にくい」大学へと質的変化

を遂げている。そして、前述の５つの問題は、薬物乱用はなかなか減少しないものの他の問題は以前に比して落ち着きを取り戻してきている。

このアメリカの例をふまえ、今日本で何ができ、教育には何が求められているのか。一言でいえば、「進路の保障」よりも、将来の人生のための「真の学力」であり、社会に出て人生を生き抜いていく上で大切なことを身につけることである。

人は誰も、「社会」という「われわれの世界」と「自分独自」という「われの世界」という２つの世界を持っている。高齢社会の人生を視野に入れた「アイデンティティと死の教育」をも併せて人生観を構築し、「われの世界」で生きていける力量をつけることが求められている。

そのためには、学校の教育課程に於いても「生きる力の育成」つまり「われの世界」を視野に入れた、わかる指導、わかる授業に努めることである。まず第一に、教材研究。教科書そのままでない、工夫した授業である。次に、相手を知ることである。自分の若い頃を当てはめることも、当今の高校生を一様にとらえることもできない。今、目の前にいる生徒を理解しようとすることである。最後に、教師の具体的あり方が高校生にとってはモデルとなるのだから「自分の全力量が教育なのだ」と肝に銘じ、良書を読み、語り合い、「自分づくり」に励んでほしい。

第36回研究大会・午後の部

シンポジウム「今 こどもの心は」

～問題行動の背景を探る～

パネラー　渡部　正行　氏（札幌医科大学神経精神医学講座講師）
　　小菅　正夫　氏（旭川市旭山動物園長）
　　檜田　英樹　氏（札幌市立中央中学校教諭）
　　中村　廣治　氏（北海道浦河高等学校教諭）
　　坂口由美子　氏（北海道札幌東高等学校養護教諭）
コーディネーター　宮森　正勝　氏（北海道札幌啓北商業高等学校長）

登校拒否、いじめ、薬物乱用など子供達に関わる深刻な問題が取りだされる中、心の教育が注目されている。子供達の心のありかた、表出する様々な問題行動の背景を探る第一歩として中学校、高校、保健室、動物園、精神科診療室、それぞれの場で見られる子供達の様子について以下のような発言があった。

中学校では小学校で担任の授業が成立しないということを経験してきた子供達や、集団生活での規律を受け入れられないで生活してきた子供達が入学してきており、全道的に生活指導上大変困難をきたしている状態にある。問題の発生が低年齢化してきているのを感じる。問題行動を起こす生徒とのつながりがもちにくくなっている。多くの生徒が自分にとっての損得という価値判断に流されている。生徒会の委員などで頑張る子が極端に少なくなっている。

高校では30年前と比較して高校へ進学し、そこで学ぶ真剣さが大きく後退している。学校は遊びに来るところ、勉強は塾でといってははばからない。学習意欲に欠けている生徒が多く、自治活動も低調である。家庭教育の問題でもあると思うが、何事に対しても「耐える力」が十分に育っていない。

保健室で見かける生徒達は社会の抱える問題をそのまま反映しているように見える。大人の状況が不況、高齢化での先行き不安などで子供に目をむける余裕もない。こういう状況が高校生の、今さえ良ければいい、未来には期待していないという非常に刹那的な考えにつながっているように思う。精神力も弱くなっている。高校生も大人と同様に友達との関係、親との問題など多くのストレスを抱えて生活している。

動物園に来る子供達も昔と随分様変わりしてきた。サマースクールという企画を行っているが、そこに参加してくる子供達を見てみても、生き生きとした子供らしさを感じる子が少なく、子供同士でコミュニケーションをとるのが苦手な子、感情表現が希薄な子、自分から疑問を持ったり、考えたりするのが苦手な子が多くなった。

精神科医として子供達の様子から感じるのは心の成長に必要な挫折を十分味わってきていないということ。小さい頃は大人が挫折を感じさせないよう、つまずかないようにしている。ところが中学、高校へいくと厳然たる順列や序列が存在し、そこでいきなり大きな挫折感がやってくる。だからこれに耐えられない。子供だけの問題ではなく大人も未成熟なものが増えている。

このような状況にある子供達に対しどう対応していけばいいか、どう関わればいいかについて以下のような発言があった。

中学校では規律の必要性を時には厳しく生徒に説くことが重要であると思う。また保護者に対しても学校の行う指導に対する理解を求める一層の働きかけが必要である。問題を学校だけで抱えるのではなく父母、地域に対しオープンにしていくことも大切である。

高校では学力の問題にしっかり取り組むべきである。学校運営への生徒参加も視野にいれた自治を育成する機会、場の設定も大切である。地域と協力しながら地域から信頼を得る学校づくりがなされるべきである。

保健室で生徒の話を聞いてみて、生徒の話をきちんと聞いて本音で受け止めてあげることの大切さを感ずる。生徒の話を肯定的に受け止め、心情を汲み取るように聞いてあげることで、生徒は自分は大切にされているという気持ちをもち、それが生きるエネルギーになる。

動物園では子供達が不思議なことをキャッチするアンテナを伸ばすきっかけをつくってあげたい。生物は習っていても動物に触れたこともない、生き物のことを教えてもらっていない子供達に動物に触れる機会を提供し、感覚、感情で命を伝えたい。

精神科医として思うのは子供の目線でというような、何事も子供に合わせるようなことは子供の迎合でしかないということである。生徒に対して高校生としての接し方、大人としての接し方というのがあると思う。大人とは責任と契約で行動するということである。生徒に責任を持たせ、契約のもとに行動をとるよう接していって欲しい。

パネラーの方々からの発言を参考に、子供を取り巻く困難な状況を再認識するとともに、これまでの我々の関わり方を見つめ直し、よりよい対応を求めて今後も討議を重ねていく必要がある。

第37回研究大会

「からだと脳」

北里大学教授　養老　孟司　氏

「こころ」とは脳の働きによるものといって差し支えないでしょう。「からだ」とは遺伝子の働きによるといえます。「こころ」と「からだ」の関係、取り扱いについて長年考えてきたところです。

自然科学的な見方から心身を考えるとき「情報」を抜きにはできません。わたしが学生、現職の頃、科学には常識がありました。科学の対象は物質であるということです。そこで脳を扱うことに障害が出ます。物質を対象とすると言うことは、エネルギーを対象とすることです。これが20世紀の常識でした。ごく近年はこれが崩れてきて、情報が科学の中に入ってきました。情報理論とここで私のいう「情報」とは違います。あいまいな（日常的）情報と言う意味で私は使っています。その情報が科学の中に入ってきました。科学の扱うものが大きな変化をしてきたのです。

人間がもつ情報経路は二つあります。一つは遺伝子系、もう一つは脳、いわゆる神経系です。からだと関係している遺伝子系の働く場所は細胞のなかです。細胞の働きとは「生きている」ということです。「生きている」ということをあらわしている情報系は遺伝子、その働く場所は細胞です。我々の身体的特性は基本的に遺伝子によって決まっています。

もう一つは神経系、すなわち脳であります。「脳は遺伝子系から生じているので遺伝子が一番大切である」こう考えるのは、遺伝子中心主義または遺伝子一元論といえます（ドーキンスのいう利己的遺伝子）。この考え方にはもう一つの神経系の情報系が欠如している点では賛同できません。私は二元論をとります（一般社会では嫌われているが）。

ヒトの遺伝子を読む「ヒューマンゲノムプロジェクト」の仕事はどう解されるでしょうか。遺伝子を全部読むと言うのは人間の遺伝子を脳という神経系にすべて移してしまおうという意味です。どうして読んでしまおうとしているかというと、遺伝子をすべての脳で理解してしまおうとしていることです（一見遺伝子中心主義に見えるが脳中心主義である）。現代社会では二つの系で考えるというのはわかりやすいことです。科学が情報も取り組んでいくのであれば真剣に考えなければならないことです。情報とは記号を扱うということ、もっと具体的にいうと不動のものであるということです。人間という実態があって情報というあてにならないものが飛び交っている。このイメージは逆転しなければならないものです。情報とは不動のものです。映画、ＶＴＲも２回３回と回数を増やしていってもＶＴＲは全く同じ物であり、見る側の反応は刻々と変わります。生物は刻々と変化し、情報は固定されたもの。だから情報過多はゴミ問題であるのです。人間は日々変化しています。

・脳は社会をつくる。固定しようと言う側が教師で子供は変化しようとするものです。矛盾しているのです。変わらないことをよしとする教師が刻々と変わる人間を扱うのです。実態と情報が逆転して理解されたところに問題があるようです。都市も固定されているものです。それを強調するが為に丈夫なものをつくろうとします。ピラミッドやローマの水道、万里の長城、こ

れらは文明という人間の表現、すなわち動かないものです。社会が要求するのは固定したもの、時間的、地理的に普遍的なもの、すなわち真理を求めるのです。どんな都市文明も高いビル、頑健なビルをつくります。安定している方がいいと思うようです。中世、乱世の人々は（乱世と呼んだのは治世の江戸の人々）「諸行無常」の言葉にあるように人は常に変化するということを理解していました。現代では実感しにくいものですが。「行く川の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず……」もみごとに情報と実態の関係を言い表しています。

脳化社会、どんどん世の中のものを固定していこうという社会、情報をどんどん求める社会。それだけの情報を集めてどうするのか、まさしくゴミの問題です。これが情報の性質です。遺伝子系でも同じです。細胞からＤＮＡをとりだせます。ＤＮＡはＶＴＲのテープと同じです。ＤＮＡそのものは止まっています。ＤＮＡそのものは止まっている情報そのものであり、実は記号なのです。翻訳機にかけないと解読されません。情報化するのは細胞、それがヒトゲノムであれば、ヒトをつくります。脳の扱う記号とは言葉です。言葉は取り出せば止まってしまいます（音声言語も）。教育界ではすべてを遺伝子に帰するのは嫌がります。

知ることの問題は現代では知ることについて情報を集めることとなっています。情報収集へと変えてしまったのが教育です。私は「知る」とは「癌の告知である」と考えています。学生に「癌を告知されたとき、咲いている桜がどう見えるか考えてみなさい。」と質問することがあります。「去年までの桜のことを思い出してごらんなさい。」思い出せないのです。今の自分が変わってしまっているから。癌告知によって変わってしまったから、知ることの意味が変質してしまったのです。知ることと自分が無関係であると考えているようです。生徒が変わるような知識の在り方を教師は禁じている。本質的に学問をするとは今までの自分が死に自分が変わるということであると思っています。それを親もまた望まないのです。新しい知識と自分の既存の知識が並列して存在しています。教育の問題は将来に対して、社会に対して肯定的イメージをもつことであると思います。我々の価値観の根底は世間であるようです。しかし世間自体も我々が作っているものです。それは自己究明的なことになってしまいそうです。後は夫々でお考え頂きたいと思います。

第38回研究大会

『青春の夢』

国際日本文化研究センター所長　**河合　隼雄　氏**

今の高校生、大学生は「青春」と言う感じはあまりしないんじゃないでしょうか。みなさんは高校生を見ていて、青春を生きているという感じがしますか？あまりしないと思います。それは我々の青年期と今の青年期は社会の変動によってずいぶん変わってきたからです。だから我々の青年期は「青年」と言うと「青春」、「青春」と言うと「夢」というように連想が働きましたが、今はそうではないのではないでしょうか。いわゆる青年期ですが、ずっと昔はありませんでした。もともとは子供があって、大人があって子供から直接大人に変わります。ところが社会が複雑になるにつれて、子供と大人の間に青年というものが入ってくるのです。青年が入ってきたというのは近代社会の特徴です。ではまず、青年がなかった時の話をしようと思います。これは今でも本質的に大事なことですが、子供が直接大人になる社会というのは、どんな社会でも子供が大人になるイニシエーションの儀式をもっています。成人式というのが必ずあります。例えば15歳で大人になるという社会があるとします。15歳の子は山に連れて行かれて、怪物がやってきてみんな殺されると教えられるわけです。その時がやってくると、15歳になる子供達は全員山へ連れて行かれるのです。子供達は殺されると思っているから、必死になって泣く泣く連れていかれるわけです。そして山に連れて行かれた子供達は集められ、「お前達はもう子供ではなくなる。子供としては死ぬけれど、ちゃんとすれば大人になれる」と告げられ、部族の義務や神話についての話があります。その後なんらかの試練を与えられ、その試練をくぐった者は新しい名前をもらうのです。そして大人に生まれ変わって村に帰って行くのです。一番根本にあるのは、子供は死んで大人に生まれ変わるということです。それがイニシエーションの儀式で根本は死と再生です。子供達も初めは殺されると思っているから、覚悟ができて大人になるわけです。だからこの頃成人式がよく問題になっていますが、これは成人式の真似事、いわゆる成人式ごっこをやるから難しいのです。

では、どうして昔の儀式をやめたかわかりますか？昔は子供はみんな勝手な事をしています。ところが大

人になる時ガツンとやられて秩序社会に入ってくるから、大人としての責任を果たすわけです。我々はいつ大人になったか？と言われると困るでしょう。大学を卒業した時か、就職した時か。昔の社会は節目、節目で命がけの儀式をやったのです。例えばみなさんは教員になった時、教員になるためのイニシエーションはありましたか？これは昔風に言うと絶対あるべきなのです。普通の人間が人を教える人間になるのだから。現在は制度としてのイニシエーションはなくなっているけれど、人間としてのイニシエーションはなくなることはありません。みなさんだってどこかで大人になるための儀式があったと思います。なぜ昔あったものが今はなくなったのでしょうか。エリアーデの『生と再生』という本の中で、近代社会の特徴はイニシエーションの儀式をなくしたことであると書いてあります。しかし、なぜなくしたかは書いていないのです。そこで私が考えた解釈ですが、近代社会とは社会が進歩することを考え始めた社会です。社会が進歩すると、無理してその社会に入れてもらっても対応できないのです。だから社会が流動して進歩するという考え方をする限り、イニシエーションの制度は作れないのです。これは日本だけではなく、先進国と言われる近代社会からは全部イニシエーションの儀式はなくなりました。そしてみんな進歩していくわけですから、節目ということがとても曖昧になっていくことが現代社会の難しい点なのです。そうすると子供と大人の間に青年期ができたわけです。青年期はある意味では昔のイニシエーションに似ていて、ここで俺は何をしようかとか誰と結婚しようかとかいろいろな夢が出てきます。しかし、毛虫が蛹になり蝶になるように、毛虫は急に蝶にはなれないのです。ちょうどこの蛹に相当する時代が中学、高校時代なのです。そして蛹の時代は心の中でいろんなことがうごめいて大変な時代です。それを乗り越えて大人になってじゃあどう生きようかという時に、今の青年達が非常に難しいのは、情報量がものすごく多いということです。昔は前のことがあまりわからなかった。だからわからないということを前提に夢を持てたのです。恋愛でもそうです。本当に異性のことなどわからないものです。わからないからこそ夢や希望がふくらむわけです。そして上手にふくらむと実現できるところがあるのです。

私の職業はそれをやっているのだと思うことがあります。私の会う人は、札付きの非行少年とか、シンナーばかり吸っている人、自殺未遂をした人、心中の片割れとかそんな人が多いのです。その人達はレッテルが張られています。私はそんなレッテルに一切関係なく会っています。みんなはこう言うけれどこうでないかもしれないと思って会っていたらだんだん変わってくるのです。これは人間のすごく面白いところです。こいつはこうだと思うとなかなかその子は変われません。みんなで押さえ込むと変わりようがないですね。人間はみんなでそういう型を作っていく傾向があります。そういう時にそれをパッとはずしてみると違うことが起きるかもしれないのです。だから先生方はもっと夢を持てとか夢のない奴はだめだとか言わないで、誰でも必ず夢はあるし、夢を持つに違いないし、夢を持つまでつきあうぞという気持ちでみていくとずいぶん違うと思います。周囲の人の見方が夢を育てることがあるのです。そこのところが先生方の大きな役割だと思います。日本語の「教育」という言葉は「教える」という言葉と「育てる」という言葉が両方入っています。教師をしていると育てる方を忘れて、教える方にどうしても熱心になりますね。本当に夢が育つとか、心が育つというのは教えるなんてことではできないんじゃないでしょうか。夢は心の中から生れてくるものだから育てるより他に仕方がない。育てようと思うと、先生方は育ってくるぞと思って見ていなければなりません。

蛹から出てくる時待ってましたよと言う人がいてくれるか、いないかが大切なのです。ある所から出て来てこれからという時に、ちょっと待ってやるということを先生方が考えることは大変大きいことと思います。だから、高等学校3年間で良くしようとか、そんなにあわてなくても、人生は長いのだからもう一度見てやろうというような気持ちで生徒を見るとずい分違うと思います。教師をしているとせっかちになるのですよ。人間が見えてくると、ペースのゆっくりした子は3年たつか5年たつかで夢が出てくるので、ゆっくり付き合ってやろうという態度も必要だと思います。人生にはペースがあるから、その子のペースにのっていきましょう。非常にありがたいことに、死んだほうがましだとか、何もする気はないと言っている子でも、辛抱強く待っているとやがてじわじわと出て来て、やるものです。やりだすとものすごくやる子がいます。青年期に頑張っている子はそれはそれで結構なのです。みんな人生その人その人のペースが違うのですね。この子はこういうペースでやっている。また、この子はこういうペースでやっているということがわからないと人生の面白さはないと思います。そして、人間は相当変わっていくものです。長い目で見ていると、付き合いも長く続き、人生はなかなか面白いなあということがわかってきます。そして、それぐらいの長いペースで見ていかないと、今の青春の夢は出てこないのではないでしょうか。

第39回研究大会

『日本社会の構造と教育』

共立女子大学学長　阿部　謹也　氏

80年代のウォークマン、ビデオ、90年代の携帯電話、Eメールに代表されるＩＴメディアの発達が、人間関係、特に青少年にどのような影響を与えるのかが大きな問題だ。

ウォークマンや携帯電話に典型されるように、「個人化」がすすんでいると専門家が指摘するところであるが、はたして現在の状況を「個人化」といえるだろうか。

ヨーロッパにおける「個人」の概念は、12,3世紀に始まるが、日本に於けるそれは、明治17年、西周たちにより、当時の世界状況の中で日本が、立ち行くために日本を近代化せざるを得ない中で言葉として生まれてきた。それは、欧米の学問（「文字と数字」を媒介）をなぞる形で現代にまで至っている。日本の「個人」のあり方とヨーロッパのそれは本質的に違うように思う。

日本は明治以降、富国強兵で、第２次世界大戦までの短期間に確かに近代化を遂げ、同時に日本に於ける「個人」の考え方も欧米と同じものと思っている。しかし、第２次世界大戦の「個人」を犠牲にした日本の戦いぶりに、欧米は、日本には「個人」は、存在しないと見ていた。すなわち明治17年の「個人」という言葉は、欧米にあわせるための形式にすぎなかった。そして、現実には富国強兵・殖産興業の中で様々な近代的な制度（工場、政府、法律、教育など）はうまれたが、人間関係（親子の関係、兄弟の関係、先祖との関係、天皇との関係）は、近代化されないままでの「個人」であった。それは、キリスト教が受け入れられていない（キリスト教的個人観、西欧的な人間観が受け入れられない）ことからも明らかだ。

私は日本社会を構成するものを、「文字」・「数字」・「論理」を中心とする近代化システムと「言葉」・「行動」・「義理人情」を中心とする歴史的・伝統的システムというダブルスタンダードなものと考えている。この両方のシステムをよく知っていてうまく利用した人が優れたリーダーと呼ばれた人達であった。

ここ数年優れたリーダーがいなくなったといわれたり様々な事件が発生しているが、それは、近代化のシステムが従来のようにうまく機能しなくなり、この２つのシステムの関係がはっきりとあらわれてきたからだ。従来金科玉条のように思われた近代化システムがそのままでは動かない事態（ポストモダン）となり、結果的に伝統的システムだけですべてを処そうとするからだ。これはアメリカでも同様で、人権、平等、自由の空洞化を招いている。

我々全員がこのようなダブルスタンダードの中で生きるなかで、個人の問題に引き寄せて考えると自分の位置づけがある。

日本ではヨーロッパの個人概念は、教育の中で理想として教えながら現実には実践されなかった。ヨーロッパの個人の背景には罪の意識と俗信の徹底的な排除があり、「近代化システム」だけで社会をつくろうとするところがあった。

私達は短い一生を自己を確立して死にたい、自分が思うように生きたいと考える時、直面するのがどちらのシステムで自己を確立するかだが、近代的システムだけで暮らすことはできないということは皆知っており、日本で近代的自我を確立するのは不可能だ。社会の中で生きて行くとき、両方のシステムを含めたこの２つのシステムの中での自己を自覚することが大事だと考える。そして、「世間」など従来の学問で対象とならなかった後者のシステムの対象化も必要だ。

「世間」でどのように生きていくかを考えると、これは一人で背負うことはできないと思う。それには、悩みを共通する人間が集まって、飲食を共にし「死」について考えることだと思う。「死」は、人々が共有していることであり、それに対して我々がどういう姿勢で生きるかが、２つのシステムの中での自己を自覚するきっかけになるからだ。

ヴァーチャルな関係での様々な技術が先行しているが、真の「個人」がいるかいないかがはっきりしない中で、若者の個人主義化を諌めても意味がない。むしろ、大人も子供も「エゴ」になりつつあることの方が重要な問題だ。

地区支部

～ この10年の歩み ～

石狩支部 …… 23　北空知支部 …… 30　釧路支部 …… 36
渡島支部 …… 26　上川支部 …… 31　根室支部 …… 37
檜山支部 …… 27　留萌支部 …… 33　十勝支部 …… 38
後志支部 …… 28　宗谷支部 …… 34　胆振支部 …… 39
南空知支部 …… 29　網走支部 …… 35　日高支部 …… 40

石狩 支部

1　地区の概況

石狩支部は、札幌、江別、千歳、恵庭、北広島、石狩、当別、浜益の市町村を抱える支部で、平成14年度の学校状況は、高等学校71校、高等養護学校15校、行政機関6である。

2　会員数の推移、歴代支部長・事務局長

10年間の会員数の推移をみると、年々減少する傾向にあり、各学校の協力得て、会員登録数の増加を図るための検討をする必要がある。

会員数推移

年　度	平成5	平成6	平成7	平成8	平成9
会員数	1711	1686	1686	1564	1450
年　度	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14
会員数	1448	1339	1258	1222	1149

歴代の支部長・事務局校は、2年程度で交代し、支部の運営に当たり、会員の啓発に努めている。

歴代支部長・事務局長

年度	支部長	事務局校	事務担当者
平4	近藤　晃	札幌平岡高校	長谷川伶一
5	三原　正士	札幌平岡高校	長谷川伶一
6	谷澤　一雄	北広島西	中川喜久雄
7	谷澤　一雄	北広島西	中川喜久雄
8	井戸　英樹	札幌厚別	土橋　文雄
9	井戸　英樹	札幌厚別	土橋　文雄
10	小松　翼	札幌篠路	大谷　正信
11	小松　翼	札幌篠路	大谷　正信
12	渡部　義徳	石狩南高校	会田　悟
13	菅原　正利	石狩南高校	会田　悟
14	武村　宗彦	札幌稲西高校	鈴木　哲

3　支部活動

本支部には、昭和50年から施行された規約があり、申し合わせ事項で支部主催の事業に対して助成することになっており、平成14年度は、申請のあった4部会に助成を行っている。

支部研修活動（最近3カ年）

年度	開催部会名
平成12	国語部会、英語部会、養護部会、家庭科部会（4部会）
13	国語部会、英語部会、養護部会、家庭科部会（4部会）
14	国語部会、英語部会、養護部会、家庭科部会（4部会）

4　研究発表者および研究紀要掲載者

本支部は、会員数千名以上を擁し、毎年多くの方々が研究発表、研究紀要への論文掲載に積極的に応じ、研究会の発展に貢献している。

研究発表者・研究紀要掲載者

年度	項目	学校名	氏名	教科
平4	研発	大麻	荘司 信一	現社
		札幌丘珠	岡積 義雄	地理
		札幌啓成	中西 勝範	数学
		札幌新川	児玉 昌平	理科
		北広島西	大久保政俊	物理
		札幌開成	鶴岡 森昭	物理
		札幌藻岩	山田 大隆	
		札幌静修	星野 フサ	地学
		大麻	野屋敷裕泰	美術
		札幌東商業	櫻井 敦	書道
		札幌白石	伊藤 一正	英語
	紀要	札幌月寒	石本 裕之	社会
		札幌真栄	石山 英一	理科
		札幌南	村上 一彦	英語
		札幌南	安嶋 真知	家庭
		札幌東	阿部 広美	
		札幌星園	鈴木里津子	
		札幌開成	永井あけ美	
5	研発	札幌稲西	後藤 優司	数学
		北広島西	澤田 八郎	理科
		札幌藻岩	山田 大隆	理科
		札幌手稲	小島 修二	理科
		札幌拓北	綿路 昌史	理科
		札幌南陵	菅原 陽	物理
		札幌新川	米永 道裕	化学
		札幌開成	鶴岡 森昭	化学
		札幌稲北	佐野 淳之	生物
		札幌月寒	山形 恒則	英語
		札幌工業	横田 潤一	工業
	紀要	札幌平岡	堀田 直子	国語
		札幌開成	武田 秀治	社会
		札幌丘珠	田口 聡美	養護
		大麻	田口由美子	
		札幌拓北	門崎 千代	
		恵庭北	藤森美智子	
		札幌啓北商業	寺崎 敏之	英語
		札幌藻岩	山田 大隆	研究調査
6	研発	恵庭南	上野 直幸	国語
		北広島西	澤田 八郎	理科
		札幌藻岩	山田 大隆	理科
		札幌藻岩	児玉 昌平	理科
			春日 秀夫	
		札幌北	橋本 光雄	理科
		当別	渡邊 儀輝	物理
		札幌琴似工業	今野 博行	物理
		札幌藻岩	永盛 拓行	生物
			春日 秀夫	
		札幌新川	佐藤 昌弘	保健体育
		札幌啓北商業	長崎 威	商業
	紀要	札幌大麻	鍵谷 好徳	教職一般
		札幌開成	武田 秀治	社会
		札幌東	大山 斉	数学
		札幌藻岩	山田 大隆	理科
		札幌東商業	柴田 重則	商業
		札幌開成	鶴岡 森昭	研究調査
		札幌拓北	門崎 千代	研究調査
		恵庭南	藤森美智子	
		札幌丘珠	田口 聡美	
		札幌月寒	兼平さゆり	
		石狩南	藤田 博美	
7	研発	札幌篠路	塚田 敏信	現社
		札幌開成	西村 喜憲	日本史
		札幌南陵	木村 浩	倫理
		札幌平岡	松本 睦郎	数学
		札幌藻岩	山田 大隆	理科
		札幌東陵	西出 雅成	理科
		札幌厚別	玉利 和宏	化学
		札幌清田	佐藤 輝夫	生物
		札幌清田	門脇 覚	保健体育
		札幌西	鵜沼 均	美術
		札幌琴似工業	八尾 寿輔	工業
		札幌東商業	佐藤 雄一	商業
	紀要	札幌開成	鶴岡 森昭	教職一般
		札幌東陵	佐々木教夫	教職一般
		札幌開成	武田 秀治	社会
		札幌開成	西村 喜憲	社会
		北広島西	澤田 八郎	理科
		札幌東商業	柴田 重則	商業
		札幌藻岩	山田 大隆	研究調査
8	研発	札幌国際情報	佐藤英三子	国語
		札幌稲西	中村 和之	日本史
		札幌清田	中山 弘章	世界史
		札幌琴似工業	塙 浩伸	地理
		札幌静修	星野 フサ	理科
		国際情報	北澤 新	
		第一	萩原 法子	
		手稲	吉村 弘	
		札幌星園	杉山 剛英	化学
		千歳北陽	土坂 一	書道
		札幌厚別	稲毛 知子	英語
	紀要	札幌開成	武田 秀治	社会
		札幌北	中村 亮三	数学
		札幌東	大山 斉	
		札幌新川	中村 文則	
		札幌稲北	早苗 雅史	
		札幌藻岩	菅原 満	
		札幌白陵	玉利 和弘	理科
		札幌清田	佐藤 輝夫	理科

		札幌篠路	枡谷　隆男	音楽
		札幌北	高橋　誠	英語
		札幌工業	伊藤　茂樹	工業
		札幌新川	西田　典博	商業
9	研発	札幌西	東谷　一彦	国語
		野幌	吉岡　剛孝	地理
		札幌啓北商業	小野　容明	倫理
		札幌厚別	木村　哲也	政経
		札幌星園	杉山　剛英	物理
		札幌星園	松井　洋	生物
		札幌静修	星野　フサ	総合理科
		国際情報	北澤　新	
		第一	萩原　法子	
		野幌	吉田　哲	
		札幌北	大村　通子	養護
		札幌真栄	桶谷　充昭	書道
	紀要	札幌清田	佐藤　輝夫	理科
		札幌南	皆川　一雄	数学
		札幌開成	鶴岡　森昭	理科
		千歳北陽	中内　勝美	商業
		札幌工業	横田　潤一	工業
10	研発	北広島西	西　寛	世界史
		札幌星園	長谷　厳	日本史
		千歳	西薗　正規	倫理
		札幌静修	星野　フサ	総合理科
		第一	萩原　法子	
		野幌	吉田　哲	
		開成	山田　大隆	
		札幌開成	鶴岡　森昭	総合理科
		札幌南陵	菅原　陽	化学
		恵庭北	三浦　隆詔	生物
		有朋	村中　淑秀	地学
		札幌稲北	寺井　浩之	英語
		当別	東　昌江	家庭
	紀要	札幌北陵	小林　志保	教職一般
		大麻	森田　裕	教職一般
		千歳北陽	山崎　勲	国語
		札幌南陵	吉田　徹	社会
		札幌開成	山田　大隆	理科
		札幌拓北	門崎　千代	養護
		札幌新川	吉岡　隆	美術
		札幌国際情報	古室　信行	商業
11	研発	札幌清田	船塚　敦子	倫理
		札幌拓北	時岡　郁夫	数学
		札幌静修	星野　フサ	総合理科
		札幌静修	星野　フサ	総合理科
		第一	萩原　法子	
		札幌南	吉川　浩之	
		札幌開成	山田　大隆	総合理科
		札幌厚別	上杉　正三	保健体育
		当別	小川　博水	書道
		北広島	金生　浩一	英語
		江別	紀國　明子	家庭
		札幌工業	高崎　格	工業
	紀要	札幌開成	鶴岡　森昭	教職一般
		札幌国際情報	松澤　剛	社会
		札幌星園	杉山　剛英	理科
		札幌篠路	枡谷　隆男	音楽
		札幌平岸	高見　真也	保健体育
12	研発	札幌手稲	吉瀬　献策	国語
		札幌平岡	白鳥　真次	数学
		札幌開成	山田　大隆	総合理科
		山の手養護	尾崎　寿春	化学
		石狩南	倉本　勉	生物
		札幌北陵	数馬田　基	保健体育
		北嶺	小西　敏弘	英語
	紀要	札幌開成	山田　大隆	理科
		札幌平岸	熊谷　修司	英語
		札幌工業	小幡　圭二	工業
		札幌国際情報	別所　正一	商業
13	研発	札幌北	影山　智一	国語
			神村三枝子	
			村中俊一郎	
		北広島	高橋　一矢	世界史
		恵庭北	蛯子　賢一	日本史
		札幌西	伊藤　浩次	数学
		札幌静修	星野　フサ	総合理科
		札幌第一	飯渕　興喜	総合理科
		札幌拓北	田村早奈英	生物
		札幌南	箱崎　陽一	生物
		札幌北	高橋　昭仁	生物
		札幌藻岩	近藤　壽	保健体育
		札幌篠路	鎌田　明美	養護
		千歳	鈴木　淳	英語
		札幌真栄	片岡　晃	英語
		江別	後藤あゆみ	家庭
		札幌国際情報	藤村　洋之	工業
		札幌国際情報	難波　繁之	商業
	紀要	札幌開成	山田　大隆	理科
		札幌南陵	俵谷　俊彦	英語

5　今後の展望

石狩支部の今後は、本部事務局との連携を深め、会員数の増加に努め、会員各位が更なる研究実践を積み重ね、50周年と続く本研究会の発展・充実を支え、会員と本研究会がともに飛躍されることを期待し、課題としたい。

（札幌稲西高等学校教頭　　鈴木　哲）

渡　島 支部

1　渡島地区の概況

渡島地区は、陸・海・空の交通の要衝として、また、南北海道における行政、経済、文化の要、函館市を中心に栄えてきた地区であるが、市内だけでもこの10年間で約３万人の人口が減少している。また、少子化の影響を受け、中学校卒業者も激減し、この10年間に渡島管内高等学校の学級数は40学級減少し（平成５年度164、平成14年度124）、適正配置計画による高校再編問題が浮上している。

今年度、渡島地区の学校状況は、公立・私立の高等学校合わせて29校であるが、今後も更に中学校卒業者の減少傾向が続くことが予想され、教員数も減少し、会員数を維持していくことが、大きな課題である。

会員数推移

年　度	平成５	平成６	平成７	平成８	平成９
会員数	320	319	295	282	277
年　度	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14
会員数	276	256	263	255	245

※平成14年度は７月３日現在

2　歴代支部長・事務局

支部長校は市内校を中心に担当しているが、ここ10年間は、３年交代で運営に当たり、会員の啓発に努めている。

支部長・事務局・事務担当者

年度	支部長	事務局	事務担当者
5	小川　賢三	函館工業高校	吉谷　啓一
6	金子　盛夫	函館工業高校	小田原　要
7	金子　盛夫	函館工業高校	小田原　要
8	小林　優幸	函館西高校	馬場　秀治
9	石岡　博心	函館西高校	馬場　秀治
10	石岡　博心	函館西高校	馬場　秀治
11	三田　繁治	函館商業高校	羽廣　實
12	三田　繁治	函館商業高校	羽廣　實
13	海老子格行	函館商業高校	佐藤　強
14	菊池　隆夫	函館北高校	佐藤　裕寛

3　研究発表者及び研究紀要掲載者

渡島地区高等学校29校の内訳は、道立高校が17校、市町村立高校が４校、私立高校が８校である。この中で、職業教育の拠点校が、大野緒農業高校、函館工業高校、函館商業高校、函館水産高校の４校で、必然的にそれら拠点校の研究発表や研究紀要掲載が多くなっている。また、郡部校の積極的な研修への取り組みの成果もあって、この10年間の研究発表者が26名、研究紀要掲載者が11名と充実した内容になっている。

今後も、より一層の研鑽に努め、完全学校週５日制や新学習指導要領に対応する研修活動の実践に努め、当地区から積極的に日常の教育実践を発表し、本道教育の発展に貢献したい。

研究発表者・研究紀要掲載者

年度	項目	学校名	氏名	教科
5	研発	函館水産高校	三浦　省吾	水産
	〃	〃	谷口潤一郎	〃
	〃	戸井高校	藤原　啓展	〃
	紀要	南茅部高校	加藤　文子	数学
	〃	〃	畑　進	〃
	〃	〃	五十嵐靖一	〃
	〃	函館陵北高校	小林　敏雄	芸術
6	研発	函館水産高校	森越　則夫	水産
	紀要	函館水産高校	鈴木　一幸	水産
7	研発	知内高校	盛田　光則	保体
	〃	函館北高校	鈴木　孝徳	芸術
	〃	函館水産高校	齋藤　睦子	家庭
	〃	恵山高校	坂田　一重	〃
	〃	函館工業高校	向井地康弘	工業
	〃	函館水産高校	藤本　尚志	水産
8	研発	函館西高校	斎藤　邦展	数学
	紀要	戸井高校	竹田　信一	理科
	〃	戸井高校	永川　修治	水産
9	研発	函館北高校	日向　稔	理科
	〃	遺愛女子高校	雁沢　夏子	理科
	〃	函館陵北高校	小林　敏雄	芸術
	〃	函館水産高校	西村　紀夫	水産
	紀要	函館商業高校	吉本　満	商業
	〃	函館中部高校	高瀬　容子	国語
10	研発	七飯高校	古屋　睦雄	理科
11	研発	八雲高校	福井　朋美	地歴
	〃	長万部高校	梅澤　謙	理科
	〃	七飯高校	佐藤臨太郎	英語
	〃	大野農業高校	岡本　幹也	農業
	紀要	函館水産高校	西川　正一	水産
12	研発	函館工業高校	谷本　健一	理科
	〃	函館水産高校	西川　正一	水産
13	研発	恵山高校	安塾　宏和	地歴
	〃	函館商業高校	加藤　友秋	理科
	〃	上磯高校	土屋　三枝	家庭
	〃	函館水産高校	三輪　孝明	水産
	紀要	南茅部高校	川崎　知文	商業

檜　山 支部

1　概況

檜山支部が発足したのは昭和58年であり、それまで道南支部に含まれていた。

道南地区が再編成され、渡島支部と同時に檜山支部が誕生した。他地区に比較すると独自の活動の歴史が浅い支部である。

檜山管内はもともと小規模校が多い地域であるが、近年の過疎化・少子化の進行による学級数の減少や特例間口化などで教員定数が減少し、それが会員数の減少にもつながっている。また、高教研の研究大会への参加は、管内の教員にとっては貴重な研修の機会であるが、旅費等の制約もあり、会員数だけでなく、研究大会への参加数も減少傾向にある。各学校の協力を得て、会員数の増加と、研究大会への参加者増を図っていく必要がある。

2　年度別支部長・事務担当者・会員数

年度	支部長	事務担当者	会員数
5	佐々木　春夫	白鳥　信一	112
6	佐々木　春夫	白鳥　信一	114
7	奥山　忠	紺野　勝	123
8	奥山　忠	紺野　勝	122
9	中野　隆義	伊藤　宗武	94
10	中野　隆義	伊藤　宗武	87
11	中野　隆義	渡辺　省司	99
12	野土谷　捷彦	渡辺　省司	92
13	野土谷　捷彦	谷川　信幸	95
14	井上　晴雄	谷川　信幸	86

支部長　熊石高校長、事務担当者　熊石高校教頭

3　平成14年度支部役員名

役員	氏名	高校名	職名
支部長	井上　晴雄	熊石	校長
副支部長	大山　芳男	江差	校長
副支部長	谷川　信幸	熊石	教頭
幹事	山田　英二	江差	教頭
幹事	佐々木　裕	江差	教頭
幹事	中山　大二郎	檜山北	教頭
幹事	小向　敏文	奥尻	教頭
幹事	房崎　善隆	上ノ国	教頭
幹事	塚本　清	瀬棚商業	教頭
幹事	菅野　誠	大成	教頭
国語	熊木　啓二	檜山北	教諭
地歴公民	藤野　雅省	熊石	教諭
数学	池田　健	大成	教諭
理科	永井　一郎	江差	教諭
保体	米地　悟	熊石	教諭
養護	奥村　伸子	江差	教諭
芸術	辻　正博	奥尻	教諭
英語	園家　博道	上ノ国	教諭
家庭	木曽　満利子	檜山北	教諭
工業	浅野　吉保	江差南	教諭
商業	池田　隆	瀬棚商業	教諭

4　活動状況

檜山管内では、高教研の地区支部発足の10数年前に、「檜山管内高等学校教育研究会」（略称管内研）が発足し、全体集会及び教科部会を開催して、現在まで活発な研究活動と情報の交換を積み重ね、成果をあげてきている。この管内研が、特に教科の面では檜山管内の高校での研究活動の中心となってきたこともあり、高教研の檜山地区支部としての独自の研究活動は従来行なわれてこなかった。

そのため、ここでは、平成14年度の管内研の事業概要を記して活動の報告に代える。

管内研では各教科部会の研究集会は原則として２日日程で開催されている。授業公開や研究協議などが行われているが、参加者が宿泊をともにすることで懇親がより深められており、小規模校が多い檜山管内では、貴重な情報交換の機会となっている。また、全体会は分掌中心で、全体講演の後、教務・生徒指導・進路指導・学校経営の各分科会に分かれ研究協議が行われている。

平成14年度檜山管内高等学校教育研究会（開催日順）

教科	開催日	当番校
理科	9月4日・5日	瀬棚商業
保健体育	9月12日・13日	熊石
国語	9月18日	大成
家庭	9月26日・27日	江差南
地歴公民	10月3日・4日	江差
養護	10月8日・9日	上ノ国
英語	10月21日・22日	江差
数学	10月24日・25日	檜山北
芸術	10月9日	奥尻
商業	11月19日・20日	江差南
全体会	12月9日	檜山北

※英語は例年、檜山管内中学校英語教育研究会と合同開催している。

5　今後の展望

今後の支部活動としては、会員数の増加に努めるとともに、管内研に対して地区支部が積極的に協力していくことや、独自の研修の機会を持つことも考えていきたい。

（熊石高等学校教頭　　谷川　信幸）

後　志 支部

1　後志地区の概況

後志地区は、積丹半島を囲む北海道の南西部に位置し、1市13町6村で構成されている。中央部には羊蹄山（支笏洞爺国立公園）、ニセコ連峰。海岸線は、ニセコ積丹小樽海岸国定公園に指定され、自然美豊かな地である。産業は、小樽市の商業、北後志の果樹、羊蹄山ろくの畑作（一部水稲）、さらに沿岸部の水産業と多様な産業がみられ、その歴史も古い。

人口の減少は年を追うごとに激しく、平成4年度には4千人を超えていた中学校卒業者数は、12年度には3千人を割り、今後その傾向はさらに厳しさを増し地域経済にも深刻な影響を及ぼすものと考えられる。

2　会員数の推移、歴代支部長・事務担当者

少子化の傾向に伴って、管内の高等学校（道立15校、町村立3校、私立4校）では間口減、教員数の減少という状況にあり、当支部も会員数の減少が続いてきたが、13年度からは、各学校の理解と協力を得て、再び会員数の増加が図られてきたところである。

《会員数の推移》

年　度	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
会員数	265	261	241	219	209	208	192	194	221	256

《歴代支部長・事務担当者》

年度	支部長	支部長校	事務担当者
5	齋藤　公生	寿都高校	首藤　義美
6	石川　光男	ニセコ高校	五日市茲郎
7	石川　光男	ニセコ高校	小笠原道行
8	前田　暁男	真狩高校	小野武二三
9	相羽　宣聿	真狩高校	藤田　洋三
10	佐藤　幹雄	喜茂別高校	山田　直秀
11	佐藤　幹雄	喜茂別高校	石井　関夫
12	長　祐弘	留寿都高校	宮本　進
13	長　祐弘	留寿都高校	大城　吉史
14	松下　榮顯	蘭越高校	髙橋　渡

3　支部活動

地区支部として、会員相互の研修活動を実施すべく、毎年度の支部長が努力をしているが、支部全体としての取り組みまでにはならず、本教育研究会への参加を促すことにとどまっているのが現状である。

しかし、当地区には各教科の研究会、各分掌等の部会、教育相談研究会、養護教諭部会等があり各研究会・部会は活発に活動を行っているところであり、当地区での実践を踏まえ、本教育研究会に臨むことでさらに会員の研鑽が深められてきた。

会員の減少とともに本教育研究会への出席者も減少傾向にあったが、ここ数年出席率の向上のため、毎年度の支部長が機会あるごとに出席の呼びかけをしている。その結果、平成14年度の会員数はこの10年間のピーク時に近い数までになり、本教育研究会への参加者も徐々に増えてきている。

4　研究紀要掲載者

《研究紀要掲載者》

〈平成5年度〉

○常丸　一也（小樽潮陵高校）
「オーストラリアの教育事情」

○竹内　篤子（留寿都高校）　谷内　聡子（真狩高校）
「家庭一般の男女必修の実践」

○高嶋　一成（小樽水産高校）
「潜水教育について－最適な指導法の研究－」

〈平成6年度〉

○城座　研一（古平高校）
「私の樺太、サハリン歴史紀行（前編）」

〈平成7年度〉

○城座　研一（古平高校）
「私の樺太、サハリン歴史紀行（後編）」

○島田　政幸（小樽水産高校）
「科目『水産情報処理』及び『水産情報技術』の指導について－新技術の導入－」

〈平成10年度〉

○亀山　喜明（小樽水産高校）
「水産食品におけるＨＡＣＣＰシステムについて」

〈平成13年度〉

○髙山　浩志（小樽水産高校）
「大型船設計と艤装の実際」

《研究発表者－平成１３年度分のみ－》

○〔数学部会〕松本　啓（蘭越高校）
「電卓を利用した正弦定理、余弦定理の指導法について」

○〔理科部会（化学）〕佐藤　正則（倶知安農業高校）
「高校化学の授業－私がやってみたこと－」

○〔水産部会〕新川　智憲（小樽水産高校）
「海洋環境について」

5　今後の展望

今後の支部活動としては、会員数並びに参加者の増加に努めるとともに、会員各位が日頃積み重ねた教育実践を、本教育研究会の発展に結びつけていくように働きかけていきたい。

（蘭越高等学校教頭　　髙橋　　渡）

南空知 支部

1　南空知地区の概況

南空知地区は、産炭地の閉山に伴い人口減少の一途をたどってきた。それに伴い高校も統廃合がおこなわれてきた。平成14年度には、夕張緑ヶ丘実業高校が閉校することになる。

今年度、当地区の学校状況は、高等学校16校、高等養護学校２校、養護学校２校で、10年前の平成４年と比較すると、高等学校２減、高等養護１増、養護学校２増である。

2　会員数の推移、歴代素部長・事務局長

過去10年間の推移を見ると減少の一途をたどっている。本研究会の意義を今一度認識し、会員の増加を図っていく必要が急務である。また、同時に本研究会自体魅力あるものにしていかなければならないと考える。

会員数の推移

年　度	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
会員数	221	231	224	213	202	195	171	180	161	154

支部長校は、平成９年岩見沢東高校から南幌高校に移り５年が経過いたしました。今後、しばらくこの状態で運営にあたり、会員の啓発に努めているところです。

歴代支部長・事務局長

年度	支部長	事務局校	事務局長
5	玉山　重嗣	岩見沢東高校	久保田　攻
6	長谷川圭作	岩見沢東高校	久保田　攻
7	長谷川圭作	岩見沢東高校	田中　史郎
8	安尻　大輔	岩見沢東高校	田中　史郎
9	平田　暢夫	南幌高校	佐波　宏史
10	平田　暢夫	南幌高校	佐波　宏史
11	倉地　基雄	南幌高校	佐波　宏史
12	倉地　基雄	南幌高校	佐波　宏史
13	三栗　毅	南幌高校	松井　則之
14	三栗　毅	南幌高校	松井　則之

3　支部活動

会員相互の研修活動を地区支部として確立すべく、毎年度の支部長が努力をしているが、当地区には南空知高等学校連盟のもとに、各部会、研究会が活発におこなわれている。このようなことで、支部高教研としては特別に行事を行ってこなかった状況であった。

平成12年度に支部規約（案）を作成し、平成13年第一回地区支部総会を開催し、規約の決定をみた。そのおり、今後の支部高教研としての活動を充実発展させるためにどのような取組が考えられるか等活発な意見交換がされた。

4　研究発表者および研究紀要掲載者

毎年１月に行われる研究大会には多くの会員が参加し、また、研発や紀要への論文掲載も行われてきた。

今後も積極的に多くの会員に働きかけて、本道の教育発展のために頑張っていきたい。

研究発表者・研究紀要掲載者

年度	項目	学校名	氏名	教科
7	紀要	栗山高校	石田リエコ	家庭
	〃	栗山高校	高橋　理緒	〃
9	研発	岩見沢西高校	杉山　四郎	日本史
9	研発	岩見沢東高校	田邊　彰宏	理科
10	研発	夕張緑ヶ丘実業高校	桑島　宏明	数学
10	研発	岩見沢農業高校	近江　勉	農業
12	紀要	岩見沢西高校	加藤　渾一	数学
13	紀要	美唄高校	辻　伸也	数学

5　今後の展望

本研究会が今後ますます発展するために、支部活動として何をしていかなければならないかを明確にし、その解決に向けた具体的方策を立てていかなければならないと感じる。

① 会員増加に努める

② 支部の魅力有る活動を積極的に進める

今後、地区支部としてこの２点について積極的に取組んでいきたい。

（南幌高等学校教頭　　松井　則之）

北空知 支部

1　北空知の概況

北空知管内は、炭坑閉山に伴い、各市町村の人口が激減し、同様に管内各高等学校生徒数においても平成5年に1,458名であったのが平成14年には1,013名で著しく減少した。その間、滝川北高校、秩父別高校が閉校し、間口数も当然削減された。今後、更に少子化が進み平成17年度には、一挙に873名程度に予想される。現在、芦別・砂川市内の学校では、学校統合計画が進められている。また5市7町村の合併問題が提示されている状況である。しかし、市町村合併問題は課題も多く、なかなか難しい状況下にもある。当然学校統合あるいは、各学校間口削減が実施され何校かの閉校といった状況も考えられる。

2　会員数の推移・歴代支部長・事務長

過去には、300名を越える会員数を誇った時代もあったが、学校の閉校あるいは、間口減に伴っての教員数が減少している現状である。しかしながら減少の原因は、上記の理由ばかりではないのではなかろうか。

今、改めて会員減少の原因を探り、高教研の在り方を再度見直し、新たな方策を立て会員数の増加を図っていく必要があるのではなかろうか。

会員数推移

年　度	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
会員数	238	228	212	194	186	171	179	159	133	126

※平成11年滝川北高校・平成12年秩父別高校閉校。

歴代支部長・事務局

年度	支部長	事務局校	事務担当者
5	関原　沖	滝川北高校	斉藤　英夫
6	倉部　哲郎	砂川南高校	永田　政允
7	畠山　禎之	砂川南高校	永田　政允
8	保格　秀雄	秩父別高校	富崎　敏憲
9	保格　秀雄	秩父別高校	富崎　敏憲
10	浅野　隆	赤平高校	伊早坂政宏
11	村瀬　眞	赤平高校	伊早坂政宏
12	室崎　卯人	滝川工業高校	吉田　洋
13	室崎　卯人	滝川工業高校	昆野　茂
14	真野　進	歌志内高校	森塚　勝敏

3　支部活動

北空知支部においては、活動は総会の開催位で、特別な取り組みはしていない。しかし、各教科サークル教務・生徒指導・進路指導部会・養護部会・北理研・家庭科研・商業研・倫理社会研・教育相談研・その他の研究会等では、活発に研究協議研修を実施している。

4　研究発表者及び研究紀要掲載者

この10年間において、下記のとおり多くの先生方の研究発表及び研究紀要への論文掲載がされた。これも偏に日常の教育実践の賜であり、それは生徒のための教育の軌跡でもある。常に課題を持ち研修を行う姿勢は、教師としての本来あるべき姿ではなかろうか。

今、教師の資質の向上が求められる中、多くの教師一人ひとりが「教育」を見つめ直し、研修意欲を高め教育活動に励んでいただきたい。

研究発表者・研究紀要掲載者

年度	項目	学校名	氏名	教科
5	紀要	深川東商業高校	笹原　光雄	商業
6	研発	芦別総合技術高校	新井田正廣	商業
	〃	〃	末岡　正嗣	〃
	研発	妹背牛商業高校	宮川　重徳	商業
	〃	〃	能勢　保幸	〃
	紀要	深川東商業高校	金子　義之	商業
	〃	滝川西高校	高石　克美	商業
7	研発	滝川西高校	高石　克美	商業
8	研発	芦別高校	吉田　哲	理科
	研発	幌加内高校	佐藤　康則	農業
	研発	芦別総合技術高校	柿原　幸一	工業
	〃	〃	細越　大安	工業
	紀要	芦別総合技術高校	一岡外喜男	工業
	〃	〃	細越　大安	〃
	〃	〃	小野　博道	〃
9	研発	妹背牛商業高校	藤村　一宏	商業
	〃	〃	佐々木　勇	〃
	〃	芦別総合技術高校	菊池　智宏	商業
		深川東商業高校	小川　篤子	家庭
10	研発	滝川高校	三浦　治彦	化学
	〃	妹背牛商業高校	宮澤　一	数学
	〃	滝川高校	小野寺　徹	地理
	紀要	滝川高校	本間　勲	社会
	〃	芦別総合技術高校	吉井優紀彦	総合
11	研発	深川東商業高校	北川　博文	英語
	〃	芦別総合技術高校	山名みのり	家庭
12	研発	歌志内高校	森田　泰史	物理
	〃	幌加内高校	西嶋　満	化学
	〃	深川東商業高校	鈴木　裕志	商業
		〃	国枝　拓	〃
13	研発	沼田高校	尾崎　慎一	英語
	〃	砂川南高校	足利　晃洋	書道
	紀要	芦別高校	坂田　剛一	数学
	〃	滝川工業高校	石田　裕	工業
		歌志内高校	笹原　朋子	家庭

5　今後の展望

今、会員数の減少に対して、高教研の在り方を再度見直す時期にきているのではないか。また、支部においてそれぞれの研修機関の合併も視野に入れ、新たな発想の転換が必要に思われる。なお、今後も多くの人たちへの加入の呼びかけを推奨していきたい。

（歌志内高等学校教頭　　森塚　勝敏）

上　川　支部

1　支部の概況

本支部は、昭和47年の高校長協会の地区割りの変更にともない、旭川支部と名寄地区の一部を合わせ、上川支部とした。現在の加盟校は、道立高校27校、市町村立高校５校、私立高校２校で合計34校である。

2　会員数の推移

本支部創立時の昭和37年度には223名、10周年の昭和47年度は支部改変により774名、昭和48年度は789名で会員数がピークであった。20周年の昭和57年度は643名、30周年の平成４年度は488名と減少した。40周年の今年平成14年度は288名である。

年　度	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
会員数	487	462	473	409	396	403	339	321	301	288

3　支部の組織

支部長は創立当初は昭和38年度から昭和42年度の５年間、旭川東高校長が務めた。昭和43年度からは旭川市内の校長が２年間ずつの持ち回りとすることになった。

支部長　１　名
副支部長　２　名……次期支部長校の校長　１名
　　名寄高等学校教頭　１名
監・事　２　名……次期支部長校の教頭　１名
　　旭川市内高校教頭　１名
幹　事　若干名……監事以外の旭川市内高校教頭
教科理事　各教科　１名

4　歴代支部長並びに事務局

年度	支部長	事務局校	事務担当者
5	奥田　利恒	旭川東栄高校	笈川　晃一
6	三沢　治	旭川農業高校	関　晃
7	横山　弘	〃	〃
8	本間　良英	旭川北都商業高校	伊勢　幸久
9	〃	〃	〃
10	渡辺　忠男	旭川南高校	山本　悠二
11	〃	〃	笠井　孝美
12	河村　勁	旭川東高校	中川　和憲
13	〃	〃	〃
14	林　勝敏	旭川西高校	髙久　均

5　支部の活動

支部役員会は例年６月に開催し、前年度事業報告及び決算報告、当該年度会員登録状況の確認、支部役員の確認、当年度事業計画、及び本部からの連絡等を行っている。

また、支部創立当初から各教科研究会等を支援しており、毎年２～３の各研究会にそれぞれ１万円ずつ助成している。助成の支出基準は次のとおりである。

「教科研究会等助成金の支出基準について」

(1)　北海道高等学校教育研究会上川支部が主催または共催により開催される大会・研究会について補助する。

(2)　その他北海道高等学校教育研究会と関わりが深いものと支部長が判断した場合、関係役員の同意を得て、補助することができる。

本部には教科を含めて13の研究（協議）会があり、それぞれ活発に活動している。

6　研究発表者及び研究紀要掲載者

年度	項目	教科	学校名	氏名
5	研発	生物	富良野	鳴海　史郎
	〃	地学	旭川西	平松　和彦
	〃	商業	下川商業	佐藤　強
	〃	〃	〃	高橋　秀幸
	〃	〃	士別商業	木村　公治
	紀要	教務	旭川農業	山名　国裕
6	研発	日本史	和寒	土田　敏弘
	〃	理科	旭川工業	寺島　一男
	〃	工業	富良野工業	松崎　雅芳
	〃	商業	士別商業	加藤　和明
	〃	〃	〃	好川　真弘
	紀要	教務	旭川東栄	佐藤　徳崇
7	研発	世界史	名寄	出口　敬智
	〃	地理	名寄恵陵	白浜　徳博
	〃	数学	旭川凌雲	奥村　稔
	〃	物理	〃	萬木　貢
	〃	物理	上川	遠藤　孝一
	〃	英語	名寄	知志　芳彦
	〃	農業	剣淵	志賀　聡
	〃	商業	士別商業	竹内　和弘
	紀要	商業	旭川商業	管生　肇
8	研発	政経	風蓮	横山　久貴
	〃	地理	旭川工業	芳澤　文明
	〃	地学	旭川西	平松　和彦
	〃	商業	中川商業	羽澤　直敏
	紀要	家庭	名寄	田畑優香里
9	研発	世界史	士別東	矢部　和弘
	〃	家庭	富良野工業	小松　裕美
	〃	工業	旭川工業	梅内　親
	〃	商業	旭川商業	入江　潔
10	研発	総合理科	旭川東	水野　雅文
	〃	工業	名寄工業	田邊　孝次
11	研発	数学	南富良野	山崎　昌典
	〃	地学	旭川西	平松　和彦
	〃	美術	旭川凌雲	寺腰　精司
	〃	英語	旭川北	川端　一正

	〃	商　業	富良野緑峰	杉野郷圭介
	紀要	〃	士別商業	坂口　勝幸
	〃	英　語	旭川北	川端　一正
12	研発	倫　理	旭川東	伊藤　竜司
	〃	公　民	士別商業	毛利　禎晴
	〃	美　術	東川	黒川　明寛
	〃	農　業	名寄農業	赤穂　悦生
	紀要	工　業	音威子府	伊藤　茂樹
	〃	商　業	中川商業	新岡　昌幸
13	研発	政　経	風蓮	鈴木　香
	〃	総合理科	旭川東	水野　雅文
	〃	〃	〃	山岡　景寛
	〃	音　楽	旭川北	山本　文明
	〃	英　語	上川	白井　歩
	〃	家　庭	旭川工業	管野　美樹

7　今後の課題と展望

平成14年度の役員会では次のような課題について討議が行われた。

(1)　登録者数の減少の理由として

- 登録者と未登録者の間の差がなく、登録者としてのメリットがない
- 支部の各教科等の研究組織と高教研との関連が明確でなく、活動が分かりにくい
- 支部内の活動が連携を密にして行っているわけではないので、魅力が少ない

(2)　支部の活動の活性化を目指して

- 支部内の研究（協議）会と高教研下部組織としての活動の可能性を検討する
- 支部内の研究（協議）会の講師謝礼等の補助等について検討する
- 個人研究・グループ研究の支援や補助等について検討をする

今後の支部の活動としては、会員数の確保に努めるとともに、会員の日常の教育実践を支援しつつ、事業の推進や支部の充実・発展を図っていく必要がある。

（旭川高等学校教頭　　髙久　　均）

留　萌 支部

1　留萌地区の概況

北海道の西北部、日本海に面した当地区は、南北約155kmに及ぶ細長い帯状の地域で、１市７町１村で構成されている。

管内の学校状況は、小学校38校、中学校22校、高校８校、そして平成８年４月に開校した小平高等養護学校１校で、この10年間で小学校10校、中学校２校が廃校となった。このような生徒数の減少に伴い、道の高校適正配置計画は着実に実行され、平成13・14年度に於いて計４校が１間口減となった。

また、高校の数は変わらないが、平成10年４月には、それまでの留萌工業高校と留萌高校商業科が合併する形で留萌千望高校が４科から成る新たな専門高校として誕生し、平成12年４月には、遠別農業高校が農業・生活科から生産科学科に学科転換した。

2　会員数及び支部長校の推移

10年前には100名を超えていた会員数は一時期50名台まで落ち込んだが、間口減に伴う教員数の減少にも拘らず、管内各校の協力と教師自身の意識変革により、ここ１・２年は増加の傾向にある。しかし、じり貧状態にある全道的な会員数の減少傾向に歯止めをかける為にも、教師にとってより魅力的な「高教研」のあるべき姿を、会員全員が検討しなければならない時期に来ている。

＜会員数推移＞

年　度	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
会員数	92	97	83	72	60	66	58	56	67	76

＜歴代支部長・事務局＞

年度	支部長	支部長校	事務局担当
5	安田　健七	苫前商業高校	田上　幸雄
6	堀　征市	苫前商業高校	田上　幸雄
7	堀　征市	苫前商業高校	田上　幸雄
8	海老子格行	苫前商業高校	羽廣　実
9	海老子格行	苫前商業高校	羽廣　実
10	米道　知之	苫前商業高校	板宮　克芳
11	米道　知之	苫前商業高校	板宮　克芳
12	松平　憲市	増毛高校	千葉　憲一
13	野瀬　政裕	増毛高校	三國　文彦
14	野瀬　政裕	増毛高校	三國　文彦

3　支部活動

毎年、年度始めの４月と年度末の３月に、地区支部役員会と事務担当者（各校教頭）会議を開催、また会員募集締切り後の７月にも事務担当者会議を開催し、会員募集のお願い、地区支部役員・各教科責任者の依頼と確認、活動報告、会計報告、本部からの連絡事項の伝達等を行っている。また、当地区支部には道高等学校長協会留萌支部の下、各教科別研究会の他、生徒指導連絡協議会、教育相談研究会、教務担当教員研究協議会等があり、いずれも活発に活動・機能しているが、それらの中の２～３の研究会・協議会に対して、要請があれば、予算面での支援（１～２万円程度）を毎年行っている。

金銭的な支援ばかりでなく、高教研留萌支部として、独自の講演会や研究協議会を開催したいとは考えているが、なかなか実現できないのが現状である。

4　研究発表者及び研究紀要掲載者

全道的に見ても小規模の当地区支部ではあるが、毎年多くの会員が１月の研究大会に参加している。また、日常の地道な教育実践を基に、若手教員を中心に毎年のように研究発表が行われ、本道教育の発展に少なからず貢献している。この研究意欲と積極性を忘れることなく、今後も多くの発表を望みたい。

＜研究発表者・研究紀要掲載者＞

年度	項目	学校名	氏名	教科
5	研発	天塩	奥谷　忠浩	地歴
7	研紀	羽幌	石橋哲哉他	数学
	研紀	増毛	小川　正浩	英語
	研発	留萌	栗林　和宏	国語
8	研発	留萌工業	杉澤　投吉	工業
10	研発	苫前商業	保格　秀規	理科
	研発	遠別農業	竹田　満俊	農業
11	研発	増毛	古屋　順一	数学
	研発	天売	塩見　孝二	生物
	研発	羽幌	升田　重樹	保体
12	研発	留萌千望	廣川　雅之	商業
13	研発	遠別農業	関原　文明	地歴

5　今後の展望

新採用者や２校目勤務者が多く、しかも小規模校の多い当地区支部の教員は、日々の教科指導や生徒指導に追われ、なかなか他校の優れた研究や実践にまで眼が向かず、孤軍奮闘しているのが実情である。

それら若手教員が、全道の教育に大きく眼を見開き、教師間・学校間の連携を深め、互いに刺激しあい、より高い目標に向かって研修を積み重ねていくことは、これからの北海道の教育にとって不可欠であり、そのためにも、今「高教研」の果たすべき役割は大きい。

設立当初の趣旨・目的を今一度訴え、高教研の裾野を広げると共に、当地区支部の活動をより充実させ、教育という「夢」を一歩一歩実現させていきたい。

（増毛高等学校教頭　　三國　文彦）

宗　谷 支部

1　宗谷支部の概況

宗谷支部は、当初上川北部及び宗谷地区を含む名寄支部として発足し、その後昭和57年に改編・独立して今日にいたっている。

当支部の高等学校は地域の特性を反映し、普通科以外にも商業・衛生看護・看護専攻・事務情報・機械・電気・酪農生活の各科が設置されている。

当支部は道立高等学校が８校、私立高等学校が１校あり、10年前の平成５年度と比較すると、14クラス、生徒数で800人以上の大幅な減少となっており、今後も少子化により間口減等の厳しい状況が予想される。

2　会員数の推移、歴代支部長・事務長

当支部の会員数は、この10年間大きな変化は見られなかった。しかし、高等学校の間口減に伴う教員数の減少も予想されることから、今後各高等学校の一層の理解と協力を得ながら、会員数を確保していく必要がある。

会員数推移

年　度	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
会員数	113	119	112	109	113	119	113	122	117	103

支部長校は、当支部の学校数が少ないことと他の業務との関連により、豊富高校が継続して担当している。

歴代支部長・事務局

年度	支部長	事務局校	事務担当者
5	佐野　圭彦	豊富高校	吉川　悦夫
6	野津　寿一	豊富高校	吉川　悦夫
7	野津　寿一	豊富高校	坂上　栄一
8	野津　寿一	豊富高校	坂上　栄一
9	中村　喨三	豊富高校	坂上　栄一
10	中村　喨三	豊富高校	八巻　隆
11	福井　誠一	豊富高校	八巻　隆
12	福井　誠一	豊富高校	藤岡　道雄
13	小笠原英俊	豊富高校	藤岡　道雄
14	小笠原英俊	豊富高校	政野　仁

3　支部活動

当支部では、社会の変化に対応した教科指導上の諸問題について研究を深め、宗谷管内の教科担当者の資質向上と生徒の実態に応じた指導の充実を目的に、高教研支部として教科研究協議会を行っている。校長会が各学校事情等も配慮して当番校のローテーションを定め、計画的に開催してきた。この教科研究協議会は、当支部の学校数が少ないことや参加旅費等の関係で、各教科とも隔年開催となっている。

平成13年度は、数学（稚内（定）高校）、理科（稚内（定）高校）、保健体育（稚内商工高校）の各教科で実施した。また、平成14年度は、国語（豊富高校）地歴公民（枝幸高校）、家庭（礼文高校）、英語（稚内商工高校）の各教科で実施する。

各教科研究協議会とも、授業参観・研究発表・研究協議等を中心に活発に活動しており、今後とも会員相互の研修として一層の充実が期待される。

4　研究発表者および研究紀要掲載者

１月の研究大会における研究発表者は次の通りである。

年度	項目	学校名	氏名	教科
平５	研発	稚内商工高校	江川　順一	国語
		利尻高校	大門　正人	数学
7	研発	豊富高校	山賀　智文	社会
		礼文高校	和歌　志郎	数学
		豊富高校	滝沢　金光	地学
8	研発	中頓別農高校	永山　鑑造	農業
		稚内高校	渡部　秀治	芸術
9	研発	豊富高校	遠藤　史子	国語
		豊富高校	渋谷　麻子	家庭
		稚内商工高校	嶋田　義久	工業
10	研発	枝幸高校	中村　隆之	地公
11	研発	浜頓別高校	今野　博友	地公
		稚内高校	高橋　秀尚	数学
12	研発	浜頓別高校	土田　聖司	国語
		豊富高校	小門　宏	地公
		浜頓別高校	宮前　貴英	英語
13	研発	浜頓別高校	小南　和憲	商業
		浜頓別高校	佐々木寛人	英語

研究紀要掲載者は残念ながらいないため、今後の研究と発表を期待したい。

5　今後の展望

当支部の教員は初任者が圧倒的に多い地域であり、また、学校規模が限られていることから、自校内での教科研修をより広い視点で深める機会に恵まれていない。このような中で、学校間の枠を越えた教科研修を行い、情報交換や評価・指導方法、教材について互いに刺激し合うことは、教育の変革期にある現在、大変意義深いことである。

今後は、当支部の会員数の減少に歯止めを掛けるよう、当支部の教科研究協議会の一層の充実と、研究大会への参加を呼び掛けたい。

（豊富高等学校教頭　　政野　　仁）

網　走　支部

1　網走地区の概況

オホーツク海沿いに伸びる広大な地域を擁した網走地区は、網走・北見・紋別を主とした３ブロックに分けることができる。

本地区は漁業、農業、酪農及び観光を主とした産業基盤を有している。近年の社会変化の影響を受けて、産業構造が大きく変わってきており、地域の生活状況に少なからず影響を及ぼしている。また、このところの人口減少で中学校卒業生が減る傾向にあり、２間口や１間口の維持さえ困難な状況にある。

当地区32校のうち、４間口以上が12校、３間口５校、２間口以下が約半数の15校という小規模校である。

2　会員数及び支部長等

間口減に伴い、教員数が減少傾向にある。一方、小規模校が多い故に、教員の研修意欲は高い状況にあり、年により多少の変動はあるものの、当支部の会員数は維持されている。本研究会へ参加することにより、研修刺激を促進しており、今後更に会員の増加を図り、教員の指導力及び資質の向上を推進したい。

〔会員数推移〕

年　度	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
会員数	302	263	289	251	244	266	257	256	267	263

支部長校は３ブロック持ち回りの２年交代で支部運営に当たっており、会員の啓発に努めている。

〔歴代支部長・事務局〕

年度	支部長	事務局校	事務局担当者
5	小鹿　米吉	北見緑陵高校	瀬戸　潔
6	石原　敬三	遠軽高校	富田　征夫
7	平井　文雄	遠軽高校	鳥居大路勝廣
8	多田　直治	網走向陽高校	中村　誠
9	多田　直治	網走向陽高校	笠井　孝美
10	上口　昇	北見柏陽高校	江本　嘉敞
11	上口　昇	北見柏陽高校	江本　嘉敞
12	小滝　孝夫	紋別北高校	髙橋　清隆
13	橋本　定彦	紋別北高校	星加　敦美
14	諏江　康夫	網走南ヶ丘高校	花高　了三

3　支部活動（この10年間をふりかえって）

当支部では、教務や生徒指導等の分掌に関する研究協議及び教科指導に係る研究会があり、課題解決や教職員の意識高揚並びに管内教育充実に資し、高教研の事前研修として、会員は熱心に取り組んでいる。

4　研究発表者及び研究紀要掲載者

年度	項目	学校名	氏名	教科
平５	研発	紋別北	青木　裕治	国語
		紋別南	中田　清春	数学
		紋別北	小島　晶夫	理科
		東藻琴	斎藤　信寛	農業
6	研発	遠軽郁凌	西村　珠江	国語
		網走南ヶ丘	元紺谷尊広	社会
		北見仁頃	久保　真理	社会
		興部	間　義浩	理科
		遠軽	菅谷誉紫子	芸術
		紋別南	江口凡太郎	家庭
7	研発	女満別	木村　仁	社会
		訓子府	金澤　昭良	理科
8	研発	小清水	岡部　壽	国語
		遠軽郁凌	中森　賢司	地歴公民
		小清水	佐々木光明	地歴公民
		網走南ヶ丘	瀬戸　健一	理科
		清里	深澤　健	保健体育
	紀要	紋別南	江口凡太郎	家庭
9	研発	遠軽郁凌	高橋　宏明	数学
			川中　理樹	
		雄武	荻津　賢	英語
		滝上	高田　邦彦	英語
		美幌農業	古屋　接雄	農業
		網走向陽	谷奥　憲夫	商業
10	研発	遠軽	平野　道雄	地歴公民
		雄武	笹森　敦	地歴公民
		紋別北	松本　洋一	地歴公民
		北見仁頃	佐藤　辰美	理科
		清里	今井　一実	理科
		訓子府	塩谷　隆治	保健体育
		北見商業	成田　有希	家庭
		遠軽郁凌	河田　章宏	商業
			塩内　俊秀	
11	研発	遠軽郁凌	劔持　裕子	国語
		美幌農業	雨宮　嘉宏	地歴公民
		遠軽	横堀　晃	地歴公民
		北見工業	白取　義博	工業
		紋別南	玉根　一	工業
	紀要	北見緑陵	渡部　道博	英語
12	研発	湧別	奥田　尚	地歴公民
		北見柏陽	吉田　光明	理科
13	研発	北見仁頃	森部　磨美	地歴公民
		興部	則末　一大	地歴公民
		網走向陽	浅井　博龍	数学
		斜里	六本木　篤	英語
		美幌農業	加藤　和則	農業

本道教育発展に向け、日常の実践を発表している。

5　今後の展望

研修の充実を図る。

（網走南ヶ丘高等学校教頭　　花高　了三）

釧　路　支部

1　釧路地区の概況

釧路地区は、釧路市・釧路町・厚岸町・浜中町・標茶町・弟子屈町・阿寒町・鶴居村・白糠町・音別町の広大な地域におよんでいる。産業は、海岸地域は漁業、内陸は農業・畜産・酪農、観光を中心としている。

最近は、漁業の制限や不振、炭鉱の閉山や大手スーパーの撤退など、著しい消費の落ち込みにより、少子化の勢いは益々激しいものとなっている。（平成６年中卒者4267名が平成14年には3096名である）

それに伴い、管内の公立高校の間口も89（平成６年）から71（平成14年）へと削減されている。

また、学校数は、公立高校16校一定時制２校、私立高校１校、高等工業専門学校１校である。

2　釧路支部の教育研究会

支部の教育活動は非常に活発であり、各学校間の連携のもと、会員相互の研修に励んでいる。

各種の研究会として、教務研究会、生徒指導連絡協議会、ボランティア活動連絡協議会、教育相談研究会、環境教育研究会、家庭クラブ成人会、養護教員研究会がある。

また、教科の教育研究会として、北理研釧路支部、地歴・公民、商業、数学、保体、音楽、美術、書道、家庭科、英語、情報がある。

3　事務局・支部長・会員数の推移

年度	事務局校	支部長名	会員数
平成５	釧路湖陵	笹山　平	218
平成６	釧路江南	会津澄夫	196
平成７	釧路江南	会津澄夫	211
平成８	釧路星園	渡部義徳	190
平成９	釧路星園	渡部義徳	192
平成10	釧路北陽	横山武彦	205
平成11	釧路北陽	佐々木重幸	206
平成12	釧路商業	本間良英	179
平成13	釧路商業	石井敏史	176
平成14	釧路緑ヶ岡	七五三木　正巳	170

4　研究紀要掲載者・研究会発表者

年　度	◎研究紀要掲載者 研究会発表者（学校名）
平成５年	数学－浅野　泰弘（阿寒） 物理－石川　昌司（釧路湖陵） 工業－儀同　清秀（釧路工業）
平成６年	地理－大西　崇（厚岸潮見） 地学－菅原　晴美（阿寒） 英語－幅　淳彦（弟子屈）
平成７年	◎奥平　松一（釧路商業） 国語－天内　優（釧路湖陵） 英語－菅原　浩（釧路工業）
平成８年	◎齋　圭治郎（釧路商業） 化学－金澤　豪（釧路江南） 保体－木田　道子（白糠） 家庭－渡部　真紀（釧路湖陵） 水産－平沼　裕康（厚岸水産）
平成９年	◎中野　専司（厚岸水産） 現社－村山　暢樹（釧路北陽） 数学－石川　克志・伊藤　浩次（釧路北） 美術－上野　秀実（釧路東）
平成10年	養護－小林久美子（阿寒） 英語－齋　圭治郎（釧路商業） 商業－小嶋　睦仁（釧路商業）
平成11年	◎田中　嘉寛（釧路星園） 総合理科－知野　太（釧路北）
平成12年	◎元岡　大輔（厚岸水産） 日本史－柴田　一（釧路湖陵） 英語－伊藤　由尋（釧路湖陵定時） 工業－山崎　俊一（釧路工業） 水産－黒島　裕司（厚岸水産）
平成13年	物理－山本　睦晴（釧路工業）

5　今後の展望

著しい少子化のため、今後は間口減だけでなく、教育行政の抜本的な施策が求められる中、生徒の心に大きな不安や混乱が起こらない現場の対応が何より重要なことと感じている。

「生きる力」の育成のために、我々教員がプロの教師としてのスキルアップを図るとともに、校内は勿論、他校との連携や地域との密着性、公的機関とのネットワーク作りが重要である。現実には経済不況や家庭教育力の低下、そこから生じる刹那的な価値観のなかでの生徒指導をどうするのかが緊要と思われる。

ひとり一人の教員が重い課題を自覚し、視野を広く持つために、より多くの教員が高教研に参加することを期待したい。

（釧路緑ヶ岡高等学校教頭　　山田　清典）

根　室　支部

1．根室地区支部の概況

根室地区は、漁業、酪農など基幹産業が不振であり、過疎化の進行や人口減少による中卒生の減少により、当地区の学校状況は大きく変化した。

今年度、当地区の学校状況は、高等学校７校、高等養護学校１校で、10年前と比較すると高等養護学校１校が増えたが問口数で９減である。この傾向は増々続き、学校存続そのものもむずかしくなっていくと考えられる。

2．会員数及び支部長

高等学校の問口減に伴って、教員数が減少している現状もあるが本研究会の内容を充実させ、予算面もある程度保障し、会員数の増加を図る必要がある。

会員数推移

年　度	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
会員数	130	106	113	97	91	69	75	75	73	67

支部長校は昭和57年４月校長協会の釧根支部が釧路支部と根室支部に分離独立することになり、昭和58年に高教研支部も根室支部として独立し、羅臼高校が事務局を担当することとなり、歴代校長が支部長を務め、現在に至っている。

歴代支部長・事務局

年度	支部長	事務担当者
5	西村　清司	中野　一信
6	西村　清司	倉地　基雄
7	西村　清司	倉地　基雄
8	大坂　道夫	久保　信彦
9	大坂　道夫	久保　信彦
10	干場　良治	久保　信彦
11	干場　良治	久保　信彦
12	郷　保雄	柿本比佐緒
13	郷　保雄	柿本比佐緒
14	岡崎　孝男	西　博道

3．支部活動

各分掌や教科ごとに実施されていた管内の各種教育研究会が、本研究会として組織されたのは、平成９年度からであり、それ以来「研究成果のまとめ」として毎年度冊子にまとめ、全会員に配布している。

地区の高等学校が各校独自の研究、実践を研究紀要として毎年編集し、それを交換しあっている。加えて１市４町が小、中、高の一貫教育研究協議会による公開授業、研究協議を実施し着々と成果をあげている。

4．研究発表者及び研究紀要掲載者

当地区は、地理的に札幌に遠いという条件ではあるが、各教科並びに分掌の研鑽に努め、その成果をたずさえ、毎年１月に札幌で開催される研究大会には、多くの先生方が参加している。特に教科部会の研究発表、記録、司会等に積極的に加わり、研究大会の充実、発展に貢献している。さらに当支部の研究意欲を高めたい。

研究発表者・研究紀要掲載者

年度	項目	学校名	氏名	教科
5	研発	中標津	鎌塚　吉忠	地学
		根室	富樫　一憲	物理
6	研発	標津	金澤　裕司	理科Ⅰ
	研発	別海	澤田　和宏	英語
7	研発	標津	是永　修克	地学
8	研発	別海	青木　弘典	物理
	研発	標津	市村　由子	総合理科
9	紀要	根室	畠山寿美代	家庭
10		発表者なし		
11	研発	羅臼	中道　洋友	化学
12	研発	根室	原田　勝	商業
		中標津	浦　巧	地学
13	研発	根室西	梅田　浩士	総合理科

5．今後の展望

今後の支部の活動としては、会員数の増加に努めるとともに、教職員の平均年齢が若く、毎年初任者が配置される地域的な特性をもつ。そのために、当管内においては、研修は大きな意義をもつので、研修を充実していきたい。

（羅臼高等学校教頭　西　博道）

十　勝　支部

1　十勝地区の概況

十勝地区は、開拓当時から十勝平野の広大な土地を利用し、日本でも特有な機械化農業を推進し発展してきた地域である。その意味で人口の増減は、産炭地等に見られるような急激な過疎化に影響されることはなかった。しかし近年の少子化と、農製品の海外価格差、ＢＳＥ（いわゆる狂牛病問題）は、農業離れを加速し、生徒数も大幅に少してきている。

2　高等学校の実践

産業の衰退と、少子化は、当然各高等学校の間口の減少、あるいは高校統合の問題になっていくのは必至である。しかしどの高等学校も地域の期待と連携は強く、各学校が切磋琢磨しながら日々研鑽と実践に励んでいる。

研究発表者・研究紀要掲載者

年度	項目	学校名	名	教科
5	紀要	鹿追高等学校	岡部　敦	英語
6	発表	上士幌高等学校	田辺　孝規	地理
		上士幌高等学校	山本　政俊	現社
		中札内高等学校	石栗　博行	地学
		帯広工業高等学校	林　旻	工業
7	紀要	帯広柏葉高等学校	竹内　典彦	英語
8	発表	白樺学園高等学校	氏石　英夫	数学
9	発表	池田高等学校	篠原　行雄	地理
		上士幌高等学校	山本　政俊	現社
		帯広三条高等学校	釣井幸次郎	政経
		池田高等学校	新井　茂	物理
		新得高等学校	上柳　俊行	体育
10	発表	帯広柏葉高等学校	松橋　宏泰	体育
		足寄高等学校	高谷　康博	倫理
		清水高等学校	神野　剛	化学
		幕別高等学校	鹿角　英輔	国語
12	発表	清水高等学校	坂根　利香	国語
		上士幌高等学校	三浦　央晴	数学
		上士幌高等学校	藤田啓太郎	化学
		帯広柏葉高等学校	今井　一実	生物
		清水高等学校	福田　哲久	音楽
		清水高等学校	西澤　陽子	家庭
		士幌高等学校	関根　晋平	農業
		帯広工業高等学校	能勢　徹	工業
13	発表	池田高等学校	佐々木秀穂	国語
		士幌高等学校	福田　敏憲	現社
		広尾高等学校	佐々木博一	物理
		鹿追高等学校	伊藤新一郎	化学
		帯広柏葉高等学校	村上　陽一	美術
		中札内高等学校	赤崎　智子	英語
		帯広農業高等学校	細川　徹	農業

歴代支部長校・歴代支部長（平成５年～14年）

年度	支部長校	支部長
5	本別高等学校	榛葉　隆信
6	本別高等学校	河合　詔安
7	足寄高等学校	高山　正
8	足寄高等学校	高山　正
9	大樹高等学校	永田　政允
10	大樹高等学校	鈴木　齋
11	広尾高等学校	江良　保宏
12	広尾高等学校	吉川　要
13	中札内高等学校	鳥居大路勝廣
14	中札内高等学校	坪田　裕

平成14年度支部役員

支部長	坪田　裕	（中札内高等学校長）
副支部長	東條　幸男	（帯広緑陽高等学校長）
	富崎　敏憲	（広尾高等学校長）
監事	簑島　和央	（帯広柏葉高等学校教頭）
	川原　勲	（帯広緑陽高等学校教頭）
	岡田　正裕	（帯広農業高等学校教頭）
	宮崎　潤	（帯広工業高等学校教頭）
幹事	中村　均	（清水高等学校教頭）
	鈴木　隆一	（本別高等学校教頭）
	足利　啓朗	（上士幌高等学校教頭）
	斉藤　信寛	（更別農業高等学校教頭）
国語	足利　啓朗	（上士幌高等学校教頭）
地歴公民	継田　昭博	（新得高等学校教頭）
数学	中村　均	（清水高等学校教頭）
理科	鈴木　隆一	（本別高等学校教頭）
保体	山下　薫	（芽室高等学校教頭）
養護	大河原茂美	（帯広柏葉高等学校教諭）
芸術	塩崎　学	（帯広柏葉高等学校教諭）
英語	伊藤　芳明	（広尾高等学校教頭）
家庭	作田　悦子	（帯広三条高等学校教諭）
農業	西田　丈夫	（士幌高等学校教頭）
工業	宮崎　潤	（帯広工業高等学校教頭）
商業	滝田　進	（帯広南商業高等学校教頭）

十勝支部は地理的な関係もあるが、帯広を中心に集まりやすい。私学を含めた学校間の連携が非常に強い地域である。今後も協力体制を維持しながら高教研を含め研修活動を活発にしていきたい。

（中札内高等学校　　安藤　隆哉）

胆　振　支部

1　胆振地区の概況

胆振地区は、東西に広く苫小牧を中心とする東部地区と室蘭を中心とする西部地区とに分かれる。この10年間、産業の不況などによる人口の減少、少子化による中学卒業生の減少という条件が重なり当地区の学校状況は大きく変わった。

今年度、胆振地区の学校状況は、高等学校28校、高等養護学校１校で、10年前の平成５年度と今年度を比較すると、間口数で全日制28減、定時制１減であり、学級数で全日制78減、定時制２減である。今後、予断を許さない傾向にあると思われる。

2　会員数及び支部長

高等学校の間口減に伴って、教員数が減少しているという現状もあるが、本研究会に対する関心という面で今一つ足りないということもあり研究会発足当初の勢いが感じられないというのも事実である。このことは、当支部会員数の減少という部分に結果として現われている。このような状況等をふまえて、各学校の協力を得ながら、本研究会の重要性を訴えつつ、更なる会員数増加のための努力が必要と思われる。

会員数推移

年　度	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
会員数	318	316	315	268	232	222	204	204	207	188

支部長校は、この10年の間、２年で交代しながら支部の運営にあたり、特に会員数の増加のための啓発活動に努力してきたところです。

歴代支部長・事務局

年度	支部長	事務局校	事務局担当
5	吉田　嘉彦	室蘭工業高校	吉毛利正也
6	長野　久之	追分高校	大坂　道夫
7	長野　久之	追分高校	三ッ井孝二
8	山口　行宏	白老東高校	櫻井　芳徳
9	山口　行宏	白老東高校	櫻井　芳徳
10	青山　慎一	伊達高校	山田　光雄
11	青山　慎一	伊達高校	山田　光雄
12	大髙　良雄	登別高校	佐藤　光義
13	大髙　良雄	登別高校	蓬田　恒春
14	髙野　正昭	厚真高校	佐藤　明

3　支部活動

会員相互の資質向上を目指して、地区として研修活動の確立のための努力が歴代の支部長にあった。当地区には胆振管内高等学校連盟のもとに、教務部会、生徒指導部会、進路指導部会、養護部会、各教科研等があり、各研究会は活発に活動しているところであるが、高教研としての各教科の活動を行なうことはなかった。

4　研究発表者・研究紀要掲載者

本研究大会における研究発表及び本会の研究紀要への論文掲載には、当地区から積極的に実践発表を行なっているところであり、今後、本道教育の発展に貢献するものと確信している。更に、多くの会員からの発表を臨みたい。

研究発表者・研究紀要掲載者（平成11年度以降）

年度	項目	学校名	氏名	教科
11	研発	苫小牧西高校	吉村　教賢	国語
		苫小牧南高校	清水美由紀	化学
12	研発	室蘭工業高校	小林　祥	社会
		室蘭東高校	水本　夕佳	芸術
13	研発	伊達緑丘高校	山下　武人	社会
		壮瞥高校	松井　恵一	社会
		室蘭栄高校	白畑　康幸	理科
		室蘭清水丘高校	加藤　忠	保体

5　今後の展望

支部の活動としては、会員数の増加のための啓発活動に努めるとともに、会員の資質向上のために、そして日々の教育実践に役立つ本研究会としたい。

（厚真高等学校教頭　佐藤　明）

日　高　支部

1　日高支部の概況

日高地区は面積の約８割が森林で覆われ、日勝峠麓の日高高校から太平洋沿岸のえりも高校の町立２校の間を公立高校６校が細長く点在する小さな地区支部である。

少子化が進む中で、毎年５学級分の中学生が管外の公私立高校に流出しており地元高校にとって大きな課題となっている。流出する生徒の教育ニーズを的確につかみ、各学校が一層特色化、個性化を進めて、地元高校へ呼び戻せるように努める必要があります。

2　会員数の推移、歴代支部長・事務局長

高等学校の間口減に伴う教員数の減少に伴い、会員数も年々減少の傾向にあるが、各学校の協力を得て、会員数の増加を図っていく必要がある。

会員数推移

年　度	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
会員数	73	85	99	94	87	102	111	105	97	95

８校という小さな支部のため支部長校は、平取高校が担当し、支部の運営及び会員数の啓発に努めている。

歴代支部長・事務局

年度	支部長	事務局校	事務担当者
5	佐藤　重喜	平取高等学校	小林　茂
6	宮地　良一	平取高等学校	松浦　秀機
7	宮地　良一	平取高等学校	松浦　秀機
8	粥川　昭弘	平取高等学校	奥村　武司
9	粥川　昭弘	平取高等学校	奥村　武司
10	粥川　昭弘	平取高等学校	奥村　武司
11	太田　寿郎	平取高等学校	山田　英二
12	太田　寿郎	平取高等学校	山田　英二
13	後藤　隆	平取高等学校	沼澤　博美
14	後藤　隆	平取高等学校	沼澤　博美

3　支部活動

当地区には管内高等学校教育の振興を図ることを目的に平成６年までの「日高管内高等学校連盟」を発展的に改組し、平成７年、「日高管内高等学校教育研究会」と名称を改め、下記のとおり各高等学校が当番校となって14部会が開催され、管内高等学校教育の充実・発展のために活発な活動を行っている。

この上、高教研として各教科の活動を行うことは混乱を招く恐れがあることから、地区支部としては特別な教科活動を行っていない。

今後は管内高教研と連携し、地区支部として部会講師招聘や講演講師への謝礼補助などを検討していく必要がある。

平成13年度日高管内高等学校教育研究会開催一覧

部会	当番校	開催日
教務	浦河高等学校	11月30日
生徒指導	静内農業高等学校	10月１日
進路指導	平取高等学校	11月５日
教育相談	浦河高等学校	11月20日
国語	えりも高等学校	11月８日
地歴公民	静内高等学校	10月18日
数学	静内農業高等学校	９月７日
理科	浦河高等学校	11月14日
保健体育	平取高等学校	12月７日
英語	えりも高等学校	11月７日
家庭	日高高等学校	10月24日
商業	静内高等学校	11月26日
情報教育	様似高等学校	10月３日
芸術	浦河高等学校	10月29日

4　研究発表者および研究紀要掲載者

日高地区支部は地理的には札幌に近く、１月の研究大会には多くの会員が参加するが、各高等学校とも平均年齢が30歳代と若く、新採用や新四人事で異動してくる教員が多い。そのため教育実践の研究発表者や論文掲載までには至っていない。

5　今後の展望

管内高教研を中心に支部全体の研究意欲を高め、会員数の増加に努めるとともに、多くの会員が日頃の教育実践を本研究会へと結びつけていけるよう働きかけていきたい。

（平取高等学校教頭　　沼澤　博美）

教科部会 ～この10年の歩み～

養護部会……41
国語部会……42
地歴・公民部会……43
数学部会……45
理科部会……46
保健・体育部会……47
芸術部会……48
英語部会……49
家庭部会……50
農業部会……51
工業部会……52
商業部会……53
水産部会……54

養護部会

1　この10年間をふりかえって

養護部会が高教研に加入を認められたのは、昭和60年のことで、61年の研究大会が初めての参加でした。それ以前は保健体育部会にかろうじて参加させていただいていましたが、やはり専門性の違いから段々と参加する養護教諭が減って行きました。

そこで、北海道高等学校養護教諭研究会が高教研本部に働きかけて、ようやく養護部会の参加加入が認められたものでした。

それ以来養護教諭の専門性を高めるために、講演講師を中央よりお招きし、資質の向上に努めてきております。

研究発表には、それぞれの学校での問題や研究の成果を討議しながら課題解決に努めてきました。

2　歴代部会長、事務担当者

年度	部会長	事務担当者
4年度	渡辺　誠三（札北）	佐藤　菜子（札北）
5年度	武田　　哲（札北）	同　上
6年度	同　上	同　上
7年度	同　上	大村　道子（札北）
8年度	高田　健吾（札北）	同　上
9年度	同　上	同　上
10年度	大東　俊郎（札北）	同　上
11年度	同　上	同　上
12年度	武内　光一（札北）	同　上
13年度	同　上	佐藤　菜子（札西）

3　養護部会講師

4年度「これからの養護教諭」
－当面する諸課題をとして考える－
滋賀県教育委員会　保健体育科指導主事
木戸　増子

5年度「養護教諭の専門性と教育相談活動」
北海道女子短期大学保健体育科教授　田崎　雅子

6年度「自分を生かし、人を大切にする活動」
東京都文京区教育センター嘱託員　槙　　仁子

7年度「養護教諭に期待するもの」
杏林大学教授　出井美智子

8年度「生徒指導と短期療法」
奥羽大学文学部教授　小野　直広

9年度「養護教諭の新たなる役割と
求められている資質」
文部省体育局学校健康教育課調査官
メンタルヘルス教育専門官　三木とみ子

10年度「健康に関する現代的課題と
これからの健康教育」
兵庫教育大学学校教育学部助教授　渡邊　正樹

11年度「青少年に見られる睡眠覚醒リズム障害」
北海道大学医学部教授　本間　研一

12年度「養護教諭の専門性と教育活動」
－健康教育を中心に－
宇都宮教育大学教育学部教授　和唐　正勝

13年度「保健室は出会いと成長の場」
－今、養護教諭に望まれるもの－
大阪人間科学大学人間科学部教授　服部　祥子

14年度「養護教諭であること・
あり続けることの探求」
愛知教育大学助教授　後藤ひとみ

4　養護部会の現状と課題

加入した当時からの会員数が足踏み状態ではあるが、魅力ある部会にするよう講師の人選に苦慮しているところであります。

今後も多く先生方のご協力のもと、養護部会が発展することを願っております。

（札幌西高等学校　佐藤　菜子）

国　語 部会

1　この10年間をふりかえって

昭和28年に、北海道高等学校教育研究会が発足して以来、本年で満40周年を迎えます。この10年間は、人間の一生にたとえますと、30歳から40歳の働き盛りの期間に当たるのではないでしょうか。

国語部会のこの10年間の軌跡をたどってみますと、講演、研究発表、研究討議等、毎年充実した内容で発展してきたものと思います。特に本道は大都市の大規模校から郡部の小規模校まで、さまざまな規模の学校が混在する自治体であり、各学校で生徒の実態にあった実践活動がなされていることが研究発表を通して、うかがい知ることができました。また、評論文読解・国語表現・古文理解・文学鑑賞など、高校国語教育の各分野から、まんべんなく研究発表が出された10年間でもありました。助言者の先生方からも、「生徒の意欲の喚起を図り、生徒の実態にあった指導内容で、創意工夫の凝らされた実践である」との評価もいただいております。その一方で、「さらに生徒の心を把握し、一斉授業の中に個別学習を位置づけ、生徒の意欲を高めていく授業を継続していくことが必要である」等の課題も提示されております。

2　歴代部会長、事務局担当者

年度	部　会　長	事務局担当者
5年度	小澤　正人（北広島）	須摩　守（北広島）
6年度	田口　輝明（北広島）	須摩　守（北広島）
7年度	田口　輝明（北広島）	須摩　守（北広島）
8年度	若林　正（札平岡）	福永　輝雄（札平岡）
9年度	若林　正（札平岡）	福永　輝雄（札平岡）
10年度	安尻　大輔（札　東）	野瀬　政裕（札　東）
11年度	安尻　大輔（札　東）	真壁　智誠（札　東）
12年度	酒井　徳長（札稲雲）	遠藤　彰（札稲雲）
13年度	酒井　徳長（札稲雲）	遠藤　彰（札稲雲）
14年度	柏倉　正明（札稲雲）	遠藤　彰（札稲雲）

3　国語部会講師

5年度	「言語教育を考える」 北海道教育大学教授　吉見　孝雄
6年度	「ことばの働き」 詩　人　川崎　洋
7年度	「言語学習の方向＝実験授業の試み＝」 宇都宮大学教授　長尾　高明
8年度	「いのちと心」 僧　侶　松原　哲明
9年度	「読むことと書くこと」 作　家　黒井　千次
10年度	「漢詩の魅力にひかれて」 二松学舎大学教授　石川　忠久
11年度	「はなし・話・咄－放送四方山話－ 北海道放送　松永　俊之
12年度	シンポジウム 「新学習指導要領にかかわって」
13年度	「21世紀の国語力－言語情報の操作－」 桜美林大学教授　小林　一仁
14年度	「演題未定」 作　家　谷村　志穂

4　国語部会の現況

平成4年度に5142名であった高教研会員数が、昨年度は3579名にまで減少しましたが、国語部会の会員数も“右肩下がり”に推移し、昨年度はついに400名を割り込むところまできました。一方で、ほとんどの管内で「国語研究会」は開催され、多くの参加者を集めているという報告もあり、高教研会員数の減少が先生方の研修意欲の低下を表しているとは言い切れないでしょう。現在各管内で独自に行われている研究会と1月の高教研国語部会との連続性を持たせることが必要ではないでしょうか。

5　今後の展望

明年から新学習指導要領に基づいた教育課程が、学年進行で実施され、国語科は現行8科目から6科目へ改められます。学校設定科目の設置条件も大幅に緩和され、各学校の生徒の実態にあった多種多様な教育課程が編成されることと思われます。国語科の教員としてもますます創意工夫が求められ、教え込む授業から学び取る授業への転換が進んでいくことでしょう。過渡期にある今こそ、私たちは情報を交換し、研鑽を深める必要があるのです。

（札幌稲雲高等学校　遠藤　彰）

地歴・公民 部会

1　この10年をふりかえって

この10年、各部会とも講演内容の充実に努め、道内外からに様々な講師を迎えて、各専門分野から現代の社会状況について新しい知識の習得に努めていました。また、研究発表に関しても、教科専門の発表のほかに各自の日々の実践活動に関するものが多く発表され、生徒の学習意欲を高めるための創意工夫に富んだ授業の様子がうかがえます。今後も地歴・公民科教育の充実と在り方を考えていくためにも、より多くの会員の実践発表が期待されます。

2　歴代部会長、事務局担当者

年度	部　会　長	事務局担当者
5年度	望月　重幸（札月寒）	目黒富士雄（札月寒）
6年度	望月　重幸（札月寒）	目黒富士雄（札月寒）
7年度	川島　正彬（札清田）	富田　淳一（札清田）
8年度	川島　正彬（札平岸）	能登誠之助（札平岸）
9年度	川島　正彬（札平岸）	石黒　清裕（札平岸）
10年度	神山　　健（札新川）	野村　富之（札新川）
11年度	神山　　健（札新川）	野村　富之（札新川）
12年度	山本　良久（札稲北）	滝村　聡宏（札稲北）
13年度	山本　良久（札稲北）	滝村　聡宏（札稲北）
14年度	武村　宗彦（札稲西）	亀山　範行（札稲西）

3　地歴・公民部会講師

5年度
全体部会「細川政権と政治改革」
北海道新聞社編集局政治部部長　山本　研一
現代社会部会「国際先住民年を振り返って」
二風谷アイヌ文化資料館館長　萱野　　茂
日本史部会「北方諸民族間の文化交流」
北海道大学文学部教授　菊地　俊彦
世界史部会「ヴェトナム・カンボジアと日本」
北海道大学法学部教授　坪井　善明
倫理部会「実存主義と現代」
青森明の星短期大学助教授　井上　摩耶
政治経済部会「政治改革と政治教育」
北海道大学教授　山口　二郎

6年度
日本史部会「姿をあらわした巨大集落三内丸山遺跡」
青森県埋蔵文化財調査センター主査　岡田　康博
世界史部会「ロシア極東地域の最近の経済情勢について」
北海道大学スラブ研究センター教授　村上　　隆
地理部会「地理指導の改善の方向と指導～21世紀の地理授業～」
文部省初等中等教育局教科調査官　渋澤　文隆
倫理部会「マスコミと価値観」
藤谷　栄也
政治経済部会「世界の中の日本」
北星学園大学経済学部教授　小島

7年度
現代社会部会「マルチメディア時代の展望－教育とマルチメディアー」
ＮＴＴ北海道支社マルチメディア推進室長
黒岩　邦夫
日本史部会「日本古代対外関係史の成立」
早稲田大学第一文学部助教授　李　　成市
世界史部会「帝国主義について」
北海道大学経済学部教授　加来　祥男
政治経済部会「オウム問題と若者の心」
千葉大学教育学部助教授　諸富　祥彦
倫理部会「欲望の肯定学－個人主義の倫理学」
札幌大学経済学部教授　鷲田小彌太
地理部会「現代社会と情報化」
北海道新聞論説委員　本間至能富

8年度
現代社会部会「現代における人権問題」
札幌学院大学法学部教授　渡部　保夫
日本史部会「勝山館に見る北の中世」
上ノ国町教育委員会文化財課学芸員　松崎　水穂
世界史部会「ユーラシア・ネットワークの転換と鄭和の南海遠征」
北海道教育大学教授　宮崎　正勝
政治経済部会「ロシアの秩序と日本の秩序」
北海道大学言語文化部ロシア語教育系教授
杉浦　秀一
倫理部会「現代と宗教」
桐蔭学園横浜大学教授　八木　誠一
地理部会「国際社会人として外国の文化をどうみるべきであるか？」
札幌韓国教育院院長　趙　　鐘仙

9年度
世界史部会「世界史と日本史の可能性」
東京大学大学院総合文化研究科教養学部教授
山内　昌之
日本史部会「近現代日本の選択肢－大国主義と小国主義－」
札幌学院大学経済学部教授　田中　　彰
地理部会「国際協力と日本ODAの現状について
国際協力事業団北海道国際センター札幌所長
長島　俊一
現代社会部会「21世紀に向けての政治課題」
北海道大学法学部教授　山口　二郎
倫理部会「カントの倫理学」
北海道大学名誉教授　宇都宮芳明

政治経済部会「現代国家を問い直す」
北海学園大学法学部教授　山本　左門

10年度
世界史部会「世界史とロシア」
北海道大学文学部教授　栗生澤猛夫
日本史部会「戦前日本の植民地支配と北海道
北大で発見された抗日指導者の
遺骨が語るもの～」
北海道大学文学部教授　井上　勝生
地理部会「ごみを通して見えてきたこと」
循環ネットワーク北海道　岡崎　朱実
現代社会部会「北海道の森と川を語る」
北海道大学地球環境科学科教授　小野　有五
倫理部会「今どきの子供と学校」
北海道大学教育学部助教授　西本　肇
政治経済部会「学校における今後の経済教育・消費者教育
～アメリカの消費者経済学教育
からのヒント～」
消費者教育支援センター主任研究員　阿部信太郎

11年度
世界史部会「イタリアにおける国民国家の形成」
北海道大学文学部教授　北原　敦
日本史部会「アイヌ史研究の
『キーワード』をめぐって
ーいくつかのアイヌ語の単語の
本来の意味ー」
札幌学院大学人文学部助教授　奥田　統己
地理部会「デジタル地図社会における
北海道地図の取り組み」
北海道地図株式会社ナビゲーション課課長
長嶋　正明
公民部会「時代の変化をどう読むか」
作家　大下　英治

12年度
世界史部会「近代イギリス史における
『フロンティア』～国民国家論と
ポスト・コロニアル論の視座」
北海道大学文学部西洋史学科助教授　長谷川貴彦
日本史部会「縄文時代の生活と文化」
南茅部町教育委員会埋蔵文化財調査室長
阿部　千春
地理部会「環大西洋を巡る、音と踊りと神々」
写真家・作家　板垣真理子

13年度
世界史部会「土地文章からみる
中世近代江南の地主制」
北海道教育大学教授　夏井　春喜
日本史部会「蝦夷地のアイヌ社会と和人
ーシャクシャインの蜂起をめぐってー」
筑波大学歴史・人類学系助教授　浪川　健治
地理部会「日本人と温泉」
札幌国際大学教授　松田　忠徳
現代社会部会「21世紀に適用する地域開発の切り口」
中小企業診断士　庄司　俊雄
倫理部会「脳をいかに育むか」
北海道大学医学研究科機能分子学分野教授
澤口　俊之
政治経済部会「変わる政治と新しい政府像」
早稲田大学経済学部教授　谷藤　悦史

14年度
世界史部会「世界システム論の世界史観
ー基礎から新知見まで」
北海道大学大学院文学研究科助教授　山下　範久
日本史部会「函館と云う地名～何故、函館に人が
住むようになったか」
函館市史編纂室室長　紺野　哲也
地理部会「鉄道から見た北海道」
フォトライター　矢野　直美
現社部会「現代社会が失ったもの
～『人権社会』の落とし穴～」
札幌市保健福祉局　渡部　正行
倫理部会「近代社会とは何か」
明治学院大学教授　竹田　青嗣
政経部会「『テロとの戦争』と国際政治」
北海道大学法学部教授　中村　研一

4　地歴公民部会の現況と今後の展望

平成8年に社会科が地歴公民科と名称が変更になりより高い専門性を必要とされる一方で、授業においては旧来の知識を教える授業から、「人間の在り方、生き方」を生徒に教え、考えさせることが求められています。教科書の内容を理解させることも大切ですが、地域の歴史、文化から国際社会の情勢まで、多岐にわたって生徒に伝え、考えさせる力が必要とされています。生徒の自ら学ぶ意欲を高め、公民的資質を養うため、教材等の工夫や新しい実践を、今まで以上に試みていく必要があります。

5　今後の展望

今年から完全週休二日制となり授業時数が削減されていく中で、いかにして生徒の学力の低下を防いで大学受験などに対応できる力を養っていくかを考える一方で、多様化した社会の中で、生徒の人間性や社会性を養う教科としての役割の重要性が増してきています。これからも多く会員の皆様の研究や実践を通して、地歴公民科教育の方向性や在り方を考えていくことがとても必要となります。
今後とも当部会への皆様のご指導ご支援をよろしくお願い申し上げます。

（札幌稲西高等学校　亀山　範行）

数　学　部会

1　この10年間をふりかえって

40周年を迎えるにあたり、数学部会の「研究主題」を辿りながらこの10年間をふりかえってみた。

平成５年度から４年間は「未来を担う生徒を育てる数学教育」である。いわゆる「新学力観」により、指導の目標を、知識・理解・技能の習得から興味・関心・態度の育成へ転換することで、自ら主体的に学ぶ意欲を引き出すことが主眼とされた時期である。このことが、サブテーマ「一人ひとりが個性を生かし、意欲的に取り組む授業の実践」にも表れている。

平成９年度から３年間は「国際化・情報化の時代に生きる力を育てる数学教育～自ら学ぶ力を育て、豊かな思考力・創造力を伸ばす授業の実践～」である。研究主題設定の理由のひとつとして、日々発展を遂げる情報化社会に柔軟に対応できる思考力・創造力を育成するための授業展開の工夫の必要性を説いている。この時期から、電卓・コンピュータを授業に取り入れた実践の研究発表が増えてきている。

平成12年度からは「基礎・基本の定着を図り、創造力を養い活用する能力を育てる数学教育～数学的活動を生かし、自ら学ぶ力を育てる授業の実践～」である。指導要領改訂のポイント「基本的・基礎的な知識・技能を習得した上で、物事を多面的に見る力、論理的に考える力などの創造性の基礎を数学的活動を通して培い、更に、それらを自ら進んで活用する態度を育てる」を十分にふまえた数学教育を通して、その具現化を図ろうとしているのがわかる。その意味において、昨年の杉山吉茂先生の講演「米国では数学を使える生徒を数多く創るために、数学の有用性から授業を展開しすべての子どもにレベルの高い数学教育をという体制で取り組んでいる。北海道でもコンピュータ等を上手に取り入れ数学を使える生徒を多く創るよう指導を工夫して欲しい」は示唆に富んだ内容であった。

2　歴代部会長、事務局担当者

年度	部　会　長	事務局担当者
５年度	今西　義紀（真栄）	細部　人志（真栄）
６年度	今西　義紀（真栄）	細部　人志（真栄）
７年度	真田　清臣（稲北）	石田　正明（稲北）
８年度	谷川　幸雄（稲雲）	大河内佳浩（稲雲）
９年度	松田　勝之（札西）	植松　寛喜（札西）
10年度	松田　勝之（札西）	植松　寛喜（札西）
11年度	池田　邦生（石狩）	安藤　秀世（石狩）
12年度	池田　邦生（石狩）	安藤　秀世（石狩）
13年度	北島　捷弘（新川）	清水　貞人（新川）
14年度	北島　捷弘（新川）	清水　貞人（新川）

3　数学部会講師

５年度「新課程での数学教育について」
大阪大学教授　山本　芳彦
６年度「新課程での大学入試について」
東北大学教授　加藤　順二
７年度「いま、数学教育に欠け落ちているものがあると思いますか？」
九州大学教授　吉川　敦
８年度「新指導要領の「夢」と現実」
大東文化大学教授　長岡　亮介
９年度「考える数学、発見する数学」
大阪大学教授　山本　芳彦
10年度「国際化・情報化と「読み・書き・そろばん」」
東京大学教授　松本　幸夫
11年度「生徒の学ぶ力を引き出す数学教育」
埼玉大学教授　岡部　恒治
12年度「学ぶ意欲を高める数学教育」
京都大学教授　上野　健爾
13年度「これからの数学教育のあり方」
早稲田大学教授　杉山　吉茂
14年度「内側から見た大学入試」
桜花学園大学教授　岩井　齊良

4　数学部会の現況

数学部会は午前の部で総会および講演会、午後の部で研究協議という日程で行われている。研究発表者を地区支部ごとのローテーションで割り当てているため、発表内容は教材研究から指導法まで多岐にわたり個性的なものも少なくない。一方で、時間の制約などから研究協議が十分に深められない、会員相互の交流が希薄であるとの指摘もある。年に一度の貴重な研修の機会がより有意義なものになるよう、今後も会員の声に耳を傾けながら運営の工夫をしていきたい。

5　今後の展望

学校５日制に続いて、いよいよ来春から新教育課程が実施される。「学習内容の３割削減」にともなう「学力低下」が指摘され、「数学者による新指導要領の白紙撤回」が示しているように、大きな社会問題として日本中が注目する中でのスタートである。そのような状況において、高等学校という現場に携わる私たちにできることは、自らの実践を通して新指導要領の検証にあたり、それらを現場の声としてまとめ、提言していくことではないだろうか。今後、当数学部会がその一翼を担い、「すべての高校生に『21世紀を担う若者に相応しい質の高い豊かな数学教育』を提供する」ことに寄与されることを願う。

（札幌新川高等学校　清水　貞人）

理　科 部会

1　この10年をふりかえって

平成６年度より学年進行で導入された現行の教育課程に合わせて、平成８年度より理科Ⅰ・Ⅱ部会が総合理科部会としてあらたな活動をはじめた。必修科目であった理科Ⅰから選択科目となった総合理科は履修する生徒数や学校数は減少したが、「エネルギー」や「環境」といった現在の理科教育において益々重要となってきたキーワードを研究の柱にすえ、独自の活動を続けている。

理科Ⅰ時代は、１学年で理科Ⅰ（４単位）、２学年以降で１～２科目を履修するという学校が多かったが、平成６年以降は１学年で化学、２年生以降で１～２科目を履修するというスタイルが多くの学校で採用された。結果として、理科系大学へ進学を希望する生徒も理科を２科目しか履修しないという事態をまねき現在にいたっている。

2　歴代部会長・事務局担当者

年度	部　会　長	事務局担当者
5	藤田　郁男（札幌丘珠）	伊藤　　紘（札幌丘珠）
6	鈴木　眞一（札幌西陵）	小泉　国昭（札幌丘珠）
7	鈴木　眞一（札幌西陵）	坂野　輝一（札幌西陵） 門　　滋（札幌西陵）
8	高田　健伍（札幌北）	坂野　輝一（札幌西陵）
9	中明　亨善（札幌白石）	小川　　清（札幌北）
10	中明　亨善（札幌白石）	小川　　清（札幌北）
11	中川　明弘（札幌月寒）	三條　克彦（札幌白石）
12	中川　明弘（札幌月寒）	三條　克彦（札幌白石）
13	津田　英雄（札幌藻岩）	守屋　　開（札幌平岸）
14	佐藤　俊治（石狩翔陽）	横関　直幸（札幌平岸）

3　教科部会講師

５年度「これからの理科教育
－科学的な探求能力の育成－」
東京理科大学理学部講師　武田　一美　氏
６年度「21世紀のエネルギーと人類の生存」
電力中央研究所研究開発部次長　新田　義孝　氏
７年度「理科における環境教育の視点と
アースシステム教育」
国立教育研究所　下野　　洋　氏
８年度「東南アジアの生物多様性」
京都大学生態学研究センター教授　井上　民二　氏
９年度「世界の環境教育の流れと課題」
21世紀教育研究所所長　筑波大学名誉教授
中山　和彦　氏
10年度「これからの理科教育の目指す方向」
文部省初等中等教育局視学官　江田　　稔　氏
11年度「二十一世紀の技術と社会」
放送大学教授　守屋　正規　氏
12年度「21世紀の人類への贈り物『オンネトー湯の
滝マンガン』（国指定天然記念物）」
経済産業省技術総合研究所　地質調査所地殻化学部
地球化学研究室　主任研究官　三田　直樹　氏
13年度「人類の進化と日本人の起源
－私たちはどこから来たのか－」
国立科学博物館人類研究部　部長　馬場　悠男　氏
14年度「市民教育・キャリア教育としての科学技術
教育－拡大される科学技術教育の地平－」
神戸大学教授　小川　正賢

4　部会の現況

理科部会は物理・化学・生物・地学・総合理科という５つの科目からなり、活動もそれぞれの科目の特殊性や専門性に対応するという立場から各科目４人の幹事をおき活動を展開している。研究大会においては、午前が全体講演、午後に分科会ごとの講演と研究発表を行うスタイルが数年来続いている。道内各方面から専門性に富んだ多様な講師を招いての講演は本研究会の特色といえる。また、研究発表は北海道の特徴でもある広範な地域より実践報告が行われ、研究テーマも学校ごとの特徴を踏まえつつ、地域独特の教材を研究する姿勢が貫かれており、その傾向は生物・地学・総合理科において顕著である。

5　今後の展望

平成15年から新教育課程が学年進行で導入される。理科総合A・B、理科基礎という新たな必修科目の設置により新しい授業展開の研究が必要になっている。物理、化学、生物、地学の各科目については、単位数の変化はもとより教材の大幅な変更が行われ、授業時数の減少という状況も考えると教材の精選は限界にきているとも見える。そのような中で生徒が適切な自然観を形成できるような理科教育を行わなければならない現実がある。状況は厳しいが、各教師の創意工夫により新しい時代に適応した授業を作り出していく必要に迫られていると言えよう。そのためには本研究会をはじめ、北理研などの各種教育団体と連携をはかりながら、アクティブな活動を形成していくことが不可欠であろう。理科は各科目の高い専門性が要求される一方で、理科という教科を通して総合的な自然観をいかに育んでいくかという課題にも直面している。科目間の連携を深めていく工夫をしていくことも時代の要請として突きつけられている。

生徒の学力低下、活字離れ、知離れ、理科離れといった現状分析をする時代は終りを告げた。現状を正しく認識しつつ、わが国の将来を担う生徒達のために、本研究会の一層の活躍が期待される。

（札幌平岸高等学校　横関　直幸）

保健体育 部会

1 この10年間をふりかえって
～保健体育分科会講演・研究発表の記録～

第31回（平成５年度）
◎選択制体育の実践について
横浜市立南高等学校副校長　常木己喜雄
○生徒一人ひとりが主体的に学習できる授業の展開をめざして
中川　秀樹（別海）
○選択制体育の経営計画について
山崎　文夫（芽室）

第32回（平成６年度）
◎新しい保健授業を考える
宇都宮大学教授　和唐　正勝
○特色ある学校づくりをめざした「地域学習授業」の設定と実践
豊岡　　進（江差）
○新教育課程における教科体育の選択制授業を求めて
佐藤　昌弘（札幌新川）

第33回（平成７年度）
◎新しい高校体育の課題
文部省体育局体育官・島根大学教授　杉山　重利
○エイズ教育（性教育）の実践
盛田　光則（知内）
○生徒の自主性を伸ばす保健体育科教育をめざして
汐川　裕彦（本別）
○本校における選択制授業への取り組み
門脇　　覚、網島　　隆、湯浅悠紀夫
堤　　貞介、讃良　岳宏、山上　章治
緒方　紀子　　（札幌清田）

第34回（平成８年度）
◎スポーツの功罪　－尿酸代謝よりみて－
日本体育大学体育学部長　伊藤　　孝
○ホイッスルのいらない体育授業を求めて
木田　道子（白糠）
○自らたくましい心身を培う生徒の育成を目指した体育授業の在り方を求めて
深澤　　健（清里）

第35回（平成９年度）
◎スポーツ障害の予防と体力強化
日本体育大学教授　堀井　　昭
○生涯を通してスポーツに親しむために
信清　昭人（弟子屈）
○自ら考え，自ら学ぶ保健学習の創造をめざして
上棚　俊行（新得）

第36回（平成10年度）
◎子供が求めるよい体育授業の条件
筑波大学教授　高橋　健夫
○「死」を考える授業の取り組み
○生涯にわたってスポーツを楽しむために
塩谷　隆治（訓子府）
○要求する体育科から要求される体育の創造を目指し
松橋　宏泰（帯広柏葉）

第37回（平成11年度）
◎学校体育とスポーツ教育のあり方を求めて
北海道教育大学札幌校教授　越後　　豊
○保健体育に於ける課題学習の取り組みについて
升田　重樹（羽幌）
○新学習指導要領の実践に向けて移行期の体育授業について考える
上杉　正三（札幌厚別）

第38回（平成12年度）
◎ライフスタイルと体育
北海道大学大学院教授　須田　　力
○新しい授業展開を求めて
数馬田　基（札幌北陵）
○新学習指導要領に向けて
岩谷　倫光（恵庭南）

第39回（平成13年度）
◎苦あれば楽あり－オリンピックに勝つまで－
日本体育大学教授　森田　淳悟
○選択制の授業を創る
小田中尚紀（帯広緑陽）
○教科保健での性教育のあり方について
木太　宏人（長万部）

第40回（平成14年度）
◎スポーツと自己実現～陸上競技からのアプローチ～
東海大学講師　髙野　　進
○「生きる力」を身につける武道指導を目指して
町田　英謙（北広島）
○全国学校体育研究大会からの報告
田苗　隆男（札幌国際情報）
○運動部活動顧問のための指導ハンドブックの完成報告
近藤　　壽（札幌藻岩）

2 歴代部会長、事務局担当者

年度	部　会　長	事務局担当者
5	菅原　道行（札星園）	玉置　重実（札南陵）
6	日野　嘉輝（札東陵）	玉置　重実（札南陵）
7	日野　嘉輝（札東陵）	玉置　重実（札南陵）
8	井戸　英樹（札厚別）	玉置　重実（札南陵）
9	井戸　英樹（札厚別）	玉置　重実（札南陵）
10	前東　　昭（野　幌）	小林　正義（札西陵）
11	伊藤　義雄（札北陵）	小林　正義（札西陵）
12	伊藤　義雄（札北陵）	小林　正義（札西陵）
13	菅原　正利（石狩南）	三宅　俊範（石狩南）
14	菅原　正利（石狩南）	三宅　俊範（石狩南）

（石狩南高等学校長　菅原　正利）

芸　術　部会

1　この10年間をふりかえって

分科会のテーマを長らく「これからの芸術教育」としてきたが、平成13年度より、「21世紀の芸術教育」と改め、現在に至っている。いずれにせよ将来を見据えつつ、時代に応じた芸術教科のあるべき姿を探っていこうという姿勢を貫いてきた。

この分科会の大きな特徴として、従来より高音研、工美高研、高書研などそれぞれの科目ごとの活動は活発であるが、全道規模で音楽・美術・工芸・書道の芸術四科が一同に会する場としては唯一のものであるということが挙げられる。その意味でも以前から多数の参加者を得て充実した分科会となっている。

特にここ数年は、新学習指導要領への対応ということでそれに応じた内容の研究発表が続いている。「伝統音楽への取り組みについて」「ＩＴ機器を利用した授業の展開」「漢字仮名交じりの書」「指導と評価の一体化」と各科とも内容はそれぞれであるが、共通していかに生徒の学習意欲や関心を高めつつ創意に富んだ芸術活動が行えるか、という視点で捉えられている。先進的とも言えるそれらの試みはいずれも優れた内容で、すでに移行措置で新カリに即した内容で授業を行っている学校も多いところから、参加者にとって大変有意義なものとなっている。

又、新指導要領において芸術の必修単位が縮減したことから、各学校における単位数の減少、それに伴う専任教師の減少など芸術科全体に危機感が広がっており、芸術四科の連携ということがここ数年強調されてきている。そういう流れの中で新たに平成11年度より、部会総会の中で四科共通の話題なり問題提起の時間を設定した。「総合学科のカリキュラムについて」「芸術三科合同の校外発表会について」など、短時間ではあるが、これも年を経て軌道に乗りつつあるところである。

2　歴代部会長、事務局担当者

年度	部　会　長	事務担当者
5年度	中野　友房（札開成）	滝沢　光郎（札開成）
6年度	中野　友房（札開成）	松本　寛之（札開成）
7年度	加藤　　啓（札北斗）	前田　　進（札北斗）
8年度	加藤　　啓（札北斗）	前田　　進（札北斗）
9年度	本間　正啓（江　別）	佐々木信三（江　別）
10年度	本間　正啓（樽桜陽）	輪島　進一（樽桜陽）
11年度	長尾　紀之（札平岡）	岩崎　雅春（札平岡）
12年度	水野　忠昭（札東豊）	竹内　敏夫（札東豊）
13年度	水野　忠昭（札東豊）	野屋敷裕康（札東豊）
14年度	蓮田　秀泰（旭川南）	小林　雅澄（札　南）

3　芸術部会講師

5年度	「先生方の『まこと』とはなにか」 桐朋学園大学学長　三善　　晃
6年度	「即如思想と書」 北海道教育大学旭川校教授　平田善次郎
7年度	「これからの芸術教育について」 東京芸術大学教授　伊藤　隆道
8年度	「生徒の好む三味線授業」 東京都立白鴎高等学校教諭　野口　啓吉
9年度	「芸術と人生」 北海道文化財保護教会　亀岡　　武
10年度	「北の自然を彫り続けて」 童話作家　手島圭三郎
11年度	「私とアコーディオンとの出会い」 北海道アコーディオン協会会長　久保　達夫
12年度	「日本の生活文化と芸術文化」 書　家　島田　無響
13年度	「居ごごちのよい居場所」 道都大教授　倉本　龍彦
14年度	「北海道民謡の父　今井篁山の生涯」 札幌文学同人　藤倉　徹夫

4　芸術部会の現況

平成14年度の参加者名簿では180名余が名を連ねており、会員への加盟率と共に非常に高い参加率を誇っている。この状況は例年ほぼ同じで全道の芸術科教員の関心の高さが伺える。

5　今後の展望

新学習指導要領への対応ということが引き続き、芸術科の直面している課題であろう。週五日制による全体の単位数の縮減により、都市部においては受験教科のあおりを食う形での単位数の減少が見られる。また、地方においては指導者の確保という問題もある。

しかし、指導要領に謳われている「豊かな人間性を育む」「個性を生かす」「自ら学び自ら考える」といったところに芸術教科は直接的に関わっているといってもよく、今の教育全般の課題を考えていく上でも重要な位置を占めているといって良いと思われる。

新たに導入された「総合的な学習の時間」と芸術科がどう関わっていくか、とか、より生徒の意欲化をはかりつつ豊かな情操、人間性を育んでいくような授業をどう構築するか。私達はそれら授業の改善を通して芸術教科の重要性、必要性をより広くアピールしていく必要があろう。今後も芸術科のあるべき姿、進路を会員相互の協力のもと探っていきたく思う。

（札幌南高等学校　小林　雅澄）

英　語　部会

この10年、そしてこれから

●国際性涵養の時代から、コミュニケーションへ

「国際性を育てる英語教育はどうあるべきか～総合的言語活動の観点から～」というテーマに基づく平成12年度までの高教研英語部会研究集会（以下、英語部会）は、国際社会に飛び出す為の道具としての英語を再認識させる、また学校英語教育の役割を再確認させるという点で、意義深いものであった。このテーマのもと、基調講演講師として日本の英語界、英語教育界で活躍する第一線の方々を招いて、時代性・社会性を反映し、期待される英語教育をとらえた講演はいずれも、学校英語教育をどう具現化しようか、平たくは、明日の授業をどうしようか、という現場の先生達の悩みや疑問に答えてくれてきた。

北海道はとりわけ学校数も多く、地域性・学校の特性も多岐に亘るため、全英語教員のニーズすべてに応えることは困難である。だが、歴代の石狩管内の当番事務局校が、ボランティアとして叡智を結集し、北海道英語教育の更なる発展と充実を目指していろいろな変革期・節目毎に、その時々の「旬」を全道の先生達に発信してくれてきたことに対し、後輩として敬意を表するものである。

「十年一昔」というが、まさしく、社会環境も価値観も、生徒の様子もめまぐるしく変わり、情報の発信と共有が大衆化し、インターネットによるボーダレスの波が学校にも押し寄せている。実に、この10年のうちに英語教育を取り巻く環境も刻々と変化し続け、新学習指導要領が告示され（平成11年）、高校での実施が来年に迫っている（平成15年）。また、「『英語が使える日本人』育成のための戦略構想」も飛び出した（平成14年７月）。

人と人とをつなぐ広義のコミュニケーション、そして日本と諸国をつなぐコミュニケーションの道具として英語をとらえ、生徒たちが夢と充実感をもって英語が学べる時代に向かうという意識のもと、13年度の英語部会から「21世紀に生きる地球市民を育む英語教育～実践的コミュニケーション能力の育成を目指して～」を新テーマに掲げた。

●英語部会の今後～高英研、ネットワークの時代

平成２年度に高英研（北海道高等学校英語教育研究会）が発足し、高教研英語部会はその直系傘下に組込まれ、高英研事務局イコール高教研英語部会事務局が誕生し、加えてＬＬ研、中高英研、英語弁論の各研究会もこの統括事務局によって運営されてきた。だが、ここ数年、統括されていた諸研究会を個別化し、それぞれに当番校を充てるようになった。一校による「丸抱え超繁忙時代」は一旦終りを迎えたが、高英研・高教研事務局は、英語教育のいろいろな側面を照らし出しつつ、傘下に統括する諸研究会を有機的にネットワーク化していく使命をもっている。英語部会は、今後ますますの内容充実を図りながら会員増につとめ、会員の支援を糧として、さらなる発展を遂げていくものと確信している。

終りに、歴代基調講演講師と部会長・事務局を紹介して筆を置くこととする。

■歴代基調講演講師

年度	演　　題
5	「国際性を育てる英語教育はどうあるべきか」 ＮＨＫ英語会話講師　グロリア・ビッシュ 「オーラルコミュニケーションＡ・Ｂ・Ｃの導入と今後の英語教育」 文部省初等中等教育局教科調査官　影浦　攻
6	「国際理解と英語教育」 前文部省主任教科書調査官 大学入試センター調査研究員　園城寺信一
7	「わが国の外国語教育はなにをどのように改革すべきか」 －諸外国の外国語教育と比較して－ 慶応義塾大学教授　小池　生夫
8	「コミュニケーション英文法の考え方と実践」 獨協大学外国語学部教授　阿部　一
9	「世界各地の英語と我が国の英語教育」 南山大学外国語学部教授　田中　晴美
10	"A Positive Approach toward Internationalism"－Ten questions regarding English education and internationalism ? 北星学園大学学長　土橋　信男
11	「国際性を育てる英語教育はどうあるべきか」 －総合的言語活動の視点から－ 獨協大学外国語学部教授　阿部　一
12	「日本人の英語べたは何に（誰に）責任があるか」 ＮＨＫラジオ「やさしいビジネス英語」講師　杉田　敏
13	「辞書作りから見た日本の英語教育」 明海大学外国語学部教授　山岸　勝榮
14	「Teaching English Communicatively － From Theory to Practice」 上智大学外国語学部英語学科教授　吉田　研作

■歴代部会長・事務局担当者

年度	部　会　長	事務局担当者
5	佐藤　弘（札稲北）	山下　寧（札稲北）
6	浅井　武治（札丘珠）	澤田石礼二郎（札丘珠）
7	浅井　武治（札丘珠）	澤田石礼二郎（札丘珠）
8	中川　文夫（大　麻）	山館　昌嘉（大　麻）
9	富田　國男（大　麻）	佐々木美喜雄（大　麻）
10	市川　元則（札月寒）	菱谷　尚之（札月寒）
11	宮地　良一（北広島）	中條　伸義（北広島）
12	宮地　良一（北広島）	中條　伸義（北広島）
13	久富　和栄（札東陵）	稲毛　知子（札厚別）
14	櫻田　顯（札國鄰）	稲毛　知子（札厚別）

（札幌厚別高等学校　稲毛　知子）

家　庭　部会

1　この10年をふりかえって－研究発表の歩み－

第30回（平成４年度）
主体的学習態度を高める家庭科教育
＝楽しく、積極的に取り組める
ホームプロジェクト・学校家庭クラブの試み＝
福本　智子（中頓農）
＝我校のホームプロジェクト・
学校家庭クラブ活動の実状＝
田畑優香里（名　寄）

第31回（平成５年度）
パネルディスカッション
「新しい家庭科は何をどのように教えるか」
松村仁穂子（札　北）　後藤あけみ（平　取）
渡部　真紀（釧湖陵）　岩佐　昭代（札東陵）
畠中　康子（道　研）　川埜　絹子（紋別南）

第32回（平成６年度）
生活設計にみる男女の意識の違いと
共学による男女の意識改革
幅　　淳彦（弟子屈）
家庭一般における食物の指導
江口凡太郎（紋別南）

第33回（平成７年度）
「家庭一般」における食生活領域の指導
齋藤　睦子（函　水）
「家庭一般」男女必修のねらいを生かす
指導の在り方と指導の現状
坂田　一重（恵　山）

第34回（平成８年度）
男女必修の「家庭一般」をどう創造するか
渡部　真紀（釧湖陵）
時代の変化に対応する家庭科教育について
小川　篤子（深東商）

第35回（平成９年度）
産業教育担当教員長期実技研修講座参加報告
岩佐美和子（美唄南）
時代の変化に対応する家庭科教育の実践
渋谷　麻子（豊　富）
工業高校における家庭科教育から
小松　裕美（富良野工）

第36回（平成10年度）
産業教育担当教員長期実技研修講座参加報告
東　　昌江（当　別）
自己決定力を身につける授業を目指して
－青年期の性の単元から、
さまざまな生き方を考える
成田　有希（北見商）

第37回（平成11年度）
産業教育担当教員長期実技研修講座参加報告
紀國　明子（江　別）
調理実習の事前指導におけるコンピュータの
活用について
山名みのり（芦別総技）

第38回（平成12年度）
新産業技術等指導者養成講習受講報告
中村　晃子（岩　西）
本校における「社会福祉実習」の実践から
西澤　陽子（清　水）

第39回（平成13年度）
新産業技術等指導者養成講習受講報告
後藤あけみ（江　別）
パネルディスカッション
新教育課程に対応した魅力ある授業の創造
安嶋　真知（美　唄）
土屋　三枝（上　磯）　松本　美子（札拓北）
菅野　美樹（旭　工）　坂口真奈美（岩　農）

2　歴代部会長・事務局担当者

年度	部　会　長	事務局担当者
4年	野元　哲浩（札新川）	山崎　節子（札新川）
5年	佐藤　　祝（札篠路）	山崎　節子（札新川）
6年	佐藤　　祝（札篠路）	横山　順子（札篠路）
7年	泉　　為人（札啓成）	岡本　博子（札啓成）
8年	橋場　　昇（札啓成）	岡本　博子（札啓成）
9年	新野　　健（札真栄）	島　　律子（札真栄）
10年	新野　　健（札真栄）	松浦　静子（札真栄）
11年	佐藤　忠雄（札南陵）	村木　郁子（札南陵）
12年	佐藤　忠雄（札南陵）	村木　郁子（札南陵）
13年	菅原　正利（石狩南）	成田今日子（石狩南）

3　講演・講師

4年度	男女必修の家庭科の実施に向けての課題 文部省教科調査官　河野　公子
5年度	今、家庭科教育に問われること 作家　永畑　道子
6年度	21世紀のライフスタイル 奈良女子大学教授　長嶋　俊介
7年度	これからの家庭科教育 東洋大学教授　一番ヶ瀬康子
8年度	消費者教育の現状と課題 東横学園女子短期大学助教授　中原　秀樹
9年度	子どもの権利条約と子ども虐待 白梅学園短期大学助教授　浅井　春夫
10年度	居心地のよい居場所 道都大学教授　倉本　龍彦
11年度	21世紀に向けての家庭科教育の課題 神戸大学教授　朴木佳緒留
12年度	これからの家庭科教育と環境再生－市民生活の再構築－ 室蘭工業大学教授　丸山　　博
13年度	現代を考える 作家　小檜山　博
14年度	スローフードと食の安全性 拓殖大学北海道短期大学教授　相馬　　暁

（石狩南高等学校　成田今日子）

農　業　部会

1　この10年間をふりかえって

この度、高教研40周年を迎えるにあたり、過去10年間の足跡をたどってみたいと思います。

農業部会はその時々の農業情勢と表裏一体となり、講演、研究発表、研究討議を重ねてまいりました。

特にこの10年間は、従来からの農業の在り方が問われ、農業の持つ多面的な機能がクローズアップされてきました。それは、平成11年に成立した、「食料・農業・農村基本法」に色濃くみられ、食糧の安定的供給のみならず、農村の振興、環境への配慮、伝統文化の継承等が課せられてきております。

それに伴い、農業教育の果す役割も、農業後継者教育という大前提は不変でありながらも、農業技術者教育、農業理解者教育、そして、農業教育を通した人間教育へと多様化したものでありました。

教育の理念についても、作物栽培・家畜飼育管理を中心としたものから、加工・流通をも視野にいれたフードシステムに対応した教育への広がりを余儀なくされ、教育の方法についても、情報処理教育、国際理解教育、先端技術教育、地域教育力、インターシップの導入等多くの試みがなされております。

それが、主題として「新しい時代に向かっての農業教育の使命の再発見と推進はいかにあるべきか」のもとで、講演・研究発表・研究討議に反映され、多彩な講師による貴重な講演、それぞれの学校における、心血を注いだ実践による研究発表へと結集しており、有意義で充実した内容でありました。

今後、21世紀は「食と農の時代」といわれておりますが、農業教育も奇をてらうことなく、地道に実践による教育を心がけ、邁進していかなければならないと思います。そのことが、今日まで高教研に結集し努力した、多くの先輩への我々の使命であると思うからであります。

2　歴代部会長、事務局担当者　（敬称略）

年度	部　会　長	事務局担当者
5年度	角田　順三（岩見沢農業）	伊藤　忠夫（岩見沢農業）
6	鈴木　幹雄（静内農業）	加藤　克洋（静内農業）
7	七田　　茂（静内農業）	加藤　克洋（静内農業）
8	村山　昭二（とわの森三）	小野　愃弘（とわの森三）
9	村山　昭二（とわの森三）	小野　愃弘（とわの森三）
10	土合　紘浩（新十津川農）	宮崎　康弘（新十津川）
11	土合　紘浩（新十津川農）	宮崎　康弘（新十津川）
12	小原　忠雄（深川農業）	鈴木　雄次（深川農業）
13	小原　忠雄（深川農業）	田中　敏幸（深川農業）
14	小原　忠雄（倶知安農業）	大高　　優（倶知安農業）

3　講演講師

5年度「技術革新に対応する農業教育」 文部省初等中等教育局職業教育教科調査官 佐藤　順彦
6年度「地球環境と農教育の在り方」 ～森林・林業を中心として～ 林野庁旭川営林支局　業務部長　知和　秀樹
7年度「つくる漁業をめざして」 「気をつけたい海の動物」 福井県栽培漁業センター　所長　安田　　徹
8年度「豊かな発想で新しい農業技術教育を！」 東京農業大学生物産業学部　講師 農業先端技術研究協会副会長　泊　　功
9年度「農業の評価軸」環境問題は 工業技術で解決できるか 酪農学園大学教授　動物生産システム 家畜管理学教室　農学博士　干場　信司
10年度「農業高等学校における国際理解教育の 推進と情報処理、先端技術教育の現状」 北海道農政部農業改良課　主席専門技術員 黒沢不二男
11年度「進化にむかう農業と農業青年のそだち」 グローバル地域研究所　主宰　小松　光一
12年度「20世紀の農業を反芻し、 21世紀の農業を創造する」 農業先端技術研究協会　会長　西部　慎三
13年度「農業はおもしろい、「身土不二」の 伝統農法に未来を託す」 針塚農産　代表　針塚　藤重
14年度「食糧生産基地北海道の行方 ～新たなる農業教育の推進をめざして～」 北海道東海大学工学部　生物工学科　教授 西村　弘行

4　部会の現状と今後の展望

学校の閉校、閉科、学科の改編等により部会会員の減少がつづいております。また、年令の不均衡がみられ、40代の会員が極端に少なくなっております。この傾向は、今後もつづくことと思われます。このことは、実学を基礎とする農業教育にとってゆゆしきことであります。すなわち、経験による教育指導が求められるからであります。

高度情報化、先端技術化、ＩＴ化等と進展する中、農業教育もそれらと無縁ではいられず、今後とも時機に合った研究テーマのもとで頑張らねばならないと思っております。

（倶知安農業高等学校長　小原　忠雄）

工　業　部会

1　この10年間をふりかえって

平成５年度高教研は30周年を迎えた。当時、専門高校では科目「課題研究」が導入され、各専門高校において取組みが始まっていた。工業部会では科目「課題研究」の取組みについて研究発表、協議が盛んに行われた。「課題研究」は、生徒自らが工業に関する課題を設定し、自ら学習を進めて課題解決を図る科目である。年を重ねる毎に「課題研究」の取組みによる成果が認められ、各工業高校でも創意工夫を凝らし充実した内容となって発展してきた。

平成８年７月第15期中央教育審議会から「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」第１次答申がなされた。また、平成10年７月 理科教育及び産業教育審議会からの答申で「今後の専門高校における教育の在り方等について」示され高等学校教育・専門高校の教育は大きな変革期に入った。

平成12年には「ものづくり基盤技術振興基本法」が制定され、「ものづくり」の重要性があらためて見直され、工業教育の振興が推進されている。

2　歴代部会長、事務局担当者

年度	部　会　長	事務局担当者
５年度	高　橋　淳　一	塚　本　彰　男
６年度	大　熊　　進	寺　島　英　紀
７年度	大　熊　　進	寺　島　英　紀
８年度	沼　田　光　彦	寺　島　英　紀
９年度	沼　田　光　彦	細　川　清　巳
10年度	沼　田　光　彦	細　川　清　巳
11年度	吉毛利　正　也	平　間　信　一
12年度	吉毛利　正　也	平　間　信　一
13年度	小　野　良　隆	髙　橋　芳　光
14年度	四　宮　知　之	向　平　敏　史

3　講演講師

５年度「本道の工業教育に期待するもの」 株式会社マルキンサトウ　取締役社長　佐藤　三男
６年度「工業教育に期待するもの」 ニチレキ株式会社　取締役副社長　蒔田　　寛
７年度「転換期の日本経済　―課題と展望―」 株式会社 たくぎん総合研究所 代表取締役社長　野島　和夫
８年度「半導体産業の将来 ―マルチメディア社会へ―」 株式会社日立製作所 半導体事業部 応用技術本部本部長　御法川和夫
９年度「北海道の工業教育の現状と将来」 北海道職業能力開発短期大学校長 工学博士　大川　時夫
10年度「教育改革と工業教育の展望」 文部省初等中等教育局職業教育課 教科調査官　佐藤　義雄
11年度「最新の電子応用分野の動向と 工業高校生に期待すること」 株式会社日立製作所　半導体グループ 電子統括営業本部システムＬＳＩ技術本部 本部長　御法川和夫
12年度「モノづくりと人づくり」 トヨタ自動車北海道株式会社 取締役第一工場長　寺島　泰彦
13年度「実業・経営に『感』の甘さと鋭さが… 今、思えば！教室は“運送業”ではなく、 “倉庫業”では断じてない」 カイントネス・オブ・マネジメント・ブレーン 山﨑　道弘
14年度「日本のものづくりと人づくり」 ものつくり大学学長　野村　東太

4　工業部会の現状

今日、科学技術の高度化、情報化、国際化など社会の著しい変化と産業構造の急速な変化により、工業教育にはさらなる転換が必要とされている。情報通信をはじめとする技術革新や環境負荷軽減技術などに対応した産業の担い手となる人材の育成など21世紀を見据えた工業教育の推進を模索している。

平成11年３月文部省（現文部科学省）から「高等学校学習指導要領」が告示され、「生きる力」を育むことを目標に新たに「総合的な学習の時間」が設けられた。

工業高校では、約55％の学校が３単位の全てを、約35％の学校が２単位分を「課題研究」で代替する方向である。

専門高校においては地域や産業界とのパートナーシップ（双方向の協力関係）を確立することが求められている。就業体験を全校的に取り組んでいる工業高校はまだ少数であり、各学校では３日間程度の就業体験（インターンシップ）の実施に向け取組みを進めている。

各工業高校では、それぞれ地域の実態に則し、保護者の要望を反映させた「特色のある学校」として、将来の工業のスペシャリスト育成のため、改革に取り組んでいる。

（札幌琴似工業高等学校　向平　敏史）

商　業　部会

1　この10年をふりかえって

北海道高等学校教育研究会が発足して、40周年を迎えることとなりましたことを心よりお祝い申し上げます。高教研商業部会の発足から今日までの経過について30周年まではこれまでの記念誌に詳しく記載されているので、ここでは最近の10年について略記してみることにする。

高教研の２日目に各教科部会が実施され、商業部会においては、午前中に後ほど詳細に記載する講演が行われ午後からは分科会に分かれ研究発表が行われている。

この10年の高等学校に関わる文部科学省関係からの通知・通達の主なものと実施された事柄の内容を列記すると、平成５年３月に総合学科について通知、平成６年現行学習指導要領の実施、そして平成10年７月に理科教育及び産業教育審議会は「今後の専門高校における教育の在り方等について」の答申をしている。同じ平成10年に専門高校等の教育機能及び施設の開放についての通知、そして平成11年新学習指導要領が告示されている。平成15年４月からは新学習指導要領による学習指導が新１年生から学年進行で始まる。

高教研商業部会における研究も上記に掲げた内容とも関連を持ちながら進められてきている。各年における分科会数は３ないし４で実施され、教育課程、課題研究、ＯＡ教育、体験学習、進路指導などの分科会が開かれた。最近では新学習指導要領を踏まえた教育課程、インターンシップなどの体験学習、大学進学を視野に入れた進路指導などの分科会が開かれ、全道各地の普通科や総合学科も含めた商業科教員により活発に研究・討議がなされてきている。

2　歴代部会長・事務局担当者

年度	部　会　長	事務局担当者
５年度	小　松　信　夫	高　塩　光　明
６年度	小　松　信　夫	高　塩　光　明
７年度	越　野　　孝	斉　藤　睦　夫
８年度	越　野　　孝	斉　藤　睦　夫
９年度	宮　森　正　勝	斉　藤　睦　夫
10年度	宮　森　正　勝	斉　藤　睦　夫
11年度	斉　藤　睦　夫	能　登　誠之助
12年度	斉　藤　睦　夫	能　登　誠之助
13年度	富　樫　幸　治	永　野　博　子
14年度	富　樫　幸　治	永　野　博　子

3　商業部会講演講師

５年度「変わる商品マーケティング」	（株）電通マーケティング総括局 消費生活研究部部長　森住　昌弘
６年度「企業が求めるこれからの人材とその育成 －ある企業現場での取り組み－」	富士通株式会社通信事業推進本部 ソフトウェア開発部担当部長　菅原　　護
７年度「21世紀に向けての商業教育の在り方」	一橋大学商学部教授　片岡　　寛
８年度「情報処理・情報処理教育の現状と課題」	川口短期大学教授　中澤　興起
９年度「流動する日本経済 －生活者の視点と経済教室－」	北海道大学教授　井上　久志
10年度「駐在員子女のドイツ教育事情」	ＴＤＫ株式会社事業本部 市販事業部事業部長　斉藤恒一郎
11年度「流通構造の変化と商品教育」	千葉商科大学商経学部教授　鮎川　二郎
12年度「商業科における進路指導」	千葉商科大学商経学部助教授　鹿嶋研之助
13年度「金融実務と金銭感覚」	北洋銀行頭取　高向　　巌
14年度「簿記教育と会計基準の変化について」	札幌学院大学教授　坂下　紀彦

4　商業部会の現況

商業部会の平成５年度における会員数は374名であり、平成14年度における会員数は285名である。

北海道の商業教育に関わる研究会として、二つの大きな研究会が開かれている。校長協会商業部会が主催する７月に行われる北海道高等学校商業教育研究集会と本校を会場に１月に行われる高教研商業部会の研究会である。他に規模は小さいが校長協会商業部会の主催の４つの小学科の研究会が行われている。高教研の研究会を運営実施するにあたり、北海道教育委員会産業教育指導班の指導主事、校長協会商業部会の絶大な協力を得て準備を行っている。また全道各地の商業教育に携わる教職員の皆さんの協力も忘れられない。

5　今後の展望

高校生の減少や新学習指導要領の実施など、量的にも質的にも、高等学校での教育に変化が生じてきています。キーワードとして「新しいタイプの高等学校」をよく耳にします。新しい時代に向けて、これからも本研究会を通じて会員相互の研究交流を深め、ますます発展されることを祈念いたします。

（札幌啓北商業高等学校　加藤　和明）

水　産　部会

1　この10年間をふりかえって

現在、水産部会を構成している学校は、小樽水産、函館水産、厚岸水産の３つの単置校と水産、普通科の併置校である戸井高校を含め４高校となっています。その中で水産関係教員は100名と教科部会の中では最も少人数ですが、会員登録の数は86人で、研究大会の参加者も60名と非常に高率となっています。

しかしながら、この10年間、部会として印象に残ることは、少子化に伴い、平成９年３月に南茅部高校栽培漁業科の廃科、平成14年度４月から厚岸水産高校の学級減があったことです。産業構造や就業構造の大きな変化や生徒の減少期にあって、一次産業としての水産業は、なかなか厳しい状況にありますが、現在ある水産高校もこの10年間に学科改編をするなど新しい時代に対応した水産教育を推進しているところです。

水産における主テーマは、この10年間に「新しい時代に対応する水産教育はどう進めるべきか」（～平成６年度）から「新しい時代における水産教育の今日的課題とその対応はどうあるべきか」（平成７年～12年）と、さらに平成13年度から「新世紀のふるさとをきり拓く水産教育はいかにあるべきか」と発展し、水産の各学科に共通する諸問題を扱うこととしています。

各学科の専門的な内容を協議する研究会については、全国高等学校水産教育研究会（全水研）につながるブロック組織である北海道高等学校水産教育研究会（北水教研）があり、６月の「北水教研」、正月の「高教研」が水産の二大教育研究会となっています。

講演の講師は、水産にかかわるその年度の話題（漁業、栽培、食品衛生、教育課程）など中央や地方講師をお願いしております。

また、会の司会は各校の教頭、研究発表は毎年２編とし、輪番で決めています。特筆すべきことは、毎年会員が「研究紀要」に執筆していることと平成９年度～11年度の研究会では、長尾・中畑・勝見校長が実践研究を発表したことが印象的でありました。

2　歴代部会長、事務局担当者

年度	部　会　長	事務局担当者
５年度	勝木　茂（小樽水）	平沖　道治（小樽水）
６年度	松見　和幸（小樽水）	平沖　道治（小樽水）
７年度	松見　和幸（小樽水）	平沖　道治（小樽水）
８年度	松見　和幸（小樽水）	平沖　道治（小樽水）
９年度	長尾　英一（小樽水）	中谷　秀夫（小樽水）
10年度	長尾　英一（小樽水）	中谷　秀夫（小樽水）
11年度	長尾　英一（小樽水）	中谷　秀夫（小樽水）
12年度	小越　征夫（小樽水）	中谷　秀夫（小樽水）
13年度	小越　征夫（小樽水）	中谷　秀夫（小樽水）
14年度	成田　安孝（小樽水）	大山　知幸（小樽水）

3　水産部会講師

５年度「これからの北海道水産業」 北海道栽培漁業振興公社副会長　菊池　健三
６年度「北海道における栽培漁業の現状と展望」 株式会社エコニクス取締役顧問　川村　一廣
７年度「サケからのメッセージ」 サケのふるさと館館長　木村　義一
８年度「サケ・マスと自然」 財団法人北水協会監事　小林　哲夫
９年度「水産教育を取り巻く今日的な課題」 文部省教科調査官　中谷　三男
10年度「水産高校教育の変遷と新たな展望」 産業教育中央振興会前事務局長　間山　郁三
11年度「遠洋マグロ漁業の現状について」 日本鰹・鮪漁業協同組合連合会常務理事 壁矢　恵行
12年度「北海道の食品衛生管理について」 北海道立衛生研究所主任研究員　武士　甲一
13年度「教育課程の編成と指導計画の作成」 国立教育政策研究所教育課程調査官　落合　敏邦
14年度「水産教育の今日的課題」 東京水産大学講師　赤津　豊

4　水産部会の現況

高教研は札幌での全体会に続いて、水産部会は雪の多い小樽で開催されています。会の運営は小樽水産が担当し、マンネリ化に陥らないよう苦労しています。

地元の小樽水産の専門の先生方は、ほとんど全員が参加しておりますが、地方の先生方は、学級減や研修旅費の厳しい中で参加者が少し減少しています。この会に参加して得るものは、日頃の実践を通して、各学校が抱えている課題を出し合い、高教研のねらいである新たな視点や方法を見いだす高校教育の創造にある訳ですから、各学校では、輪番での参加や他の研修会などと抱合せするなど工夫して参加しており、部会としては、多くの会員が参加できるような状況をつくることが求められており、今後の課題となります。

また、情報交換の場では、会員相互の親睦を深めながら、各学校のコミュニケーションが図れるよう努めております。

5　今後の展望

高教研水産部会の果たす役割は、今まで述べてきたように、これからも水産での大きな教育環境の変容が予想されることから、様々な課題解決に向け推し進めていかなければならないと思います。

今後とも、部会に対する会員からの真摯な意見を聞きながら、積極的な参加と本研究会に対する協力を期待します。

（小樽水産高等学校　成田　安孝）

分科会研究成果一覧

【国　語】

第30回（平成４年度）

【講　　演】日本人の心とことば

東京工業大学名誉教授　芳賀　　綏　氏

【研究発表】

・論理的な文章の読み方を学び、理解力向上を目指した一指導

伊藤　美徳（旭川東）

・新教育課程「古典講読」にむけて

清澤　智克（芦別）

・生徒と共に省る国語の授業

宮下　祐司（札幌稲西）

第31回（平成５年度）

【講　　演】言語教育を考える

北海道教育大学札幌校助教授　吉見　孝夫　氏

【研究発表】

・論理的思考能力の育成を目指して
～構造分析のパターン化についての一試行

青木　裕治（紋別北）

・漢文に注目し活動させる入門期の漢文指導
～生徒の意欲を刺激し、表現指導を積極的に取り入れて～

江川　順一（稚商工）

・国語Ⅰ（現代文）授業展開の一考察
～テーマに即した授業内容と教師集団としての一工夫～

武田　克伸（札幌開成）

第32回（平成６年度）

【講　　演】ことばの働き

詩人　川崎　　洋　氏

【研究発表】

・「国語Ⅰ」における音声言語指導と学校生活での音声言語指導のあり方

生田　仁志（苫総合経済）

・共通テーマを意識した小説の読解方法
～参加できる指導から主体的読書習慣の定着を目指して～

上野　直幸（恵庭南）

・生徒の古文への関心を高めるための一つの試み
～生徒が主体的に学習し活動する授業の一考察～

西村　珠江（遠軽郁凌）

第33回（平成７年度）

【講　　演】言語学習の方向～実験授業の試み～

宇都宮大学教育学部教授　長尾　高明　氏

【研究発表】

・「国語Ⅰ」における理解指導をふまえた表現指導について
～「読み、書き、聞き、話す」言語活動を通した試み～

栗林　和宏（留萌）

・新学習指導要領を踏まえた古典指導
～生徒の能動的な学習を目指した「傍釈」授業の試み～

天内　　優（釧路湖陵）

・評論文指導における評価の工夫

合浦　英則（鹿追）

第34回（平成８年度）

【講　　演】いのちと心

僧侶　松原　哲明　氏

【研究発表】

・生徒の主体的な学習活動の定着を目指して
～グループ学習による和歌の鑑賞～

遠藤　直樹（浦河）

・漢詩の詩句から広がる世界の発見
～漢詩の相互理解とことばから新しい世界を知る試み～

佐藤　英三子（札幌国際情報）

・国語科教育を通じ論理的思考能力を育成するために～学習者の論理的思考を育成するための説明的文章（論説文・評論文）の理解指導～

岡部　　壽（小清水）

第35回（平成９年度）

【講　　演】読むことと書くこと

作家　黒井　千次　氏

【研究発表】

・単語家族による漢字授業書

辰川　英俊（砂川北）

・生徒の興味・関心を喚起する授業を目指して
～古典読解にかかわる一試行～

遠藤　史子（豊富）

・古典に対する興味・関心を高める授業を目指して

東谷　一彦（札幌西）

第36回（平成10年度）

【講　　演】漢詩の魅力にひかれて

二松学舎大教授　石川　忠久　氏

【研究発表】

・日本語におけるスピーキング・ヒアリングの指導
～発声と論理的思考を通してディベートに至るまで

鈴木　　浩（苫小牧工業）

・生徒の感性を生かした古文学習の実践を目指して
～歌って覚える助動詞と古文単語の学習～

中田　伸次（旭川東）

・「論語」の読みに関する若干の考察

鹿角　英輔（幕別）

第37回（平成11年度）

【講　　演】はなし、話、咄～放送四方山話～

北海道放送アナウンス専門局次長　松永　俊之　氏

【研究発表】

・図解作業を取り入れた評論の構造的読解
～主体的な学習による言語能力の育成～

吉村　教賢（苫小牧西）

・「国語Ⅰ」「国語Ⅱ」における表現指導
～スピーチ指導を中心とした「伝え合う力の育成」～

高田　敏久（余市）

・鑑賞から表現へ、心を繋ぐ韻文指導
～一行詩・短歌の取り組みを通して～

劔持　裕子（遠軽郁凌）

第38回（平成12年度）

【シンポジウム】「新学習指導要領にかかわって」

コーディネーター　北海道札幌南高等学校長　山本　　勇

シンポジアスト

東京書籍株式会社国語第一編集長　佐藤　芳道　氏

石狩教育局高等学校教育指導班主査　渡部　泰夫

道立教育研究所国語科教育研究室長　江川　順一

北海道札幌旭丘高等学校教諭　武田　克伸

【研究発表】

・コンピューターを使用した授業展開の実践

土田　聖司（浜頓別）

・受験校における国語学習の一考察
～日本人として、社会人としての自覚を育てる国語学習～

吉瀬　献策（札幌手稲）

・総合学科における国語の指導

坂根　利香（清水）

第39回（平成13年度）
【講　　演】
桜美林大学教授　小林　一仁　氏
【研究発表】
・国語表現の実践～600字小論文への段階的指導について～
小島　政裕（えりも）
・現代文「読解」授業の活性化を求めて
～教材の特性に応じた授業展開の工夫～
佐々木　秀穂（池田）
・T・Tを取り入れた国語表現の授業
彫山　智一・神村三枝子・村中俊一郎（札幌北）

【地歴・公民】

第30回（平成４年度）
全体部会
【講　　演】最近の高等教育にみる“勝ち残り”戦略と戦術
～“勝ち残り”戦略、設置基準の弾力化、入学者選抜法、序列変化、そして受験生の意識変化への対応～
旺文社専務取締役　代田　恭之　氏
現代社会部会
【講　　演】森からのおくりもの
北海道大学名誉教授　川瀬　　清　氏
【研究発表】
・「食」の視点で環境問題を考える
～ハムの食品添加物を扱った授業実践～
庄司　信一（大麻）
・環境問題への取り組みと発展的学習について
～ボランティア活動と社会見学の体験を通しての環境問題への理解と現代社会との関連について～
塙　　浩伸（留萌）
日本史部会
【講　　演】北海道議会開設運動の研究
札幌学院大学教授　船津　　功　氏
【研究発表】
・日本史における仮説実験授業の実践
池田　毅司（平取）
世界史部会
【講　　演】ソ連邦崩壊と民族問題～歴史とアジアの覚醒～
札幌市立高等専門学校助教授　西山　克典　氏
【研究発表】
・異文化摂取の形～鎖国日本からの贈り物～
華輪　健治（遠軽）
地理部会
【研究発表】
・地理における作業学習の取り組み
～イメージ・トリップの実践例～
山野寺　彰（浜頓別）
・地域研究～身近な地域の教材化～
岡積　義雄（札幌丘珠）
倫理部会
【講　　演】社会科における今日的課題
北海道大学工学部教授　堤　　耀広　氏
【研究発表】
新教育課程における倫理の教材＝現代の家族＝
松原　　宏（歌志内）
政治・経済部会
【講　　演】国内政治の現状と課題
東京大学大学院教授　佐々木　毅　氏
【研究発表】
国際化社会における日本のあり方を考える～地域の特質を生かした北方領土問題からのアプローチ～
巌　　和義（別海）

第31回（平成５年度）
全体部会
【講　　演】細川政権と政治改革
北海道新聞社編集局政治部部長　山本　研一　氏
現代社会部会
【講　　演】国際先住民年を振り返って
二風谷アイヌ文化資料館館長　萱野　　茂　氏
【研究発表】
刺激のある、印象に残る授業を目指して
毛利　禎晴（士別商業）
日本史部会
【講　　演】北方諸民族間の文化交流
北海道大学文学部教授　菊池　俊彦　氏
【研究発表】
北からの日本史～北海道の明治維新～
松本　　徹（登別）
世界史部会
【講　　演】ヴェトナム・カンボジアと日本
北海道大学法学部教授　坪井　善明　氏
【研究発表】
新教育課程における世界史の在り方について
古本　幹彦（本別）
地理部会
【研究発表】
・自己教育力を育成する地理教育の在り方について
～視聴覚機器を導入した野外調査の取組み～
濱田　哲也（上ノ国）
・自ら学ぶ意欲を喚起する授業のあり方を求めて
～「観光教育」による異文化理解～
奥谷　忠浩（天塩）
倫理部会
【講　　演】実存主義と現代
青森明の星短期大学助教授　井上　摩耶　氏
【研究発表】
生徒の考えを引き出す「倫理」の取り組み
～「幸福プリント」を使用した実践～
金森　卓紀（別海）
政治経済部会
【講　　演】政治改革と政治教育
北海道大学教授　山口　二郎　氏
【研究発表】
国際理解と「国旗」の取り扱いについて
花田　　肇（穂別）

第32回（平成６年度）
現代社会部会
【講　　演】「国際家族年にちなんで」
室蘭工業大学教授　尾見　氏
【パネルディスカッション】
司　　会　北広島西高等学校教諭　村田　尋如
パネラー　檜山北高等学校教諭　佐々木光晴
札幌市立柏中学校教諭　荒島　　晋
広島町立西部小学校教諭　板垣　　修
北海道情報大学教授　広瀬　玲子
大麻高等学校教諭　徳正　栄二
日本史部会
【講　　演】姿をあらわした巨大集落、三内丸山遺跡
青森県埋蔵文化財調査センター主査　岡田　康博　氏
【研究発表】
魅力ある日本史授業を模索して
土田　敏弘（和寒）
世界史部会
【講　　演】ロシア極東地域の最近の経済情勢について
北海道大学スラブ研究センター教授　村上　　隆　氏
【研究発表】
斉藤（寿都）
地理部会

【講　演】地理指導の改善の方向と指導～21世紀の地理授業～
文部省初等中等教育局教科調査官　渋澤　文隆　氏
【研究発表】
・大学受験を意識した「地理」の指導計画について
～小樽潮陵高校における受験指導～
稲垣　浩（小樽潮陵）
・興味をもたせる授業作り～郡部校での試み～
大西　崇（厚岸潮見）
・生徒が主体的にとり組む授業作り
～「ワールドリサーチ」を通しての実践研究～
田辺　孝規（上士幌）

倫理部会
【講　演】マスコミと価値観
藤谷　栄也　氏
【研究発表】
・新教育課程における「倫理」に求められているものは
元紺谷　尊広（網走南ヶ丘）
・源流思想の中から、在り方生き方についてどのように授業を展開していくか
山口　晴敬（室蘭工）

政治経済部会
【講　演】世界の中の日本
北星学園大学経済学部教授　小島　仁　氏
【研究発表】
・教科書別国際単元の扱い方の違いについての考察
久保　真理（北見仁頃）
・新指導要領における「現代の世界と日本」の内容構成試案
～社会科の授業にエイズ教育を～
山本　雅俊（上士幌）

第33回（平成７年度）
現代社会部会
【講　演】マルチメディア時代の展望～教育とマルチメディア～
ＮＴＴ北海道支社マルチメディア推進室長　黒岩　邦夫　氏
【研究発表】
・実践ディベートマッチ～公民科教育とディベート学習～
古本　幹彦・木全　正樹（本別）
・フィールド・ワーク～知的総合力を刺激する実感学習～
塚田　敏信（札幌篠路）
・生徒が主体的に学習する方法について
～職業高校定時制における実践～
今野　博友（室蘭工）

日本史部会
【講　演】日本古代対外関係史の成立
早稲田大学第一文学部助教授　李　成市　氏
【研究発表】
・校外学習（体験学習）「土器作り」の取組み
木村　仁（女満別）
・国史を超える「高校日本史」試論
西村　喜憲（札幌開成）

世界史部会
【講　演】帝国主義について
北海道大学経済学部教授　加来　祥男　氏
【研究発表】
・世界史における絵画教材の利用について
～キリスト教史・ルネサンス史・ロシア史での実践を通じて～
出口　敬智（名寄）
・魅力ある授業作りをめざして
～生徒の興味を生かした授業や作業学習への取り組み～
山賀　智文（豊富）

政治経済部会
【講　演】オウム問題と若者の心
千葉大学教育学部助教授　諸富　祥彦氏

倫理部会
【講　演】欲望の肯定学～個人主義の倫理学～
札幌大学経済学部教授　鷲田　小彌太　氏
【研究発表】
・倫理科教育における今日的課題とその指導方法について
～人間の在り方生き方についての自覚を深める授業とは～
岩田　昭夫（岩内）
・「不安」の時代を越えて
木村　浩（札幌南陵）

地理部会
【講　演】現代社会と情報化
北海道新聞論説委員　本間　至能富　氏
【研究発表】
・生徒の学習意欲を喚起する授業づくり
～作業学習の展開と資料の有効活用について～
白浜　徳博（名寄恵陵）

第34回（平成８年度）
現代社会部会
【講　演】現代における人権問題
札幌学院大学法学部教授・弁護士　渡部　保夫　氏
【研究発表】
・学校生活における権利行使～夏季略装導入の生徒会活動を通して学ぶ～
杉山　敬子（岩内）
・本校における授業展開の現状と課題
中森　賢司（遠軽郁凌）

日本史部会
【講　演】勝山館に見る北の中世
上ノ国町教育委員会・文化財課学芸員　松崎　水穂　氏
【研究発表】
13～16世紀の環日本海地域とアイヌ
中村　和之（札幌稲西）

世界史部会
【講　演】ユーラシア・ネットワークの転換と鄭和の南海遠征
北海道教育大学教授　宮崎　正勝　氏
【研究発表】
・農業高校における世界史授業の取り組み
～本校における授業実践～
太田　吉祐（岩見沢農）
・基礎的・基本的な内容を重視した作業学習の展開
～世界史Ｂの作業学習の試みについて～
中山　弘章（札幌清田）

政治経済部会
【講　演】ロシアの秩序と日本の秩序
北海道大学言語文化部ロシア語教育系教授　杉浦　秀一　氏
【研究発表】
・学ぶ喜びを引きだす政治・経済の授業を目指して
～生涯学習を踏まえた授業実践～
鈴木　広基（岩見沢農）
・資料活用能力を育てる指導の在り方を求めて
～郷土意識調査を通じた取組みの一例～
横田　久貴（風連）

倫理部会
【講　演】現代と宗教
桐蔭学園横浜大学教授　八木　誠一　氏
【研究発表】
思考する倫理の授業を目指して
佐々木　光明（小清水）

地理部会
【講　演】国際社会人として外国の文化をどうみるべきであるか？
札幌韓国教育院院長　趙　鎔仙　氏
【研究発表】
・パソコンを利用した地図学習の実践
塙　浩伸（琴似工）
・遠いヨーロッパを近く感じさせるため
～海外旅行計画の作成を取り入れた授業～

芳澤　文明（旭川工）

第35回（平成９年度）

現代社会部会

【講　　演】21世紀に向けての政治課題

北海道大学法学部教授　山口　二郎　氏

【研究発表】

・学ぶことが喜びとなる授業を

山本　政俊（上士幌）

・生命倫理及び宗教に関する指導について

村山　暢樹（釧路北陽）

日本史部会

【講　　演】近現代日本の選択肢～大国主義と小国主義～

札幌学院大学経済学部教授　田中　　彰　氏

【研究発表】

・空知地方の開拓（開発）功労者は誰か

～アイヌ・囚人・タコ労働者・朝鮮人と中国人・娼妓の足跡を追う～

杉山　四郎（岩見沢西）

世界史部会

【講　　演】世界史と日本史の可能性

東京大学大学院総合文化研究科教養学部教授　山内　昌之　氏

【研究発表】

・世界史における生徒の主体的な学習を促す学習指導の工夫

後藤　亜聡（浦河）

・生徒が興味を抱く授業づくりの工夫について

矢部　和弘（士別東）

地理部会

【講　　演】国際協力と日本のＯＤＡの現状について

国際協力事業団北海道国際センター札幌所長　長島　俊一　氏

【研究発表】

・わかる授業の創造を目指して

吉岡　剛孝（野幌）

・地理授業とパソコンの活用

～池田の「ワイン産業」と気候シュミレーションから、気候学習の重要性を認識する～

篠原　行雄（池田）

倫理部会

【講　　演】カントの倫理学

北海道大学名誉教授　宇都宮　芳明　氏

【研究発表】

・家族を“考える”授業の試み

小野　容明（札幌啓北商）

政治経済部会

【講　　演】現代国家を問い直す

北海学園大学法学部教授法学部長　山本　左門　氏

【研究発表】

・法教育カリキュラム導入の意義に関する研究

木村　哲也（札幌厚別）

・政治・経済の「学力定着」に関する一考察

～新教育課程における必修政経（１年）と選択政経（３年）の授業実践を通して～

釣井　幸次郎（帯広三条）

第36回（平成10年度）

現代社会部会

【講　　演】北海道の森と川を語る

北海道大学地球環境科学科教授　小野　有伍　氏

【研究発表】

・地域学習を通した横断的・総合的な学習の試み

中村　隆之（枝幸）

・地域の教材化

瀧澤　共喜（洞爺）

日本史部会

【講　　演】戦前日本の植民地支配と北海道

～北大で発見された抗日指導者の遺骨が語るもの～

北海道大学文学部教授　井上　勝生　氏

【研究発表】

「元寇」について考える

長谷　　巌（札幌星園）

世界史部会

【講　　演】世界史とロシア

北海道大学文学部教授　栗生澤　猛夫　氏

【研究発表】

・生徒が思い描く東西交渉史

西　　寛（北広島西）

・「表現」を重視した世界史の授業

～主体的に取り組む相乗効果を期待して～

平野　道雄（遠軽）

地理部会

【講　　演】

・ごみを通してみえてきたこと

循環ネットワーク北海道　岡崎　朱実　氏

・環境地図づくりの魅力について

滝川高等学校　小野寺　徹　氏

【研究発表】

環境教育への取り組み～地域に根ざした環境教育の実践～

笹森　　敦（雄武）

倫理部会

【講　　演】

・今どきの子どもと学校

北海道大学教育学部助教授　西本　　肇　氏

・倫理の授業のあり方について～ギリシャ思想の授業を通して～

千歳高等学校　西薗　正規　氏

【研究発表】

・生徒の主体的な思考能力を育成する授業の在り方

～倫理分野を通して思考力を養う授業についての問題提起～

高谷　康博（足寄）

政治経済部会

【講　　演】学校における今後の経済教育・消費者教育

～アメリカの消費者経済学教育からのヒント～

消費者教育支援センター主任研究員　阿部　信太郎氏

【研究協議】

・新聞記事を使った授業展開について

中野　克彦（えりも）

・ディベート授業について

松本　祥一（紋別北）

第37回（平成11年度）

現代社会部会

【研究発表】

地域民間講師とのティームティーチング授業

中野　弘志（月形）

日本史部会

【講　　演】アイヌ史研究の「キーワード」をめぐって

～いくつかのアイヌ語の単語の本来の意味～

札幌学院大学人文学部助教授　奥田　統己　氏

【研究発表】

・生徒の主体性を引きだす授業の創造

横堀　　晃（遠軽）

・地理歴史科における地域史の教材化～北海道史授業化の試み～

阿部　保志（上士幌）

世界史部会

【講　　演】イタリアにおける国民国家の形成

北海道大学文学部教授　北原　　敦　氏

【研究発表】

・プリントを重視した授業の一例

蛯子　賢一（恵庭北）

・レポート作成を通した課題解決的学習

～生徒の主体性を引き出すために～

雨宮　嘉宏（美幌農）

地理部会
【講　　演】デジタル地図社会における北海道地図の取り組み
北海道地図株式会社ナビゲーション課課長　長嶋　正明　氏
【研究発表】
・地域を理解する教育の実践
阿部　　譲（鹿追）
・資料を活用した地理の授業
福井　朋美（八雲）
倫理部会
【研究発表】
・自ら学ぶ意欲を高める「倫理」の授業展開
船塚　敦子（札幌清田）
・他者とのかかわりを実感できる授業の実践
～情報機器利用の試み～
膳亀　奈美江（留寿都）
政治経済部会
【研究発表】
・政治・経済教育の今日的課題とその指導方法について
～シュミレーションを取り入れた経済教育の実践～
今野　博友（浜頓別）
・「政治経済」と関連づけている地域に根ざした特別活動
～ふるさと子供議会～
山口　晴敬（上ノ国）
公民部会
【講　　演】時代の変化をどう読むか
作家　木下　英治　氏
第38回（平成12年度）
現代社会部会
【研究発表】
・地域研究の現状と課題～総合的な学習の時間との関わり～
小門　　宏（豊富）
・公民科における福祉教育
～地域に根ざした思いやりの心を育てる福祉教育の試み
阪下　晴世（沼田）
日本史部会
【講　　演】縄文時代の生活と文化
南茅部町教育委員会埋蔵文化財調査室長　阿部　千春　氏
【研究発表】
・高等学校「日本史」教科書の中のアイヌ文化
幡本　将典（夕張）
・日本史教育における今日的な課題についての考察と実践例
柴田　　一（釧路湖陵）
世界史部会
【講　　演】近代イギリス史における「フロンティア」国民国家論とポスト・コロニアル論の視座
北海道大学文学部西洋史学科助教授　長谷川　貴彦　氏
【研究発表】
・ユダヤ人を理解するための授業プラン
古代～近代ヨーロッパにおけるユダヤ人史
奥田　　尚（湧別）
・隣国との関わりをとおして我が国を見直す韓国見学旅行に向けての実践報告
田中　宏治（大成）
地理部会
【講　　演】環大西洋を巡る、音と踊りの神々
写真家・作家　板垣　真理子　氏
【研究協議】
・地理Ａにおける「地域調査」の実践と課題
～ワールドリサーチ＆トラベルを通して～
稲場　康典（中標津）
【研究発表】
地域を再発見する地域研究授業
～地域理解と情報活用能力を高める～
藤野　真澄（秩父別）
倫理部会
【研究発表】
・自ら学ぶ意欲を高める「倫理」の授業展開
～お産で考える生命倫理～
岡部　文佳（札幌龍谷学園）
・受験科目としての倫理と生き方としての倫理
伊藤　竜司（旭川東）
政治経済部会
【研究発表】
・パソコン等を活用した授業
小林　　祥（室蘭工）
・新聞の効果的利用に関する一考察
～ＮＩＥ（教育に新聞を）の実践から～
毛利　禎晴（士別商）
第39回（平成13年度）
現代社会部会
【講　　演】21世紀に通用する地域開発の切り口
庄司経営開発事務所中小企業診断士　庄司　俊雄　氏
【研究発表】
・生徒参加型の授業と多角的な評価を目指して
～ディベート学習を通しての試み～
福田　敏憲（士幌）
・「自ら学び自ら考える」力を育てる授業の実践
～表現する力・文章を作成する力を身につける～
松井　恵一（壮瞥）
日本史部会
【講　　演】蝦夷地のアイヌ社会と和人
～シャクシャインの蜂起をめぐって～
筑波大学歴史・人類学系助教授　浪川　健治　氏
【研究発表】
・ノート・プリントを工夫した授業
蛯子　賢一（恵庭北）
・日本史を面白いと思わせたい～郷土史を取り入れた授業～
安藝　宏和（恵山）
世界史部会
【講　　演】土地文章から見る中国近代江南の地主制
北海道教育大学札幌校教授　夏井　春喜　氏
【研究発表】
・基礎基本の定着を図る一実践方法
～生きる力の育成を中心として～
森部　磨美（北見仁頃）
地理部会
【講　　演】日本人と温泉
旅行作家・札幌国際大学教授　松田　忠徳　氏
【研究発表】
・生徒の感性を育む授業～五感を活用した地域巡検～
山下　武人（伊達緑丘）
・生徒の自主性を引き出す授業～歩測で距離を測ろう～
関原　文明（遠別農）
倫理部会
【講　　演】脳をいかに育むか
北海道大学医学研究科機能分子学分野教授　澤口　俊之　氏
【研究発表】
・生徒の主体性を引き出す授業の創造
～生徒が興味・関心を持つ授業の工夫～
木戸　香織（熊石）
政治経済部会
【講　　演】変わる政治と新しい政府像
早稲田大学経済学部教授　谷藤　悦史　氏
【研究発表】
・調査学習の取り組みについて
鈴木　　香（風連）
・株と投資を理解する授業について
則末　一大（興部）

【数　学】

第30回（平成４年度）

【講　　演】数と図形の科学～詩人の心をもとう～

学習院大学教授　飯高　　茂　氏

【研究発表】

・本校における学力向上のための取り組み

大沼　博史（熊石）

・アメリカと比べながら

播　　良夫（池田）

・マニュアル時代の自己教育力の育成

中西　勝範（札幌啓成）

・学習意欲を喚起する数学Ⅲの指導内容の構成について

関谷　浩則（帯広緑陽）

第31回（平成５年度）

【講　　演】新課程での数学教育について

大阪大学理学部教授　山本　芳彦　氏

【研究発表】

・数学的思考力の向上を目指したコンピューターの利用について

中田　清春（紋別南）

・新教育課程における情報教育はいかにあるべきか

後藤　優司（札幌稲西）

・数学の習熟度別学習指導の現状とその課題について

浅野　泰弘（阿寒）

・新教育課程における数学の授業について

大門　正人（利尻）

第32回（平成６年度）

【講　　演】新課程での大学入試について

東北大学教授　加藤　順二　氏

【研究発表】

・数学的な考え方・態度の回復を図るための指導の研究

椿　　達（苫小牧東）

・新教育課程　その実施と現状

冨田　敬人（月形）

・数学におけるティーム・ティーチングについて

澤尻　知徳（様似）

・数値解析学の基礎としての数学Ａ・Ｂ・Ｃ

高橋　秀尚（寿都）

第33回（平成７年度）

【講　　演】今、数学教育に欠け落ちているものがあると思いませんか？

九州大学大学院数理学研究科　吉川　　敦　氏

【研究発表】

・数学の習熟度別授業の展開について

和歌　志郎（礼文）

・インターネットは数学教育を変えるか

奥村　　稔（旭川凌雲）

・コンピュータ・グラフィックスを利用した教材作成

松本　睦郎（札幌平岡）

第34回（平成８年度）

【講　　演】新指導要領―その理想と現実

大東文化大学法学部教授　長岡　亮介　氏

【研究発表】

・新教育課程における数学教育の実際と今後
～渡島管内各高等学校へのアンケート結果から～

斎藤　邦展（函館西）

・小規模校における習熟度別授業の展開
～熊石高校・大成高校の実践を通して～

山崎　雅明（熊石）、小野崎　純（大成）

・面積と積分・落下運動と微分

氏石　英夫（白樺学園）

第35回（平成９年度）

【講　　演】考える数学、発見する数学

大阪大学大学院理学研究科教授　山本　芳彦　氏

【研究発表】

・個に応じた指導を目指して

石川　克志・伊藤　浩次（釧路北）

・数学Ｂ・Ｃにおける空間図形・軌跡の学習指導はいかにあるべきか～模型による効果的な教科指導及びその実践について～

長谷川　貢（根室）

・ティーム・ティーチングの実践～つまづきに気づき、できる喜びを味わうことができる授業展開～

高橋　宏明・川中　理樹（遠軽郁凌）

第36回（平成10年度）

【講　　演】国際化・情報化と「読み・書き・そろばん」

東京大学数理科学研究科教授　松本　幸夫　氏

【研究発表】

・一人一人に目を向ける数学教育を目指して
～習熟度別学習の実践について～

宮澤　　一（妹背牛商）

・基礎基本を充実させるために
～入学から卒業までの本校数学教育のプログラム～

桑島　宏明（夕張緑ヶ丘実業）

・中高一貫教育の研究～「ゆとり」の中で数学をどう生かすか～

椿　　達（苫小牧東）

・習熟度別授業の実践～多様な生徒への指導～

中村　廣治（浦河）

第37回（平成11年度）

【講　　演】生徒の学ぶ力を引き出す数学教育
～新科目「数学基礎」の設置に関連して～

埼玉大学経済学部教授　岡部　恒治　氏

【研究発表】

・総合的学習の時間をどう扱うか～数学的考え方を活かす方法～

高橋　秀尚　（稚内）

・指導の難しいクラスにおける数学指導について
～生徒との信頼関係から生まれる暖かい授業を目指して～

古屋　順一（増毛）

・発見的学習を促すコンピュータ利用の学習
～数学Ｃの指導例と今後の課題～

時岡　郁夫（札幌拓北）

・三角比を使って、山の高さを測る
～数学を身近に体感しよう、数学で遊ぼう～

山崎　昌典（南富良野）

第38回（平成12年度）

【講　　演】学ぶ意欲を高める数学教育

京都大学理学研究科数学教室教授　上野　健爾　氏

【研究発表】

・習熟度別学習と２次関数の指導法について

船水　裕貢・千田　隆史（上ノ国）

・上士幌高校から考える数学教育

三浦　央晴（上士幌）

・空集合から無限大へ

岩澤　利守（八雲）

・演習でしめくくる授業について

白鳥　真次（札幌平岡）

第39回（平成13年度）

【講　　演】これからの数学教育のありかた

早稲田大学教育学部教授　杉山　吉茂　氏

【研究協議】

主題「基礎・基本の定着を図り、創造力を養い活用する能力を育てる数学教育」（数学的活動を生かし、自ら学ぶ力を育てる授業の実践）

・習熟度別クラス編成による授業実践より

佐藤　一昭（別海）

・学びの自立に関する考察

浅井　博龍（網走向陽）

・電卓を利用した正弦定理・余弦定理の指導法について

松本　　啓（岡越）

・数学的コミュニケーションへの一考察（知識創発型社会にむけた学習観転換の視点）
伊藤　浩次（札幌西）

【理　科】

第30回（平成４年度）

全体部会

【講　　演】ＳＴＳ教育は理科教育を変えられるか
茨城大学教育学部助教授　小川　正賢　氏

理科Ⅰ.Ⅱ部会

主題：理科Ⅰ.Ⅱの指導法はいかにあるべきか

【講　　演】ＳＴＳ授業に関する海外資料の紹介
茨城大学教育学部助教授　小川　正賢　氏

【研究発表】

・理科Ⅰ化学分野における実験の基本的技能の習得を目指したＶＴＲ教材の作成
永木　正彦（中札内）

・ＳＴＳと理科教育その問題点～エイズで学ぶ分子遺伝学～
児玉　昌平（札幌新川）

・博物館など、教室以外の施設を利用した理科の指導について
平松　和彦（旭川西）

・自然保全度測定方法を研究してみる
～空知中央の植物を中核として～
合田勇太郎（岩見沢高養護）

物理部会

【講　　演】原子力発電の安全性
北海道大学工学部原子工学科教授　石川　迪夫　氏

【研究発表】

・パソコンによる計測装置の作成
髙橋　尚紀（根室）

・力学分野の指導について
大久保　政俊（北広島西）

・物理教育実態調査～北海道内の高校生と大学生を対象として～
鶴岡　森昭（札幌開成）山田　大隆（札幌藻岩）

化学部会

【講　　演】21世紀を担う化学
北海道大学理学部教授　多賀　光彦　氏

【研究発表】

・物を通しての授業
大佐賀　美弦（共和）

・環境教育を授業に取り入れることを目指して
安部　泰彦（枝幸）

生物部会

【講　　演】生体防御機構
東日本学園大学薬学部教授　森　　洋樹　氏

【研究発表】

・地域施設との連携を図った生物教育の実践
中島　　憲（女満別）

・身近な教材の利用による自然を見る目の涵養
新井　博仁（平取）

地学部会

【講　　演】天気予報のできるまで～北海道の局地気象～
札幌管区気象台技術部予報課長　村松　照男　氏

【研究発表】

同じ緯度なのに砂漠と氷河？
星野　フサ（札幌静修）

第31回（平成５年度）

全体部会

【講　　演】これからの理科教育～科学的な探求能力の育成～
東京理科大学理学部講師　武田　一美　氏

理科Ⅰ.Ⅱ部会

【講　　演】環境問題と環境教育
元林業試験場北海道支場育種研究室長　鮫島　惇一郎　氏

【研究発表】

・オホーツクの自然の授業での活用
小島　晶夫（紋別北）

・栽培植物の歴史（イネ、コムギ、じゃがいも）
澤田　八郎（北広島西）

・環境教材としての産業考古学教材
（ハッカ蒸留技術史・ニシン漁業史・鉱山開発史）
山田　大隆（札幌藻岩）

・人と「ウシ」とのかかわり
小島　修二（札幌手稲）

・トンボ類を利用した環境教育
綿路　昌史（札幌拓北）

物理部会

【講　　演】光を使った生体計測
北海道大学工学部助教授　清水　孝一　氏

【研究発表】

・物理演習の自作とＦＤ化
富樫　一憲（根室）　坂田　義成（札幌清田）

・光速度不変の原理の教材化
石川　昌司（釧路湖陵）

・物理教育改善のためのパソコンネット
阿部　英一（江差南）関川　準之助（石狩南）

・「探究活動」の教材開発と実施に向けて
菅原　　陽（札幌南陵）

・タイマーＩＣを利用したパソコン計測によるデータ処理
田渕　宏司（小樽商）

化学部会

【講　　演】おもしろい化学の実験
東京理科大学理学部化学科専任講師　武田　一美　氏

【研究発表】

・化学ＩＡの教科書における実験の取り扱いについて
米永　道裕（札幌新川）

・化学実験課題の評価
鶴岡　森昭（札幌開成）

生物部会

【講　　演】ラムサール湿地ウトナイ湖の自然とその保全
財団法人日本野鳥の会　大畑　孝二　氏

【研究発表】

・生徒が楽しめる生物の授業展開を求めて
～ゲームを通して学ぶタンパク質合成の実践～
唐川　智幸（上士幌）

・葉の「かたち」から自然を観る～ヤマグワの葉形変異～
佐野　淳之（札幌稲北）

・野外実習を取り入れた生物の授業
鳴海　史郎（富良野）

地学部会

【講　　演】北海道における地震活動
北海道大学理学部教授　岡田　　廣　氏

【研究発表】

・中標津町における天文普及活動と天文教育
～天文台の効果的利用法と可能性～
鎌塚　吉忠（中標津）

・半日を利用した手軽な野外巡検の試み
平松　和彦（旭川西）

第32回（平成６年度）

全体部会

【講　　演】21世紀のエネルギーと人類の生存
電子中央研究所研究開発部次長　新田　義孝　氏

理科Ⅰ.Ⅱ部会

【講　　演】環境教育についての今日的課題
北海道大学名誉教授　東　　三郎　氏

【研究発表】

・現教育課程の不安材料とその中での環境教育の模索
澤田　八郎（北広島西）

・生命の基盤としての自然をどう教えるか

～地域における自然保護活動から～
寺島　一男（旭川工業）
・産業考古環境教材としての本道の金属鉱山・炭鉱施設の現況
山田　大隆（札幌藻岩）
・地域の自然の教材化の試み～シマフクロウの教材化～
金澤　裕司（標津）
・マルチマディアの教育現場での活用
～CD・ROMの授業での活用～
児玉　昌平・春日　秀夫（札幌藻岩）
物理部会
【研究発表】
・波動分野の教材化と授業実践
岩田（蘭越）
・電子レンジを用いた授業実践の一考察
谷川（釧路工）・中道（標茶）
・実験を中心とした物理授業の実践
渡邊（当別）
・定時制2単位の物理
今野（琴似工定時）
・5分間デモンストレーション
BUTURIサークルほっかいどう
化学部会
【講　演】生活ゴミの機能とその利用価値
北海道大学地球環境科学科教授　戸倉　清一　氏
生物部会
【講　演】エゾサンショウウオの生物学
北海道大学理学部助教授　若原　正己　氏
【研究発表】
・美々湿原とその周辺をフィールドとした野外研究の指導
永盛　拓行・春日　秀夫（札幌藻岩）
・メダカについての多面的な実験
間　義浩（興部）
地学部会
【講　演】北部太平洋地域の生物の変遷
北海道開拓記念館文化交流課長　赤松　守雄　氏
【研究発表】
・菅原　晴美（阿寒）
・石栗　博行（中札内）
第33回（平成7年度）
全体部会
【講　演】理科における環境教育の視点とアースシステム教育
国立教育研究所　下野　洋　氏
理科Ⅰ.Ⅱ部会
【講　演】自然環境保全と環境教育
東北大学・北海道大学名誉教授　八木　健三　氏
【研究発表】
・SAAP教材による環境教育の実践
～物化領域での日本・タイ事情比較～
山田　大隆（札幌藻岩）
・天然素材を利用した環境教育の展開について
～カイコのまゆ玉から真綿をつくる。キトサンによる重金属の吸着実験より～
西出　雅成（札幌東陵）
・教科通信を用いた授業実践～一般教養を育むために～
水野　雅文（共和）
・地域の自然や施設などの教材化への試み
吉田　哲（芦別）
・SAAP教材を用いた環境に関する授業への取り組み
田辺　彰宏（大麻）
物理部会
【講　演】放射線の（線）量とその測定
北海道大学工学部教授　澤村　卓史　氏
【研究発表】
・波動についての授業実践～五感で理解することを目指して～
遠藤　孝一（上川）
・物理教育に求められるもの
～パソコン計測、インターネットについて～
萬木　貢（旭川凌雲）
・5分間デモ実験
化学部会
【講　演】遺伝子診断「薬の効き過ぎを予測」
北海道大学薬学部教授　鎌滝　哲也　氏
【研究発表】
・年間を通した化学実験への取り組み
渡辺　匡範（様似）
・身近な「モノ」を利用した化学実験の紹介
村田　一平（芽室）
・探究活動・課題研究の定着のために
～「身近な物質と化学の実験」編集の動き
玉利　和弘（札幌厚別）
生物部会
【講　演】動物の自己犠牲は利己的行動
北海道大学地球環境科学科教授　東　正剛　氏
【研究発表】
・クラブ活動を通した理科教育実践例
～生徒による自発的理科研究方法の模索～
金澤　昭良（訓子府）
・藻類の教材化への提案
佐藤　輝夫（札幌清田）
地学部会
【講　演】地球環境の理解を深める地学教育のあり方
国立教育研究所地学教育研究室長　下野　洋　氏
【研究発表】
・天文分野における教材の工夫
～生徒がより主体的に取り組める実習～
是永　修克（標津）
・地域研究における探究活動（地学分野）
～巡検と課題研究発表会～
滝沢　金光（豊富）
第34回（平成8年度）
総合理科部会
【講　演】近年話題になった自然環境にからむ地質学上の出来事
北海道教育大学名誉教授　秋葉　力　氏
【研究発表】
・公式のいらない物理ⅠAの展開
市村　由子（標津）
・由仁町古山ため池でボーリングコアの採取を通して晩氷期以降の環境変遷を探る
星野　フサ（札幌静修）　金川　和人（由仁商業）
北澤　新（札国際情報）　日下　哉（檜山北）
萩原　法子（札幌第一）　吉田　哲（芦別）
吉村　弘（札幌手稲）
物理部会
【講　演】原子力の役割と放射性廃棄物の処理
北海道大学工学部原子工学科助教授　佐藤　正知　氏
【研究発表】
・物理ⅠAを教えて
中川　智（江差南）
・手作りソーラークッカーとその教材化
宵木　弘典（別海）
化学部会
【講　演】エネルギー・資源・環境
北海道大学大学院工学研究科教授　大橋　弘士　氏
【研究発表】
・生物Ⅱを理解するための化学ⅠBの学習～タンパク質とは何か～
金澤　豪（釧路江南）
・基礎・基本を重視した化学授業の実践
～安全に実験授業を行うために～

佐藤　岳（古平）
・実験材料の工夫とアイディア
杉山　剛英（札幌星園）
地学部会
【講　演】巨大彗星がやってくる
札幌市青少年科学館天文技術専門員　渡辺　和郎　氏
【研究発表】
・メディアの中の理科教育その２～生徒の学ぶ喜びを目指して～
瀬戸　健一（網走南ヶ丘）
・寒冷環境の教材化(1)～雪の結晶～
平松　和彦（旭川西）
第35回（平成９年度）
全体部会
【講　演】世界の環境教育の流れと課題
21世紀教育研究所所長　筑波大学名誉教授　中山　和彦　氏
総合理科部会
【講　演】環境教育の効果的指導について
21世紀教育研究所所長　筑波大学名誉教授　中山　和彦　氏
【研究発表】
・郷土の自然を題材にした総合理科の授業
～野付半島、知床半島を素材として地域の博物館との協力を図った授業の展開例～
金澤　裕司（標津）
・環境を考える教材的視点～市の花、市の木を用いて～
田邊　彰宏（岩見沢東）
・栗山町継立でボーリング・コアを採取して晩氷期以降の環境変遷を探る～博物館の展示を環境教育に取り入れるための研究（その２）
星野　フサ（札幌静修）金川　和人（由仁商業）
北澤　新（札国際情報）日下　哉（檜山北）
田邊　彰宏（岩見沢東）萩原　法子（札第一）
吉田　哲（野幌）森谷　茂（東川）
・移行期の高校理科履修実態調査
鶴岡　森昭（札幌開成）
物理部会
【講　演】不安定流れの物理
北海道大学大学院助教授　吉田　静男　氏
【研究発表】
・音源定位実験と光通信実験
杉山　剛英（札幌星園）
・ペットボトルロケットの教材化
新井　繁（池田）
・物理Ⅱ課題研究におけるインターネットの活用
本谷　一（中標津）
化学部会
【講　演】生体内にみられる金属元素
～モデル化合物を通してその役割をみる～
北海道大学大学院理学研究科教授　佐々木陽一　氏
【研究発表】
・実験室に工場を～ソルベー法の歴史的背景と実験室～
日向　稔（函館北）
・理科で何を伝えるか
～生徒指導の機能を生かした授業への取り組み～
北川　能貴（滝上）
生物部会
【講　演】カムチャッカ半島の自然環境とその保全
北海道教育大学釧路校教授　神田　房行　氏
【研究発表】
・コンブからの光合成色素の抽出法
廣原　誠（小樽潮陵）
・北海道自生するマメ科植物ゲンゲ属カラフトモメンツルとモメンツル
松井　洋（札幌星園）
地学部会
【講　演】北海道を軸とした最近の地震活動と「新」プレート境界
北海道大学地震予知観測地域センター長　笠原　稔　氏
【研究発表】
・地域地震防災マップの作成をめざして
～クラブ活動で取り組んだ地震震動調査と、その後～
雁沢　夏子（遺愛女子）
第36回（平成10年度）
全体部会
【講　演】これからの理科教育の目指す方向
文部省初等中等教育局視学官　江田　稔　氏
総合理科部会
【講　演】新たな知～環境科学に基づく総合学習の可能性
室蘭工業大学人間社会科学科教授　丸山　博　氏
【研究発表】
・本校生徒における理科学習の意識調査から
～理科諸領域を総合的に学習する手だてとして～
水野　雅文（旭川東）
・シュウパロ湖北方湿地でボーリングコアの採取をして後氷期の環境変遷を探る～博物館の展示を環境教育に取り入れるための研究（その３）
星野　フサ（札幌静修）金川　和人（由仁商業）
萩原　法子（札幌第一）山田　大隆（札幌開成）
吉田　哲（野幌）森谷　茂（東川）
・戦後の理科教育変遷の視点
鶴岡　森昭（札幌開成）
物理部会
【講　演】乱れとフラクタル
北海道大学大学院工学研究科助教授　矢久保　考介　氏
【研究発表】
・探究活動としての「卒業論文」の制作
伊藤　新一郎（鹿追）
・理科部における紫外線計測システムの開発
保格　秀規（苫前商）
化学部会
【研究発表】
・科学史の授業実践
神野　剛（清水）
・教科の特性を生かした授業の展開
佐藤　辰美（北見仁頃）
・理数科における課題研究の実践について
三浦　治彦（滝川）
・総合的・横断的な学習を踏まえた理科の事例
古屋　睦雄（七飯）
・光センサーを用いたパソコン計測
菅原　陽（札幌南陵）
生物部会
【講　演】生物多様性の研究と将来
北海道大学大学院理学研究科教授　馬渡　駿介　氏
【研究発表】
・環境ホルモンについて
今井　一実（清里）
・発芽種子を用いた体細胞分裂の観察
三浦　隆詔（恵庭北）
地学部会
【講　演】最近の天候経過と天気・海洋の特徴
札幌管区気象台技術部気候・調査課予報官　八尾　孝　氏
【研究発表】
・総合教科としての奥尻島教育の在り方について
～高校理科と高校社会の連携及び中学校教育との関連性について～
伊藤　義孝（奥尻）
・地学のマルチメディア教材の開発について
村中　淑秀（友朋）

第37回（平成11年度）
全体部会
【講　　演】21世紀の技術と社会
放送大学教授　森谷　正規　氏
総合理科部会
【講　　演】環境教育の今日的課題
環境学習フォーラム北海道代表　藤田　郁夫　氏
【研究発表】
・羊蹄山山頂と寿都段丘でボーリングコアを採取して氷期以降の環境変遷を探る～博物館の展示を環境教育に取り入れるための研究（その４）
星野　フサ（札幌静修）金川　和人（由仁商業）
日下　　哉（檜 山 北）萩原　法子（札幌第一）
岡本　武博（閖　　越）佐々木　淳（倶 知 安）
吉川　浩之（札 幌 南）
・マルチメディアを活用した環境学習・調べ学習
～教える授業から支援する授業へ～
知野　　太（釧路北）
・風力発電機の整備と環境教育教材開発
山田　大隆（札幌開成）
・20世紀最後の今日、理科教育に求められているもう一つの視点
～国際第四世紀連合（ＩＮＱＵＡ）に参加して～
星野　フサ（札幌静修）
物理部会
【研究発表】
・表計算ソフトを使って物理、地学の教材を作る
～シュミレーションから理科年表の活用まで～
佐々木　淳（倶知安）
・物理ＩＡの実践報告～楽しさと教養～
福田　　敦（弟子屈）
化学部会
【講　　演】環境問題について
～ダイオキシンと環境ホルモンについて～
小樽商科大学教授　片岡　正光　氏
【研究発表】
・興味と関心を導く授業の展開
中道　洋友（羅臼）
・教科書を100％使いこなす授業
清水　美由紀（苫小牧）
生物部会
【講　　演】哺乳類Ｘ染色体の不活性化
北海道大学教授　高木　信夫　氏
【研究発表】
・地域教材を生かした環境教育の取り組み
～天売島の人と海鳥の歴史から見えてくるもの～
塩見　孝二（天売）
パソコン動画全集による映像資料の教材化
梅澤　　謙（長万部）
地学部会
【講　　演】北海道の化石
～北海道が化石の宝庫と呼ばれる理由とその背景～
札幌市市民局文化部博物館担当学芸員　古澤　　仁　氏
【研究発表】
・地域地質の教材化
岡本　　研（士別）
・高気圧における転向力の可視化
平松　和彦（旭川西）
第38回（平成12年度）
全体部会
【講　　演】21世紀の人類への贈り物
「オンネト湯の滝マンガン（国指定天然記念物）」
経済産業省技術総合研究所地質調査所
地殻化学部地球化学研究室主任研究官　三田　直樹　氏
総合理科部会
【講　　演】大陸移動と気候変動・生物進化
北海道大学大学院理学研究科教授　小泉　　格　氏
【研究発表】
・環境教育の視点から見た台風の指導
佐々木　淳（倶知安）
・ネパールの風景を見せて環境の問題を考える
谷本　健一（函館工業）
・ドイツ・エムシャーパークに見る環境学習について
山田　大隆（札幌開成）
物理部会
【講　　演】基礎学力不足に悩む大学
～高等教育の物理教育に望むこと～
北海道薬科大学教授　中野　善明　氏
【研究発表】
・自動車安全技術を題材とした力積の授業展開
吉田　光明（北見柏陽）
・物理ＩＡにおける「音」の指導法について
森田　泰史（歌志内）
化学部会
【講　　演】新しい工学教育の試み「創成科目」と材料化学系における「推薦入試」
北海道大学大学院工学研究科教授　高橋　英明　氏
【研究発表】
・安価な自作教材の工夫について
西嶋　　満（幌加内）
・課題研究の展開～養護学校の理科教育～
尾崎　寿春（札幌山の手養護高等部）
・高校化学を見直す～学力差の大きい生徒集団への指導の工夫～
藤田　啓太郎（上士幌）
生物部会
【講　　演】「自分」は脳のどこにいるのか？心の脳科学の最先端
北海道大学大学院医学研究科教授　澤口　俊之　氏
【研究発表】
・進学指導にも対応できる実験
今井　一実（帯広柏葉）
・部活動でサケ（Oncorhynchus keta）の重複胚（double embryo）を研究して
倉本　　勉（石狩南）
地学部会
【講　　演】おしゃれな化石レプリカ実習コース・地学をベースにした学際的な４次元自然科学教育が生んだ体感型教材～湯の滝観察会と青少年のための科学の祭典は、北海道発の発明の源～
経済産業省産業技術総合研究所
地質調査所主任研究官　三田　直樹　氏
【研究発表】
・実習作業を中心とした地学の授業における想像力と創造性の育成
～生徒の遊び心を取り入れた授業を目指して～
浦　　巧（中標津）
第39回（平成13年度）
全体部会
【講　　演】
人類の進化と日本人の起源～私たちはどこから来たのか～
国立科学博物館人類研究部部長　馬場　悠男　氏
総合理科部会
【講　　演】生物由来未利用資源を利用とした機能性素材の開発
～サケ白子ＤＮＡの環境分野への利用を中心に～
北海道大学大学院地球環境科学研究科長教授　西　　則雄　氏
【研究発表】
・20世紀と21世紀をつなぐ高等学校理科教育はいかにあるべきか
星野　フサ（札幌静修）
・地域性を考慮した地震・防災教育
梅田　浩士（根室西）
・「理科通信（weekly science）」を通した自然科学への興味・関

心の拡大と動機付け
山岡　景寛・水野　雅文　他（旭川東）
・高校理科教育における「総合」とは何か
～生物分野からの一提案～
飯淵　興喜（札幌第一）

物理部会
【講　　演】燃料電池と水素エネルギーシステム
北海道大学触媒科学研究センター教授　市川　　勝　氏
【研究発表】
・物理課題研究実践例
佐々木　博一（広尾）
・電気抵抗の温度変化の体感実験～本当にドライアイスは必要か～
山本　睦晴（釧路工業）

化学部会
【講　　演】グリーンケミストリー
～二酸化炭素と電気を用いる抗炎症剤の合成～
北海道大学大学院工学研究科教授　徳田　昌生　氏
【研究発表】
・普段の授業から課題研究まで
伊藤　新一郎（鹿追）
・高校化学ＩＡの授業～私がやってみたかったこと～
佐藤　正則（倶知安農業）

生物部会
【研究発表】
・地域に根ざした理科部の調査活動
田村　早奈英（札幌拓北）
・アフリカツメガエルの産卵誘発の試み
～冷蔵庫を使った人工冬眠～
加藤　友秋（函館商定時制）
・デジタルカメラによる簡易な顕微鏡撮影
箱崎　陽一（札幌南）

地学部会
【講　　演】第41次南極地域観測隊に参加して
北海道大学低温科学研究所寒冷陸域学部門助手　西村　浩一　氏
【研究発表】
・有珠山の教材化
白畑　康幸（室蘭栄）

【保健体育】

第30回（平成４年度）
【講　　演】エイズ
池上　千寿子　氏
【研究発表】
・本校における性教育の実践報告
立川　晴也（興部）
【研究協議】
・選択体育と体育的学校行事について
町田　英雄（本別）

第31回（平成５年度）
【講　　演】選択制体育の実践について
横浜市立南高等学校副校長　常木　己喜雄　氏
【研究発表】
・選択制体育の経営計画について
～平成５年度　選択制体育への取り組み～
山崎　文正（芽室）
・生徒一人ひとりが主体的に学習できる授業の展開をめざして～体育授業時の心拍数変動から見た生徒の授業への取り組みの様子～
中川　秀樹（別海）

第32回（平成６年度）
【講　　演】新しい保健授業を考える
宇都宮大学教授　和唐　正勝　氏
【研究発表】
・インフォメーション
丸谷　　一（指導主事）
・特色ある学校づくりを目指した「地域学習授業」の設定と実践
～江差の民謡踊りを指導して～
豊岡　　進（江差）
・新教育課程における教科体育の選択制授業を求めて
～選択制授業を展開するための実践経過報告～
佐藤　昌弘（札幌新川）

第33回（平成７年度）
【講　　演】新しい高校体育の課題
文部省体育局体育官　島根大学教育学部教授　杉山　重利　氏
【研究発表】
・エイズ教育（性教育）の実践
盛田　光則（知内）
・各学年の段階的選択制の試み
門脇　　覚（札幌清田）
・その他の科目「生涯スポーツ」の実践を通して
汐川　裕彦（本別）

第35回（平成８年度）
【講　　演】スポーツの功罪（尿酸代謝よりみて）
日本体育大学体育学部長　医学博士　伊藤　　孝　氏
【研究発表】
・ホイッスルのいらない体育授業を求めて
～選択授業の実践報告と展望へ～
木田　道子（白糠）
・自らたくましい心身を培う生徒の育成を目指した体育指導の在り方を求めて
深澤　　健（清里）

第35回（平成９年度）
【講　　演】スポーツ障害の予防と体力強化
日本体育大学教授　堀居　　昭　氏
【研究発表】
・生涯を通してスポーツに親しむために
～選択制体育と生涯スポーツの実践～
信清　昭人（弟子屈）
・自ら考え、自ら学ぶ保健授業の創造をめざして
～地域に学ぶ環境教育の課題学習について～
上棚　俊行（新得）

第36回（平成10年度）
【講　　演】子どもが求めるよい体育授業の条件
筑波大学教授　高橋　健夫　氏
【研究発表】
・死を考える授業の取り組み
～保健におけるデス・エデュケーションの実践～
塩谷　隆治（訓子府）
・要求する体育から要求される体育の創造をめざして
～より具体的にわかりやすい提示へ～
松橋　宏泰（帯広柏葉）

第37回（平成11年度）
【講　　演】学校教育とスポーツ教育のあり方を求めて
～新教育課程と学習指導について～
北海道教育大学札幌校教授　城後　　豊　氏
【研究発表】
・保健授業におけるグループ課題学習の取組み
升田　重樹（羽幌）
・新学習指導要領に向けて～移行期の体育授業について考える～
上杉　正三（札幌厚別）

第38回（平成12年度）
【講　　演】21世紀の保健体育のあり方～ライフスタイルと体育～
北海道大学大学院教育学研究科教授　須田　　力　氏
【研究発表】
・新しい授業展開を求めて～「保健」週二時間の実践報告～
数馬田　基（札幌北陵）
・新学習指導要領に向けた教育課程編成上の課題
～新しい高校の創造～
岩谷　倫光（恵庭北）

第39回（平成13年度）
【講　演】苦あれば楽あり～オリンピックに勝つまで～
日本体育大学教授　森田　淳悟　氏
【研究協議】
・選択制の体育授業を造る～やってみなければ、わからない～
小田中尚紀（帯広緑陽）
・科目保健での性教育のあり方について
～性の実態に即した指導内容を求めて～
木太　宏人（長万部）
・部活動顧問のためのハンドブックの発刊について
近藤　　壽（札幌藻岩）
・北海道高校サッカー選手権大会における障害調査
～大会日程改善への取り組み～
加藤　　忠（室蘭清水）

【養　護】

第30回（平成４年度）
【講　演】これからの養護教諭
～当面する諸課題を通して考える～
滋賀県教育委員会保健体育科指導主事　木戸　増子　氏
【研究発表】
健康教育における養護教諭の役割
～保健室来室生徒の背景にあるもの～
野口　直美（女満別）
第31回（平成５年度）
【講　演】養護教諭の活動と専門性～よく生きることへの支援～
北海道女子短期大学　田崎　雅子　氏
【研究発表】
日常の保健室利用基礎集計の改善の試み
杉山　彩子（室工定制）
第32回（平成６年度）
【講　演】養護教諭の専門性と教育活動
～自分を生かし、人を大切にする活動～
東京都文京区教育センター嘱託員　槇　　仁子　氏
第33回（平成７年度）
【講　演】養護教諭に期待するもの
杏林大学保健学部教授　出井　美智子　氏
【研究発表】
保健室利用状況から見る保健室の生徒の傾向
谷内　　潮（根室）
第34回（平成８年度）
【講　演】生徒指導と短期療法
奥羽大学文学部教授　小野　直広　氏
【研究発表】
保健室頻回利用の状況とその対応に関する一考察
～小規模二校の保健室利用統計をもとに～
齋藤　淳子（南幌）西澤　理佳（夕張緑ヶ丘実業）
第35回（平成９年度）
【講　演】養護教諭の新たなる役割と求められている資質
文部省体育局学校健康教育課教科調査官
併メンタルヘルス教育専門官　三木　とみ子　氏
【提言・協議】
養護教諭の専門性と教育活動
～日常の生徒とのかかわりをとおして～
大村　道子（養護部会事務局）
第36回（平成10年度）
【講　演】健康に関する現代的課題とこれからの健康教育
兵庫教育大学学校教育学部助教授　渡邉　正樹　氏
【研究発表】
国際ロータリーＧＳＥ（GROUP STUDY EXCHANGE）プログラムに参加して～スクールナース・ドラッグ・エイズ～
小林久美子（阿寒）
第37回（平成11年度）
【講　演】青少年に見られる睡眠覚醒リズム障害
北海道大学医学部教授　本間　研一　氏
【研究発表】
心の援助を考える～精神科医との連携を通して～
千葉　真恵（帯広三条）
第38回（平成12年度）
【講　演】養護教諭の専門性と教育活動～健康教育を中心に～
宇都宮大学教育学部教授　和唐　正勝　氏
【研究発表】
心の支援を目指して～森高校ＭＨ委員会の取り組み～
小林ゆか子（森）
第39回（平成13年度）
【講　演】保健室は出会いと成長の場
～今、養護教諭に望まれるもの～
大阪人間科学大学人間科学部教授　服部　祥子　氏
【研究協議】
複数配置の実態とその展望～高養研石狩支部１日調査より～
鎌田　明美（札幌篠路）

【芸　術】

第30回（平成４年度）
全体部会
【講　演】西洋の美・東洋の美
洋画家　国松　　登　氏
【研究発表】
・音楽分科会　リコーダーの授業を通しての考察
斎藤　雄一（根室）
・美術分科会　より多くの教材体験をさせる
野屋敷　裕泰（大麻）
・書道分科会　自主的活動とその反省・改善をすることのできる授業の試行
櫻井　　敦（札東商）
第31回（平成５年度）
全体部会
【講　演】先生方の「まこと」とはなにか
桐朋学園大学学長　三善　　晃　氏
【研究発表】
・音楽分科会　コンピュータ音楽への授業の可能性を探る機種機能及びその発達史
・美術分科会　鑑賞授業の一つの方向性を考える
・書道分科会　表現する楽しさ
山崎（芽室）
第32回（平成６年度）
全体部会
【講　演】即如思想と書
北海道教育大学旭川校教授　平田　善次郎　氏
【研究発表】
・音楽分科会　私の授業～授業で何をすべきか～
越智　道子（虻田）
・美術分科会　新教育課程に基づく教材展開の実践研究について
菅谷　巻紫子（遠軽）
・書道分科会　興味・関心・意欲・態度を高める授業をめざして
水間（根室）
第33回（平成７年度）
全体部会
【講　演】これからの芸術教育について
東京芸術大学美術学部デザイン科教授　伊藤　隆道　氏
【研究発表】
・音楽分科会　現在実践している授業と日頃からの疑問
三栗　伸久（苫小牧西）
・美術分科会　コンピューターを使用した美術授業の実践例と今後の発展性について
鵜沼　　均（札幌西）
・書道分科会　表現ということ～プリント「探究心」～
鈴木　孝徳（函館北）

第34回（平成８年度）
全体部会
【講　　演】生徒の好む三味線授業
東京都立白鴎高等学校教諭　野口　啓吉　氏
【研究発表】
・音楽分科会　「音楽Ⅰ」における日本の伝統音楽の授業展開について
天野　　聰（江別）
・美術分科会　美術を愛好する人々のすそ野を広げるための挑戦!!
渡部　秀治（稚内）
・書道分科会　プリントを利用した授業のレポート
～書道Ⅱ隷書の学習での例～
土坂　　一（千歳北陽）

第35回（平成９年度）
全体部会
【講　　演】芸術と人生
北海道文化財保護協会　亀岡　　武　氏
【研究発表】
・音楽分科会　函館市銭亀沢地区における民俗音楽（芸能）の芸能とその役割について
小林　敏雄（函館稜北）
・美術分科会　「戦争と平和」（私のメッセージ）ポスターに取り組んで
上野　秀実（釧路東）
・書道分科会　書道Ⅱ創作「看板文字」による
桶谷　　充（札幌真栄）

第36回（平成10年度）
全体部会
【講　　演】これからの芸術教育
絵本作家　手島　圭三郎　氏
【研究発表】
・音楽分科会　指揮法授業の実践について
荒橋　郁章（岩内）
・美術分科会　達成感を持たせる授業の実践
～時計を作ろう～（デザイン）
平向　功一（八雲）
・書道分科会　漢字かな交じりの書が目指すもの
～書道Ⅰにおける１年間の模索のあと～
鈴木　一人（旭川農業）

第37回（平成11年度）
全体部会
【講　　演】私とアコーディオンの出会い
北海道アコーディオン協会会長　久保　達夫　氏
【研究発表】
・音楽分科会　地球に学び、地域と歩む
～地球の文化活動の教育実践～
石田　昌勝（三笠）
・美術分科会　年間計画の構造化の試み
寺腰　精司（旭川凌雲）
・書道分科会　学校教育における芸術科書道～生徒・保護者の意識と今、書道に求められるもの～
小川　博水（当別）

第38回（平成12年度）
全体部会
【講　　演】日本の生活文化と芸術文化
書家　島田　無櫻　氏
【研究発表】
・音楽分科会　地域に根ざしたユニークな授業実践報告
～自由選択教科「第九」～
福田　哲久（清水）
・美術分科会　新教育課程への移行の工夫
水本　夕佳（室蘭東）
・書道分科会　楽しい授業を目指して～どうやって遊ばせるか～
黒川　朋寛（東川）

第39回（平成13年度）
全体部会
【講　　演】居心地の良い居場所
道都大学教授　倉本　龍彦　氏
【研究発表】
・音楽分科会　ＤＴＭを活用した創作授業の展開
山本　文朗（旭川北）
・美術分科会　創造を楽しむ授業をめざして
村上　陽一（帯広柏葉）
・書道分科会　調和体授業の一考察
足利　晃洋（砂川南）

【英　語】

第30回（平成４年度）
【講　　演】異文化コミュニケーションのための英語～同時通訳者の体験から～
サイマル・インターナショナル代表取締役　村松　増美　氏
【公開授業】
効果的なチーム・ティーチングを目指して
伊藤　一正（札幌白石）
Joel Arseneau（石狩教育局ＡＥＴ）
【パネルディスカッション】
コーディネーター　村松　増美　氏
パネリスト　北星学園大学教授　船津　好平　氏
北海道教育大学教授　潟沼　誠二　氏
札幌篠路高校教諭　佐々木勝志　氏
札幌白石高校教諭　伊藤　一正　氏
石狩教育局ＡＥＴ　Joel Arseneau　氏

第31回（平成５年度）
【講　　演】
Ⅰ．国際性を育てる英語教育はどうあるべきか
ＮＨＫ英会話講師　グロリア・ビッシュ　氏
Ⅱ．オーラル・コミュニケーションＡ・Ｂ・Ｃの導入と今後の英語教育
文部省初等中等教育局教科調査官　影浦　　攻　氏
【公開授業】
「聞く・話す・読む・書く」の四領域の調和した授業を目指して
山形　恒則（札幌月寒）

第32回（平成６年度）
【講　　演】国際理解と英語教育
前文部省主任教科書調査官
大学入試センター調査研究員　園城寺　信一　氏
【研究発表】
・国際性を育てる英語教育はどうあるべきか
澤田　和宏（別海）
・関連科目から見た英語の実践について
～国際経済科における取り組みを通して～
石田　知佳（苫小牧総合経済）

第33回（平成７年度）
【講　　演】わが国の外国語教育はなにをどのように改革するべきか～諸外国の外国語教育と比較して～
慶應義塾大学教授　小池　生夫　氏
【研究発表】
・国際性を育てる英語教育はどうあるべきか
～総合的言語活動の視点から～
知志　芳彦（名寄）
・生徒中心の言語活動をいかに多く作り上げていくか
Oral CommunicationのＪＴＥ２人制のTeam Teachingの授業をとおして
菅原　　浩（釧路工業）

第34回（平成８年度）
【講　　演】コミュニケーション英文法の考え方と実践
獨協大学外国語学部英語学科教授　阿部　　一　氏
【研究発表】

・英語と日本語の狭間で
稲毛　知子（札幌厚別）
・国際性を育てる英語教育はどうあるべきか
津藤　憲英（室蘭清水丘）

第35回（平成９年度）
【講　　演】世界各地の英語と我が国の英語教育
南山大学外国語学部教授　田中　春美　氏
【研究発表】
・何ができれば文章を理解したと言えるか
荻野　　賢（雄武）
・積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成について
髙田　邦彦（滝上）
・表現活動としての音声指導
谷　　昭憲（小樽工）

第36回（平成10年度）
【講　　演】A Positive Approach toward Internationalism
～Ten questions regarding English education and internationalism～
北星学園大学学長　土橋　信男　氏
【シンポジウム】
国際性を育てる英語教育のあり方
パネリスト　土橋　信男　氏（北星学園大学学長）
西堀　ゆり　氏（北海道大学言語文化部教授）
釣　　晴彦　氏（北海道室蘭清水丘高校教諭）
信田美砂絵　氏（元カナダ高等教育大臣奨学生）
川名　早苗　氏（主婦）
コーディネーター　吉田　　稔　氏（函館東高等学校長）
［分科会１］
大学入試と高校英語教育「３年間を見通した学習計画の見通し」
～英語教育を取り巻く状況を見つめながら～
鈴木　大二（室蘭栄）
［分科会２－ａ］
English Education Aiming for Developing Communicative Competence (in English)
Yoshihiro Tanaka (Kushiro Seien)
［分科会２－ｂ］
コミュニケーション能力を高める英語教育～ライティングから自己実現へ～
渡辺　勇嗣（根室）
［分科会３］
・英語に興味、関心をおこさせる授業の工夫
丹羽　雅樹（室蘭東）
・「センスグループ」と視聴覚教材を用いた授業実践
齋　圭治郎（釧路商業）
［分科会４］
パソコン利用の英語教育
阿部　　穣（旭川北）
［分科会５］
国際理解教育
～教師が変われば国際交流が生まれた～
寺井　浩之（札幌稲北）

第37回（平成11年度）
【講　　演】国際性を育てる英語教育はどうあるべきか
～総合的言語活動の視点から～
獨協大学外国語学部教授　阿部　　一　氏
【公開授業】
１．授業者　Mr.Waune D.Rutherford
（北海道インターナショナルスクール教頭）
生徒：同校11年生　教科：Literature
２．授業者　Mr.Andrea M.Scaturo
（北海道インターナショナル教諭）
生徒：同校９年生　教科：Language Arts
【研究発表】
・英語に興味関心を起こさせる授業の工夫
佐藤　臨太郎（七飯）
・英語に興味関心を起こさせる授業の工夫
～e-mailの交換による交流を通して～
北川　博文（深川東商）
・コミュニケーション能力を高める英語教育
中川　弘子（友朋単位制）
・地域と連携した国際理解教育の推進とその取り組み
吉森　光敏（鹿追）
・大学入試と高校英語教育
金生　浩一（北広島）
・パソコン利用の英語教育
川端　一正（旭川北）

第38回（平成12年度）
【講　　演】日本人の英語べたは何に（誰に）責任があるか
ＮＨＫラジオ「やさしいビジネス英語」講師
杉田　　敏　氏
【公開授業】
中條　伸義・佐藤　　学（北広島）
【研究発表】
・大学入学試験に対応する高校英語教育のあり方
～本校における英語教育の実践～
山西　敏弘（北嶺）
・本校英語教育の流れ～文法指導と中学校との連携～
髙野　龍彦（倶知安）
・生徒の実態に即した授業について
～本校における習熟度別授業を中心に～
宮前　貴英（浜頓別）
・パソコン（ワープロ機能）を使った英語教育
～環境や能力に応じた指導の工夫～
伊東　由尋（釧路湖陵定時制）

第39回（平成13年度）
【講　　演】辞書作りから見た日本の英語教育
明海大学外国語学部教授　山岸　勝榮　氏
［模擬授業］辞書とコミュニケーション
明海大学外国語学部教授　山岸　勝榮　氏
［分科会１］英語学習に意欲を持たせるための知恵袋
・聞く力と話す力を育てるための私の実践
赤崎　智子（中札内）
・Flexbility concerning English education
～生徒はどこでつまづくか、その考察と対応を中心に～
六本木　篤（斜里）
［分科会２］総合的・発展的英語教育（スキルとしての英語）
・動機付けとしての英語検定の利用と英検対策特別講習の効果
白鳥　金吾（札幌稲雲）
・生徒が輝く授業を求めて
今井　康人（函館中部）
［分科会３］国際交流の実際と英語教育
・心と心の懸け橋としての英語教育
尾崎　慎一（沼田）
・自治体が支える青少年のための国際交流
小林　正歩（知内）
［分科会４］ＡＬＴと創る英語教育
・「２対40」の発想からの脱皮
鈴木　　淳（千歳）
・With oral-aural activities as comprehensible input
片岡　　晃（札幌真栄）
［分科会５］中高で英語教育はどう連携されるべきか
・中学校ＦＳ（Fundamental Study）への協力を通して
白井　　歩（上川）
・一日体験入学と今後の連携
佐々木　寛人（浜頓別）
・体験入学～いきなり英語～
中川　　淳（札幌稲北）

【家　庭】

第30回（平成４年度）
【講　　演】男女必修家庭科の実施に向けての課題
文部省初等中等教育局職業教育課教科調査官　河野　公子　氏
【研究発表】
・楽しく、積極的に取り組めるホームプロジェクト、学校家庭クラブの試み
福本　智子（中頓別農）
・我が校のホームプロジェクト、学校家庭クラブ活動の状況
田畑　優香里（名寄）

第31回（平成５年度）
【講　　演】今、家庭科教育に問われること
～親と、先生と、子ども自身の役割～
作家　永畑　道子　氏
【パネルディスカッション】
新しい家庭科では、何をどのように教えるのか
コーディネーター　松村　仁穂子（札 幌 北）
パネリスト　渡部　真紀（釧路湖陵）岩佐　昭代（札幌東陵）
畠中　康子（道　　研）川埜　絹子（紋 別 南）
後藤あけみ（平　　取）

第32回（平成６年度）
【講　　演】時代の変化に対応する家庭科教育の創造
奈良女子大学生活環境学部人間環境学科教授　長嶋　俊介　氏
【研究発表】
・生活設計にみる男女の意識の違いと共修による男女の意識改革
幅　　淳彦（弟子屈）
・家庭一般における食物の指導において食生活文化を基本にすえた授業
江口　凡太郎（紋別南）

第33回（平成７年度）
【講　　演】これからの家庭科教育
東洋大学社会学部教授　一番ヶ瀬　康子　氏
【研究発表】
・「家庭一般」における食生活領域の指導
～生活の充実向上を目指して～
齋藤　睦子（函館水産）
・「家庭一般」男女必修のねらいを生かす指導の在り方と指導の現状
坂田　一重（恵山）

第34回（平成８年度）
【講　　演】消費者教育の現状と課題
東横学園女子短期大学助教授　中原　秀樹　氏
【研究発表】
・男女必修の「家庭一般」をどう創造するか
渡部　真紀（釧路湖陵）
・商業高校における「家庭一般」の授業についての一考察
小川　篤子（深川東商）

第35回（平成９年度）
【講　　演】子どもの権利条約と子ども虐待
～発見と介入の手だて～
白梅学園短期大学保育科助教授　浅井　春夫　氏
【研究協議】
・「時代の変化に対応する家庭科教育の創造」
（産業教育担当教員長期実技研修講座参加報告）
岩佐　美和子（美唄南）
【研究発表】
・幼児との「遊び」を通して親の役割を考えさせる保育園実習の一例
渋谷　麻子（豊富）
・工業高校における家庭科教育の実践
小松　裕美（富良野工）

第36回（平成10年度）
【講　　演】居心地の良い場所
道都大学美術学部建築学科教授　倉本　龍彦　氏
【研究発表】
自己決定力を身につける授業を目指して
～青年期の性の単元から、さまざまな生き方を考える～
成田　有希（北見商）

第37回（平成11年度）
【講　　演】21世紀にむけての家庭科教育の課題
神戸大学発達科学部教授　朴木　佳緒留　氏
【研究協議】
・「時代の変化に対応する家庭科教育の創造」
（高等学校産業教育担当教員長期実技研修講座参加報告）
紀國　明子（江別）
・調理実習の事前指導におけるコンピュータの活用について
山名　みのり（芦別総合技術）

第38回（平成12年度）
【講　　演】これからの家庭科教育と環境再生
～市民生活の再構築～
室蘭工業大学教授　丸山　　博　氏
【研究協議】
・「時代の変化に対応する家庭科教育の創造」
（新産業技術等指導者養成講習参加報告）
中村　晃子（岩見沢西）
・本校における「社会福祉実習」の実践から
西澤　陽子（清水）

第39回（平成13年度）
【講　　演】現代を考える
作家　小檜山　博　氏
【研究協議】自立した生活者を育てる家庭科教育
・新産業技術等指導者養成講習参加報告
後藤　あゆみ（江別）
・パネルディスカッション
新教育課程に対応した魅力ある授業の創造
コーディネーター　安嶋　真知（美唄）
・家庭科のミニマムエッセンシャルズとしての家庭基礎
土屋　三枝（上磯）
・確かな実践力を育む実験・実習、体験的学習の指導
松本　美子（札幌拓北）
・健康・福祉・環境に視点をおいた問題解決的な学習
菅野　美樹（旭川工）
・職業意識を高め将来のスペシャリストを育成する「生活産業基礎」の構成
坂口　真奈美（岩見沢農業）

【農　業】

第30回（平成４年度）
【講　　演】先端技術（生物工学）の現状と将来方向
北海道中央農業試験場生物工学部長　関谷　長昭　氏
【研究発表】
「生物工学基礎」の指導方法について
田口　晴男（余市）

第31回（平成５年度）
【講　　演】技術革新に対応する農業教育
文部省初等中等教育局職業教育課教科調査官　佐藤　順彦　氏
【研究発表】
時代の進展に対応した特色ある農業教育の推進について
斎藤　信寛（東藻琴）

第32回（平成６年度）
【講　　演】地球環境と森林・林業
林野庁旭川営林支局業務部長　和知　秀樹　氏
【研究発表】
地域に根ざした特色ある学科の展開
矢吹　克美（ニセコ）保木本　敬一（留寿都）

第33回（平成７年度）
【講　　演】つくる漁業をめざして・気をつけたい海の動物
福井県栽培漁業センター所長　安田　　徹　氏

【研究発表】
・地域に根ざした特色ある学科の展開
志賀　聡（剣淵）佐藤　康則（幌加内）
第34回（平成8年度）
【講　演】豊かな発想による新農業技術開発を
農業先端技術研究協会副会長　泊　功　氏
【研究発表】
・新しい時代に向けての農業教育の使命の再発見と推進はいかにあるべきか～本校における農業教育の現状と課題～
清澤　城次（倶知安農）
・農業高校における農業教育の現状と課題
永山　鑑造（中頓別農）
第35回（平成9年度）
【講　演】農業の評価軸～環境問題は工業技術で解決できるか～
酪農学園大学酪農学部酪農学科家畜管理学教室教授
農学博士　千場　信司　氏
【研究発表】
・農業高校における農業教育の現状と課題
鎌田　一宏（壮瞥）
・農業教育の変遷とこれからの北海道農業の在り方
古屋　接雄（美幌農）
第36回（平成10年度）
【講　演】農業改良普及事業と農業教育の接点
北海道農政部農業改良課首席専門技術員
農学博士　黒沢　不二男　氏
【研究発表】
・今後の農業高校における農業教育の在り方と課題
近江　勉（岩見沢農）
・本校における国際理解教育の現状と課題
竹田　満俊（遠別農）
第37回（平成11年度）
【講　演】進化に向かう農業と農業青年のそだち
グローバル地域研究所主宰　小松　光一　氏
【研究発表】
・農業高校ならではの体験を重視した学習の展開について
柴田　政二（真狩）
・生徒の夢と希望が実現できる農業高校
岡本　幹也（大野農）
第38回（平成12年度）
【講　演】20世紀の農業を反芻し、21世紀の農業を創造する
農業先端技術研究協会会長　農学博士　西部　慎三　氏
【研究発表】
・本校における地域連携教育の取り組みについて
赤穂　悦生（名寄農）
・地域教育力を活用した農業教育の在り方
関根　晋平（士幌）
第39回（平成13年度）
【講　演】農業はおもしろい「身土不二」の伝統農法に未来を託す
針塚農産代表　針塚　藤重　氏
【研究発表】
・本校における企業体験実習の取り組み
細川　徹（帯広農）
・地域の期待に応える農業高校の活性化をめざして
加藤　和則（美幌農）

【工　業】

第30回（平成4年度）
【講　演】工業教育に期待するもの
デービーソフト株式会社代表取締役社長　古谷　貞行　氏
【研究発表】
・本校における新教育課程への取り組み
辻村　時男（苫小牧工）
・本校機械科における「家庭一般」の実践例
高橋　豪・前川　睦（紋別南）
・地域社会との協力・連携による体験的な学習指導
常包　省三・小杉　光史（北見工）
第31回（平成5年度）
【講　演】本道の工業教育に期待するもの
株式会社マルキンサトー取締役社長　佐藤　三男　氏
【研究発表】
・土木系企業の情報活用と情報技術教育について
横田　潤一（札幌工）
・新学習指導要領の移行・実施についての取り組みと電気科教育の在り方について
小川　豊亜（小樽工）
・学校週5日制と工業教育の在り方
儀同　清秀（釧路工）
第32回（平成6年度）
【講　演】工業教育に期待するもの
ニチレキ株式会社代表取締役副社長　蒔田　實　氏
【研究発表】
・新しい時代に対応する教育課程の編成・実施
林　旻（帯広工）
・時代に即応する工業教育の創造と実践
立野　一洋（夕張緑ヶ丘実業）
・課題研究について～本校電気科の取り組みと課題～
松崎　雅芳（富良野工）
第33回（平成7年度）
【講　演】転換期の日本経済～課題と展望～
株式会社たくぎん総合研究所代表取締役社長　野島　和夫　氏
【研究発表】
・本校の資格取得の取り組み方向性について
～資格試験　建設業経理事務士の概要～
向井地　康弘（函館工）
・本校におけるＮＣ実習の取り組み
柿原　幸一・細越　大安（芦別総合技術）
・「高校教育の改革」～魅力ある工業高校の創造
八尾　寿輔（札幌琴似工）
第34回（平成8年度）
【講　演】半導体産業の将来～マルチメディア社会へ～
株式会社日立製作所半導体事業部
応用技術部本部長　御法川　和夫　氏
【研究発表】
・時代に即応する工業教育の創造と実践
～地域と連携した現場実習とその在り方～
角谷　勝（美唄工）
・地域社会と連携する工業教育を目指して
～地域社会の教育力を活用しスペシャリストを育成する～
杉澤　投吉（留萌工）
・情報技術教育における各種ソフトウエアの利用について
斉藤　浩隆（室蘭工）
・コンピュータ制御に関する教材の開発
～Windows環境における制御実習教材～
内海　康弘（苫小牧工）
第35回（平成9年度）
【講　演】北海道の工業教育の現状と将来
雇用促進事業団　北海道職業能力開発短期大学校長
工業博士　大川　時夫　氏
【研究発表】
・インターネットに対応した校内ネットワーク
広瀬　覚（滝川工）
・1．無線通信ネットワーク（Wireless LAN）によるインターネット接続
2．電気製図におけるCADSUPER FX fou Windows導入の実践
嶋田　義久（稚内商工）
・資格取得の指導に取り組んでみて

梅内　親（旭川工）

第36回（平成10年度）

【講　演】教育改革と工業教育の展望

文部省初等中等教育局職業教育課教科調査官　佐藤　義雄　氏

【提　言】

本道における工業教育の活性化のために

武部　良平（小樽工業高等学校長）

【研究発表】

・高校生ロボット相撲大会への取り組みについて

田邊　孝次（名寄工）

・発生土および産業廃棄物の地盤工学的利用

谷口　宏（苫小牧工）

第37回（平成11年度）

【講　演】最新電子応用分野の動向と工業高校生に期待すること

株式会社日立製作所半導体グループ電子統括営業本部

システムＬＳＩ技術本部本部長　御法川　和夫　氏

【研究発表】

・工業所有権に関する学校教育のあり方について

高崎　格（札幌工）

・時代に即応する工業教育の創造と実践

～地域や産業界とのパートナーシップの確立を目指して～

白取　義博（北見工）

・課題研究の取り組みについて

玉根　一（紋別南）

第38回（平成12年度）

【講　演】モノづくりとと人づくり

トヨタ自動車北海道株式会社取締役第一工場長　寺島　泰彦　氏

【研究発表】時代に即応する工業教育の創造と実践

・親と子の工作教室の開催について

高野　康彦（小樽工）

・本校における就業体験への取り組み

能勢　徹（帯広工）

・生徒が意欲的に活動する教育課程の取り組み

山﨑　俊一（釧路工）

第39回（平成13年度）

【講　演】実業・経営に「感」の甘さと鋭さが…今、思えば／教室は“運送業”ではなく、“倉庫業”では断じてない

カインドネス オブ マネジメント ブレーン主宰　山﨑　道弘　氏

【研究発表】時代の変化に対応する工業教育の創造と実践

・校内ネットワーク（校内ＬＡＮ）の利用方法と課題

藤原　啓展（函館工）

・資格取得（基本情報技術者試験）と進路

藤村　洋之（札国際情報）

・本校の課題研究発表会の取り組みについて

山本　隆敬（夕張緑）

【商　業】

第30回（平成４年度）

【講　演】今後における商業教育の在り方について

札幌大学名誉教授　横川　義雄　氏

＜分科会１＞教育課程

【研究発表】

地域と時代の要請に応じた産業教育を求めて

～小学科に向けた本校の取り組み～

川島　敏裕（釧路商）

【協 議 題】

本校における教育課程の編成

前川　紘儀（旭川商）

＜分科会２＞ＯＡ機器関連科目

【研究発表】

新科目「情報処理」の指導内容・方法について

【協 議 題】

ネットワークを活用した商業教育について

＜分科会３＞課題研究

【研究発表】

本校における課題研究について

阿部　和保（福島商）

【協 議 題】

本校における課題研究の取り組みについて

姪川　雅恒（仁木商）

第31回（平成５年度）

【講　演】変わる商品マーケティング

㈱電通マーケティング総括局

消費生活研究部部長　森住　昌弘　氏

＜分科会１＞教育課程

【研究発表】

地域に根ざした商業教育の活性化を求めて

～生徒自らが主体的に学ぶ教育課程の編成～

佐藤　強・髙橋　秀幸（下川商）

【協 議 題】

多様な進路に対する教育課程について

青山　武（由仁商）

＜分科会２＞ＯＡ機器関連科目

【研究発表】

・これからの北海道の情報処理教育を考える

金子　義之（深川東商）

・事務情報科におけるＯＡの指導

～情報通信機器を活用したデータ処理について～

新井田正廣・末岡　正嗣（芦別総合技術）

【協 議 題】

新検定に向けた簡易ソフトの指導の取り組みをどう行ったらよいか

佐々木　豊（仁木商）

＜分科会３＞課題研究

【研究発表】

本校における「課題研究」の取り組み

～現状における「課題研究」の授業内容について～

宮川　重徳（斉藤　博一）能勢　保幸（妹背牛商）

【協 議 題】

本校の「課題研究」の取り組みについて

木村　公治（士別商）

第32回（平成６年度）

【講　演】企業が求めるこれからの人材とその育成

～ある企業現場での取り組み～

富士通株式会社通信事業推進本部

ソフトウエア開発部担当部長　菅原　髮　氏

＜分科会１＞教育課程

【研究発表】

本校会計ビジネス科における簿記教育の現状と課題

髙石　克美（滝川西）

【協 議 題】

商業化において特色ある教育課程をいかに編成するか

髙瀬　敏樹（富川）

＜分科会２＞ＯＡ機器関連科目

【研究発表】

本校における情報処理教育のアプローチ

～学科転換と校舎改築を進めながら～

加藤　和明・好川　真弘（士別商）

＜分科会３＞課題研究

【研究発表】

本校における科目「課題研究」の取り組みと実践

武山　登・河合　宜孝（苫小牧総合経済）

＜分科会４＞進路指導

【研究発表】

長崎　威（札幌啓北商）

第33回（平成７年度）

【講　演】21世紀に向けての新しい商業教育のあり方

一橋大学商学部教授　片岡　寛　氏

＜分科会１＞教育課程

【研究発表】
商業教育の活性化を図る教育課程の編成と実施について
竹内　和弘（士別商）
＜分科会２＞ＯＡ機器関連科目
【研究発表】
本校における「情報機器活用に関する課題と今後の展望」
加藤　　啓（帯広南商）
＜分科会３＞進路指導
【研究発表】
佐藤　雄一（札幌東商）
第34回（平成８年度）
【講　　演】情報処理・情報処理教育の現状と課題
川口短期大学教授　中澤　興起　氏
＜分科会１＞教育課程
【研究発表】
スペシャリストへの道を目指す教育課程
～学科の枠を越えた多様化・弾力化を図る教育課程の在り方～
菊池　智宏（芦別総合技術）
＜分科会２＞ＯＡ機器関連科目
【研究発表】
社会の変化に対応した情報処理
～本校における情報処理のあり方と取り組み～
藤村　一宏・佐々木　勇（妹背牛商）
＜分科会３＞進路指導
【研究発表】
人間としての在り方生き方を踏まえた進路指導を目指して
羽澤　直敏（中川商）
第35回（平成９年度）
【講　　演】激動する日本経済
～生活者の視点と経済教育の必要性～
北海道大学経済学部教授　井上　久志　氏
＜分科会１＞教育課程
【研究発表】
社会の変化に対応した教育課程の編成
～併置校（普通科・商業科）における教育課程の取り組み～
谷奥　憲夫（網走向陽）
＜分科会２＞ＯＡ機器関連科目
【研究発表】
本校におけるパソコンの利用法について
～インターネットの活用について～
石川　智寛・鶴間　伸一・髙原　　修（中標津）
＜分科会３＞進路指導
【研究発表】
本校における進路指導の取り組み
入江　　潔（旭川商）
第36回（平成10年度）
【講　　演】駐在員子女のドイツ教育事情
ＴＤＫ株式会社事業本部市販事業部事業部長　斉藤　恒一郎　氏
＜分科会１＞教育課程
【研究発表】
情報ビジネス科の教育実践
河田　章宏・塩内　俊秀（遠軽郁凌）
＜分科会２＞体験学習
【研究発表】
本校における体験学習～流通経済科における体験学習の実際～
小嶋　睦仁（釧路商）
＜分科会３＞進路指導
【研究発表】
本校の進路指導の取り組みについて
敦賀　英勝（仁木商）
第37回（平成11年度）
【講　　演】流通構造の変化と商品教育
千葉商科大学教授　鮎川　二郎　氏
＜分科会１＞教育課程
【研究発表】
生徒が主体的に学習できる教育環境を目指して
松野　郷圭介（富良野緑峰）
＜分科会２＞体験学習
【研究発表】
本校の科目「課題研究」における「産業現場実習」の現状について
我妻　公裕（士別商）
＜分科会３＞進路指導
【研究発表】
自らの勤労観・職業観を確立する進路指導のあり方
～職場体験学習を取り入れた進路指導の推進～
北出　英俊（様似）
第38回（平成12年度）
【講　　演】商業科における進路指導
千葉商科大学商学部助教授　鹿嶋　研之助　氏
＜分科会１＞教育課程
【研究発表】
・本校における教育課程の編成
～併置校における教育活動の取り組み～
原田　　勝（根室）
・本校における職場実習の取り組みについて
鈴木　裕志・国枝　　拓（深川東商）
・生徒の進路実現に向けて～情報ビジネス科の取り組み～
廣川　雅之（留萌千望）
第39回（平成13年度）
【講　　演】
金融実務と金銭感覚
北洋銀行頭取　高向　　巌　氏
【研究発表】
主題：新時代に求められているビジネス教育
～学校そして人づくり～
・本校における二学期制の取り組みについて～現状と課題～
小南　和憲（浜頓別）
・小規模校におけるインターンシップの取り組みについて
木村　成一（由仁商）
・生徒の「個」に応じた進路指導について
～進学の多様化に対応した取り組み～
難波　繁之（札国際情報）

【水　産】

第30回（平成４年度）
【講　　演】水産教育の現状と課題
文部省初等中等教育局職業教育課教科調査官　中谷　三男　氏
【研修報告】
①　産業教育指導養成講座　　対馬　敏幸（函館水産）
②　平成４年度高等学校産業教育担当教員実技研修
高嶋　一成（小樽水産）
③　平成３年度高等学校産業教育担当教員実技研修
髙橋　　篤（小樽水産）
【研究発表】
・新設科目「水産食品流通」の内容及び指導法はいかにあるべきか
千田　　裕（函館水産）
・新設科目「水産情報技術」の指導内容、指導方法はいかにあるべきか
籾山　美津彦（小樽水産）
・新設科目「課題研究」の指導内容、指導方法はいかにあるべきか
我妻　雅夫（小樽水産）
第31回（平成５年度）
【講　　演】これからの北海道水産業
北海道栽培漁業振興公社副会長　菊地　健三　氏
【研修報告】
①　産業教育指導養成講座
谷口　潤一郎（函館水）
②　平成５年度高等学校産業教育担当教員長期実技研修

平沼　裕康（厚岸水産）
③　平成５年度産業教育新技術等実技講習
木村　　司（小樽水産）
④　情報処理教育担当教員等養成講座
佐藤　哲夫（小樽水産）
【研究発表】
・「課題研究」の指導内容と指導方法はいかにあるべきか
三浦　省吾（函館水産）
・「水産情報技術」の指導内容及び指導方法はいかにあるべきか
藤原　啓展（戸井）
・漁業科の学科改編について～漁業科から海洋漁業科へ～
東海林　正行（小樽水産）
第32回（平成６年度）
【講　　演】北海道の栽培漁業の現状と展望
株式会社エコニクス　河村　一廣　氏
【研修報告】
①　全国高等学校水産教育研究会
我妻　雅夫（小樽水産）
②　産業教育指導者養成講座
西川　正一（南茅部）
③　平成６年度産業教育担当教員長期実技研修
平沼　裕康（厚岸水産）
④　平成６年度産業教育技術等実技講習
鈴木　一幸（函館水産）
【研究発表】
・水産一般における地域色を生かした実習（船外機の分解・組み立て）
笠間　　熟（厚岸水産）
・科目「水産一般」の指導内容と指導方法について
森越　則夫（函館水産）
第33回（平成７年度）
【講　　演】サケからのメッセージ
㈶千歳青少年教育財団サケのふるさと館館長　木村　義一　氏
【研修報告】
①　全国高等学校水産教育研究会
平山　　聡（小樽水産）
②　産業教育指導者養成講座
亀山　喜明（厚岸水産）
③　産業教育担当教員長期実技研修
島田　政幸（小樽水産）
④　専攻科担当教員研修講座
須貝　暢裕（小樽水産）
【研究発表】
・小型船舶操縦士の養成施設の取り組みと課題について
藤本　尚志（函館水産）
・新しい時代における水産教育の今日知的課題とその対応はどうあるべきか
髙橋　　篤（小樽水産）
第34回（平成８年度）
【講　　演】サケ・マスと自然
㈶北水協会監事　小林　哲夫　氏
【研究発表】
・新しい時代における水産教育の今日的課題とその対応はどうあるべきか
平沼　裕康（厚岸水産）
・新しい時代における水産教育の今日的課題とその対応はどうあるべきか～手軽で高性能なＬＡＮ～
籾山　美津彦（戸井）
第35回（平成９年度）
【講　　演】水産教育をとりまく今日的な課題
文部省初等中等教育局　視学官　中谷　光男　氏
【研究発表】
・新しい時代における水産教育の今日的課題とその対応はどうあるべきか
長尾　英一（小樽水産）
・新教育課程における「課題研究」はいかにあるべきか
西村　紀夫（函館水産）
第36回（平成10年度）
【講　　演】水産高校教育の変遷と新たな展開
前産業教育振興中央会　事務局長　間山　郁三　氏
【研究発表】
・新しい時代における水産教育のあり方について
～活性化への道を索る～
中畑　辰雄（函館水産）
・新しい水産教育はどうあるべきか
～資格取得による学校生活の充実について～
松原　　昇（戸井）
第37回（平成11年度）
【講　　演】遠洋鮪漁業における現状について
日本鰹鮪漁業協同組合連合会常務理事　壁矢　恵行　氏
【研究発表】
・地域と共にある学校作りについて
～信頼され、期待される厚水をめざして～
勝見　謙次（厚岸水産）
・小型船舶操縦士養成施設における実技講習について
大倉　　誠（小樽水産）
第38回（平成12年度）
【講　　演】北海道における食品衛生事情
～水産食品を中心として～
北海道立衛生研究所食品科学部主任研究員　武士　甲一　氏
【研究発表】
・本校の水産製造科における現場実習の取り組みについて
黒島　裕司（厚岸水産）
・海洋深層水の特性と利用について
西川　正一（函館水産）
第39回（平成13年度）
【講　　演】教育課程の編成と指導計画の作成
国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部
教育課程調査官　落合　敏邦　氏
【研究発表】
・海洋環境について
新川　智憲（小樽水産）
・本校機関工学科における、科目「電気工学」に関する実習内容について
三輪　孝明（函館水産）
・海洋開発先端技術にふれて
三田村　司（厚岸水産）

研　究　紀　要　一　覧

● 第 31 号 ●

巻頭言　（会　長）染谷　昌志

〈教職一般〉

開校からの教育課程の変遷と新教育課程編成への取り組み　（旭川東栄）佐藤　徳崇

オーストラリアの教育事情～平成４年度文部省若手教員海外派遣（アジア・オセアニア団）に参加して～　（小樽潮陵）常丸　一也

〈教科部会〉

小説指導の実際－「告白」する作品－　（札幌平岡）堀田　直子

教科書『世界史』とスペイン史－「アルタミラ」から「バルセロナ」まで－　（札幌開成）武田　秀治

南茅部高校における習熟度別授業の実践　（南茅部）加藤　文子　畑　進　五十嵐靖一

「フラクタル」について　（様　似）澤尻　知徳

保健室に於ける相談活動に関する一考察　（札幌丘珠）田口　聡美　（大　麻）田口由美子　（札幌拓北）門崎　千代　（恵庭北）藤森美智子

江差（檜山）神楽について－（その１歴史と芸能（江差町の事例））－　（函館稜北）小林　敏雄

英語ⅡＡと評価の問題点　（札幌啓北商）寺崎　敏之

小規模校における英語科教育の実践～ビデオ教材を用いたOral Communicationの試み　（鹿　追）岡部　敦

家庭一般の男女必修の実践－職業学科２校の実践状況と課題－　（留寿都）竹内　篤子　（真　狩）谷内　聡子

ボール盤作業の自動化を通じた創造力の育成をめざして　（北海道工）落合　英機

これからの北海道の情報教育を考える－本校における取り組みと現状の分析から－（深川東商）金子　義之

新設　会計ビジネス科の取り組み（中間報告）－簿記の学習指導を中心として－　（滝川西）高石　克美

潜水教育について－最適な指導法（理論・実践）の研究－　（小樽水産）高嶋　一成

〈研究調査〉

北海道における産業遺跡実態調査（Ⅱ）（水産業－鰊漁業史）－積丹半島及び磯谷・美谷地方の袋澗の現状と保存課題－　（札幌藻岩）山田　大隆

● 第 32 号 ●

巻頭言　（会　長）染谷　昌志

〈教職一般〉

国際社会変革にともなう教育システム再構築への構図－高福祉教育国デンマークからの発見－　（大　麻）鍵谷　好徳

私の樺太、サハリン歴史紀行（前編）　（古　平）城座　研一

親鸞の信心について－松村武好先生の叙勲を祝して－　（苫小牧西）小林　武

〈教科部会〉

現代スペインと日西交流史（上）　（札幌開成）武田　秀治

記数法の理論　（札幌東）大山　斉

英国アイアンブリッジの産業考古環境教材の内容－ナショナルトラスト運動・産業考古博物館教育活動の典型例－　（札幌藻岩）山田　大隆

スキーマ理論に基づく能動的英文読解指導　（室蘭清水丘）卯城　祐司

男女共学家庭科の実践　（栗　山）石田リエコ　髙橋　理緒

メカトロニクスへの探求～相撲ロボットの制作～　（名寄工）真鍋　孝徳

商品売買取引の会計処理に関する考察　（札幌東商）柴田　重則

簿記会計教育の専門性の深化の方向　（旭川商）菅生　肇

水産食品製造・加工技術の習得および流通等の現状調査　（函館水産）鈴木　一幸

〈研究調査〉

『高校理科履修実態調査』　（札幌開成）鶴岡　森昭

養護教諭の職務内容に関する一考察－その実態と理想の相違－　（札幌拓北）門崎　千代　（恵庭南）藤森美智子　（札幌丘珠）田口　聡美　（札幌月寒）兼平さゆり　（石狩南）藤田　博美

● 第 33 号 ●

巻頭言　（会　長）綾井　健二

〈教職一般〉

「戦後50年の高等教育の改革と教育課程の変遷」　（札幌開成）鶴岡　森昭

校務のデーターベース化への実践報告（教育内容の質的向上のために）　（札幌東陵）佐々木教夫

私の樺太・サハリン歴史紀行（後編）
（古　平）城座　研一
An introduction to the Shinjin in Shinran
（苫小牧西）小林　武

〈教科部会〉

日本・スペイン交流史（中）－信長・秀吉・家康－
（札幌開成）武田　秀治
一国史を超える「高校日本史」試論
（札幌開成）西村　喜憲
新教育課程における数学（主として数Ⅰ・A）の指導について　（羽　幌）石橋　哲哉
加藤　範幸
浅野　一晃
深澤　昌弘
長倉　伯幸
諸外国と日本の環境教育　（北広島西）澤田　八郎
リスニング能力の向上に関する一考察－イントネーションを中心とするオーラルコミニュケーションBの指導方法について－　（帯広柏葉）竹内　典彦
映画を授業に生かす－ある教室からの実践報告－
（増　毛）小川　正浩
男女で学ぶ「家庭一般」の一実践～ホームプロジェクトと学校家庭クラブ～　（名　寄）田畑優香里
「課題研究」の取り組みと考察～自ら考え、自ら学ぶ生徒の育成を目指して～（芦別総合技術）一岡外喜男
株式会社の決算－決算指導上の留意点を中心として－
（札幌東商）柴田　重則
情報を活用した「総合実践」－「将来のスペシャリスト」の育成に視点を置いた総合実践の指導方法－
（釧 路 商）奥平　松一
本校における会計科の取り組み
（室 蘭 商）相澤　英樹
成田　治男
科目『水産情報処理』および『水産情報技術』の指導について－新技術の導入－　（小樽水産）島田　政幸

〈研究調査〉

北海道における産業遺跡実態調査（V）（石炭鉱業史）－本道の炭鉱の現状と保存課題－
（札幌藻岩）山田　大隆

● 第 34 号 ●

巻頭言　（会　長）綾井　健二

〈教科部会〉

日本・スペイン交流史（下）－政宗・ハセクラ・ソテロ－　（札幌開成）武田　秀治
「数学教育実践研究会」の活動報告
北海道算数・数学教育会　数学実践研究会
代表（札 幌 北）中村　晃三
（小樽桜陽）岡部　一良
（札 幌 東）大山　斉
（札幌新川）中村　文則
（札幌稲北）早苗　雅史
（札幌藻岩）菅原　満
北理研科学研究グループにおける研究活動の一例－電池と電気分解の探求－　（札幌白陵）玉利　和弘
北海道南岸戸井町沿岸の海藻目録
（札幌清田）佐藤　輝夫
（戸　井）竹田　信一
狩猟と楽器の起源の一考察－鹿笛などの囮笛からみた楽器の起源－　（札幌篠路）枡谷　隆男
新カリキュラムによる外国語教育の一考察－脚光を浴びる根室西高校ロシア語教育－
（札 幌 北）高橋　誠
生徒に焦点を当てた英語の授業－英語嫌いをなくすために－　（釧 路 商）齋　圭治郎
工業科における「家庭一般」の一試行－「鶏の屠殺・解体、調理」実習－　（紋 別 南）江口凡太郎
科目“建築計画”の学習指導計画例－自作テキストの実践　その2－　（札 幌 工）伊藤　茂樹
これからの検定目標について－日商1級、税理士試験を通じて－　（札幌新川）西田　典博
水中画像処理システム及びセラミックス材料に関する調査　（戸　井）永川　修治

● 第 35 号 ●

巻頭言　（会　長）武田　泰明

〈教科部会〉

北海道西岸・積丹半島沿岸産の海藻リスト及びフェノロジー（第5報）　（札幌清田）佐藤　輝夫
唐・太宗に焦点をあてた授業の展開
（滝　川）本間　勲
『高齢者の生活』指導案の研究－家庭生活分野における体験学習を取り入れた授業試案の実践－
（根　室）畠山寿美代
マルチメディア社会に対応した情報処理教育－文部省・情報処理教育担当教員等養成講座を受講して－
（函 館 商）吉本　満
数学コンテスト－第15回　北海道高等学校数学コンテストを終えて－　（札 幌 南）皆川　一雄
移行期の高校理科履修実態調査
（札幌開成）鶴岡　森昭
普通高校における商業教育の現状と今後のあり方について　（千歳北陽）中内　勝美
エドガー・アラン・ポー論－その作品と思想－
（室 蘭 栄）中澤　良介
実習を取り入れた授業展開の工夫
（厚岸水産）中野　専司
自己表現力を高める指導への考察－新聞コラム欄の利用と意見文の作成・発表を通して－
（函館中部）高瀬　容子
土木教育の基礎・基本について
（札 幌 工）横田　潤一

他教科との連携による地歴科授業の実践－理科と家庭科と英語科との合同授業から－
（芦別総合技術）吉井優紀彦

● 第 36 号 ●

巻頭言　（会　長）武田　泰明
〈教職一般〉
部分多様体について－Riemann多様体の中の極小曲面－　（札幌北陵）小林　志保
ＭＧ検査と学習の関連について
（大　麻）森田　裕
〈教科部会〉
土佐日記『象徴文学』へのいざない
（千歳北陽）山崎　勲
世界史における音楽教材－テーマと可能性－
（札幌南陵）吉田　徹
マレーシア政府派遣留学生予備教育に参加して
（札幌南陵）佐藤　学
北海道炭鉱の近代化遺産保存と継承の現況について－三笠、美唄、赤平、芦別市を中心とする遺産活用事例案－　（札幌開成）山田　大隆
保健室に於ける相談事例研究（札幌拓北）門崎　千代
インターネットで雪まつり　（札幌新川）吉岡　隆
インターネットを使った授業の構築とその可能性－自立した学習者を育てるために－
（旭 川 北）川端　一正
小規模専門高校における国際交流実践報告－真の国際化globalizationのために－　（瀬 棚 商）島田　民男
生徒の多様化に対応した食物領域の授業の研究
（伊　達）米道　智美
情報処理科における簿記教育（士 別 商）坂口　勝幸
流通サービス科における「マーケティング」の取り組み　（札幌国際情報）古室　信行
水産食品におけるＨＡＣＣＰシステムについて
（小樽水産）亀山　喜明

● 第 37 号 ●

巻頭言　（会　長）田村　勸
〈教職一般〉
イギリスの中等学校を訪ねて（札幌開成）鶴岡　森昭
〈教科部会〉
地理歴史科・公民科に関する調査研究
（札幌国際情報）松澤　剛
折り紙と数学　（岩見沢西）加藤　渾一
実験教材の開発と実践　（札幌星園）杉山　剛英
笛の起源とリコーダー教育－木管本来の良さを見直し、豊かな心を求めて－　（札幌篠路）枡谷　隆男
ザ　リョクリョウ　エイゴ－13期生から17期生までの英語科の取り組み－　（北見緑陵）渡部　道博
Cooperative Class with Assistant Language Teacher The Actual Situation and the Future
(Hokkaido Kushiro Seien High School)
Yoshihiro Tanaka
現代高校生における保育教育の重要性について－男女の相互理解と共生の視点に立つ保育教育－
（札幌平岸）高見　真也
工業高等学校建築科教育課程と国家資格取得に関する基礎研究－建築施工技術者試験をとおして－
（音威子府）伊藤　茂樹
連絡会計制度及び会計科目で扱うべき内容について
（中 川 商）新岡　昌幸
大沼における水質汚濁の現状調査
（函館水産）西川　正一

● 第 38 号 ●

巻頭言　（会　長）田村　勸
〈教科部会〉
学科集合型高校における生徒の実態と学科目標に応じた数学の指導　（美　唄）辻　伸也
北海道空知地方の炭鉱遺産の現状と保存課題
（札幌開成）山田　大隆
A STUDY OF THE EFFECT OF ERROR SELF-CORRECTION ON ACQUISITION OF ENGLISH AS A SECOND LANGUAGE IN A JAPANESE HIGH SCHOOL
（札幌平岸）熊谷　修司
保育分野の授業について～保育分野の授業実践報告～
（戸　井）宮岡　美香
昭和初期の建築教育に関する研究－東京帝国大学の建築教育について　その１－　（札 幌 工）小幡　圭二
今後の簿記教育の方向性について
（札幌国際情報）別所　正一
本校における『国際理解教育』の試みについて
（厚岸水産）元岡　大輔

● 第 39 号 ●

巻頭言　（会　長）島　隆
〈教科部会〉
身近な現象の確率について　（芦　別）坂田　剛一
ドイツの炭鉱とエムシャーパークの現状を視察して
（札幌開成）山田　大隆
Lessons Adopting “Portfolios” and Free-Writing in Class　（札幌南陵）俵谷　俊彦
家庭科と他教科とのかかわりについて
（歌 志 内）笹原　朋子
本校電子機械科における電気・電子・制御実習とその関連科目の取り組みについて（滝 川 工）石田　裕
インターネット教育における情報リテラシー教育
（南 茅 部）川崎　知文
大型船設計と艤装の実際　（小樽水産）高山　浩志

年表

高教研40年のあゆみ

昭和38（1963）年～平成15（2003）年

年	月	高　教　研	月	教　育　関　係
1963 (昭38)	1 5 12	北海道高等学校教育研究会設立総会が札幌南高校で開かれ初代会長として梶浦善次氏が就任 昭和38年度会員登録者数（1,985名）	1 4 6 7 11	道学力向上対策協議会発足 能力開発研究所設立 高校に新教育課程が実施 中教審に後期中等教育の拡充整備を諮問 全国学力調査実施（小中） 能力開発研究所第1回能研テストを実施
1964 (昭39)	1 3 12	第1回北海道高等学校教育研究大会（札旭丘） 参加者（335名） 講　師　森戸　辰男（中央教育審議会会長） 『高校教育の問題点』 会報第1号発刊 研究紀要第1号発刊 昭和39年度会員登録者数（2,228名）	2 4 5 7 9 10 11	文部省、小中学校の「道徳の指導資料」第1集70万部を発刊 高校入試制度を改訂し総合選抜制を打ち出す 道教委“教頭制”を公布 能力開発研究所　進学適正能力テスト実施 文部省体育施設五カ年計画発表 文部省全国学力調査を20%抽出に改めると発表 文部省「わが国の教育水準」（教育白書）を発表
1965 (昭40)	1 3 7 12	第2回北海道高等学校教育研究大会（静修高） 参加者（725名） 講　師　高坂　正顕（東京学芸大学学長） 『日本教育の課題』 （この年から教科別集会が開かれる） 会報第2号発刊 研究紀要第2号発刊 会報第3号発刊 昭和40年度会員登録者数（2,710名）	1 5 6 11	中教審「期待される人間像」の中間報告を発表 道教委、公立高校の小学区制を廃止し、大学区制に移行を決定 高校再編成の基本方針発表 家永三郎教科書検定問題で第1次訴訟を起こす 「わが国の社会教育」－現状と課題－教育白書
1966 (昭41)	1 3 4 7 12	第3回北海道高等学校教育研究大会（静修高） 参加者（1,200名） 講　師　沢田　慶輔（東京大学教授） 『考える力をもった人間を育てる教育』 会報第4号発刊 研究紀要第3号発刊 梶浦会長退職・長瀬米蔵氏会長就任 会報第5号発刊 昭和41年度会員登録者数（3,343名）	1 2 4 7 10 11	教育課程審議会、愛国心の育成などを内容とする教育課程改定基本方針をまとめる 盲学校及び聾学校の高等部の学校を定める省令 札幌啓成高等学校開校 東京都高校の学校群設置と入試教科を3教科に削減 中教審「期待される人間像」を含めて「後期中等教育拡充整備案」を正式に答申 道中等教育振興協議会、高校入試科目削減を諮問

年	月	高　教　研	月	教　育　関　係
1967 (昭42)	1	第4回北海道高等学校教育研究大会（静修高） 参加者（1,656名） 講　師　平塚　益徳（国立教育研究所長） 『後期中等教育への諸問題について』 中川　秀三（札幌医科大学教授） 『大脳生理学と精神衛生について』	5 6 7 8	二本木教育長勇退・岡村教育次長が昇格 家永三郎教科書検定は違憲であると第2次訴訟を提訴 公立高等学校の設置適正配置および教職員数の標準等に関する法律を一部改正 高等学校における職業教育の多様について答申
	3	会報第6号発刊 研究紀要第4号発刊	9	中・高教員の海外研修派遣始まる
	7	会報第7号発刊	10	教育課程審議会、小学校教育課程改正について最終答申
	12	昭和47年度会員登録者数（4,426名）		高校生の意識調査
1968 (昭43)	1	第5回北海道高等学校教育研究大会（市民会館） 参加者（2,323名） 講　師　細谷　俊夫（東京大学教授） 『わが国の中等教育』 伊藤　祐時（日本大学教授） 『進路指導について』	2 3 4 5 11	日教組、超勤手当問題でマンモス訴訟 私立高校統一入試始まる 高校生の政治活動の指導を徹底するよう指示 高校再編成計画を実施 副読本「北海道百年のあゆみ」発行 71年度実施の小学校学習指導要領案を発表（歴史学習の強化が特色） わが国の教育のあゆみと今後の課題について中央教育審議会でまとめる
	3	会報第8号発刊 研究紀要第5号発刊		
	6	会報第9号発刊	12	坂田文相、東京教大、東大当局の話し合いで入試中止を内定
	12	昭和43年度会員登録者数（5,090名）		
1969 (昭44)	1	第6回北海道高等学校教育研究大会（市民会館） 参加者（2,352名） 講　師　高坂　正堯（京都大学助教授） 『転換期における日本の諸問題』 犬飼　哲夫（北海道大学名誉教授） 『開拓百年と北海道の野獣』	1 2 3 8 10 11	東大当局安田講堂等の学生による封鎖の全面解除のための機動隊を導入 政府の方針で東大の入試中止を決定 能研テスト、69年度から休止決定 「大学運営臨時措置法」公布 高校における政治的教養と政治的活動について文部省が通達 教員の特別昇給実施要綱を提示する
	3	会報第10号発刊 研究紀要第6号発刊		
	6	会報第11号発刊		
	12	昭和44年度会員登録者数（5,052名）		
1970 (昭45)	1	第7回北海道高等学校教育研究大会（市民会館） 参加者（2,551名） 講　師　岸本　　康 （共同通信社論説委員科学評論家） 『宇宙開発と変革の時代』 益井　重夫 （国立教育研究所第2研究部長） 『教育改革と後期中等教育の諸問題』 －諸外国の実状と関連して－	3 3 5 6 10	高校入試、猛吹雪のため延期 英語科、理数科の増設 「私学振興財団法」成立 中教審、高等教育の改革基本構想の中間報告と初等中等教育の改革基本構想、試案を発表 東京地裁の杉本良吉裁判官、教科書裁判で家永三郎勝訴の判決を下す 文部省、杉本判決を不服として東京高裁に控訴 高等学校学習指導要領告示
	3	会報第12号発刊 研究紀要第7号発刊		

年	月	高　教　研	月	教　育　関　係
	4 7 12	長瀬会長退職・磯貝芳司氏会長就任 会報第13号発刊 昭和45年度会員登録者数（5,213名）		
1971 (昭46)	1 3 7 12	第8回北海道高等学校教育研究大会（市民会館） 参加者（2,921名） 講　師　衛藤　瀋吉（東京大学教養学部教授） 『日本と中国』 岸田純之助 （朝日新聞論説委員、評論家） 『情報化社会における教育のシステム』 会報第14号発刊 研究紀要第8号発刊 会報第15号発刊 昭和46年度会員登録者数（5,792名）	1 2 4 12	文部省小・中新学習指導要領の部分改定を告示（福祉優先の公害教育方針を明確化する） O.E.C.D「日本の教育」で報告書まとめる 文部省小・中学校の新しい指導要録を通知 小学校の教育課程、10年ぶりに改定（神話、公害など登場） 文部省の大学入試改善会議「大学入学選抜方法の改善について」最終報告を発表
1972 (昭47)	1 3 7 12	第9回北海道高等学校教育研究大会（厚生年金会館） 参加者（3,326名） 講　師　林　健太郎（東京大学文学部教授） 『民主主義を考える』 矢口　　新 （能力開発工業センター所長） 『教育革新の課題』 会報第16号発刊 研究紀要第9号発刊 会報第17号発刊 昭和47年度会員登録者数（5,714名）	4 6	札幌北陵高校開校 教育制度検討委員会「日本の教育をどう改めるべきか」の第2次報告書を日教組委員長に提出 高見文相第10期中教審に「教育・学術・文化の国際交流」について諮問
1973 (昭48)	1 3 7 12	第10回北海道高等学校教育研究大会 第10回記念大会全体集会 同10周年記念祝賀会（厚生年金会館） 参加者（3,249名） 講　師　和達　清夫 （中央公害審議会会長・前埼玉大学長） 『地球科学と環境問題』 市村　真一（京都大学教授） 『変わりゆく日本と教育』 会報第18号発刊 研究紀要第10号発刊 会報第19号発刊 昭和48年度会員登録者数（6,031名）	2 3 4 5 6 9 11 12	札幌藻岩高校の土地代、史上最高の八億円 第一次高等教育懇談会最終答申まとめる（地方大学拡充諮問） 校舎爆破の脅迫状で札幌啓成高校卒業式中止 札幌藻岩高校・千歳北陽高校開校 奥野文相「学校週5日制」の検討を支部当局に指示 都市部の公立高校入試50年から総合選抜制への切替え検討、道教委 動労スト続行で23高校が臨休、修学旅行延期・中止 中教審の筑波大学設置が特別国会で決まる 旭医大開設 公立高校適正配置計画決まる、定員715名増＝道教委

年	月	高　教　研	月	教　育　関　係
1974 (昭49)	1	第11回北海道高等学校教育研究大会（厚生年金会館） 参加者（3,255名） 講　師　天城　　勲（日本育英会理事長） 『近代学校制度－その性格と展望－』 橋本　重治（応用教育研究所長） 『教育評価の今日的問題』 3　会報第20号発刊 研究紀要第11号発刊 7　会報第21号発刊 12　昭和49年度会員登録者数（6,143名）	4 9	札幌手稲高校開校 北教組の全日スト 道教委、稚内、美唄両市の養護学校開校正式決定（52年度開校）
1975 (昭50)	1	第12回北海道高等学校教育研究大会（厚生年金会館） 参加者（3,321名） 講　師　会田　雄次（京都大学教授） 『日本の心と世界の心』 菊池　浩吉 （札幌医科大学教授医学博士） 『ガンの免疫』 3　会報第22号発刊 研究紀要第12号発刊 7　会報第23号発刊 12　昭和50年度会員登録者数（6,164名）	4 7 12	札幌丘珠高校・札幌清田高校開校 国立大学協会入試改善調査委員会、入試内容の為の共通テスト（一次試験）の実施検討、結果公表、出題範囲は必修科目（５教科７科目）とし、２次試験は選択科目全国一斉実施53年春から実施の見通し 公立高校入学選抜改善研究協議会は51年度の総合選抜制見送る 道教委、札幌市内に52年度開校メドに公立二校の新設決める（52.4札幌西陵高校・札幌白石高校開校）
1976 (昭51)	1	第13回北海道高等学校教育研究大会（厚生年金会館） 参加者（3,338名） 講　師　池田弥三郎（慶応義塾大学教授） 『言葉としつけ』 田上　義也（北海学園大学講師） 『北の環境の中で』 3　会報第24号発刊 研究紀要第13号発刊 7　会報第25号発刊 12　昭和51年度会員登録者数（6,201名）		
1977 (昭52)	1	第14回北海道高等学校教育研究大会（厚生年金会館） 参加者（3,508名） 講　師　加藤陸奥雄（東北大学学長） 『自然保護』 岡路　市郎（北海道教育大学学長） 『「教え」への幻想』 3　会報第26号発刊 研究紀要第14号発刊 4　磯貝会長退職、瀬戸哲郎氏会長就任 7　会報第27号発刊	1 2 6 7 8	海部文相と日教組トップ会談（主任制について） 国語審議会「新漢字表」を海部文部大臣に中間報告 道教育委員会、昭和60年までの「北海道教育長期総合計画」決定 文部省、新しい「小・中学校学習指導要領」発表 道立近代美術館開館（東北以北最大） 文部省、教科書検定規則と同検定基準の全面的改正

年	月	高　教　研	月	教　育　関　係
	12	昭和52年度会員登録者数（6,272名）		道教委、53年度の公立高校入試の総合選抜制導入見送り
			9	道教委、北教組対立の中、気境公男道教育長辞職
			12	道教委、53年度の道内公立高校適正配置計画を道議会、文教財務委員会に報告、三学区に四校新設
1978 （昭53）	1	第15回北海道高等学校教育研究大会（厚生年金会館） 参加者（3,660名） 講　師　村松　剛（筑波大学教授） 『国際情勢と日本の進路』 河邨文一郎（札幌医科大学教授） 『医療と福祉』	3	道教委「公立高校の入試選抜に関する改善試案」を発表
			4	北広島高校・石狩高校開校
			5	道教委「公立高校の入試選抜に関する改善試案」の細則を発表
			6	文部省は51年末の教育課程審議会の答申を基礎に、高校の新しい学習指導要領案を発表 文部省は57年度から実施する新しい高校学習指導要領を正式に告示
	3	会報第28号発刊 研究紀要第15号発刊		
	7	会報第29号発刊	10	道教委は道内14教育局、市町村教委、各小、中、高校長に対し主任手当実施通達
	12	昭和53年度会員登録者数（6,549名）	11	道教委、公立高校と公立特殊学校職員の人事異動の実施要領決める（各学校をA、B、C、Dの四つの“群”に区分）
1979 （昭54）	1	第16回北海道高等学校教育研究大会（厚生年金会館） 参加者（3,731名） 講　師　黛　敏郎（作曲家） 『日本の音』 田中　彰（北海道大学教授） 『近代日本の岐路』	1	初の国公立大学共通一次試験が全国一斉に行われる
			2	大学入試センターは1月に実施した国公立共通一次試験の五教科総合の平均点は636.07点、最高は972点、最低は0点で標準偏差値は134.28点と発表
			4	札幌東陵高校・札幌新川高校・札幌平岸高校開校
	3	会報第30号発刊 研究紀要第16号発刊		
	4	瀬戸会長退職・樋浦浩氏会長就任		
	7	会報第31号発刊		
	12	昭和54年度会員登録者数（6,411名）		
1980 （昭55）	1	第17回北海道高等学校教育研究大会（厚生年金会館） 参加者（3,891名） 講　師　犬飼　孝 （大阪大学名誉教授・甲南女子大学教授） 『万葉のこころ』 武谷　愿（北海道大学名誉教授） 『エネルギー資源の今日と将来』	2	「ゆとりある、充実した教育」をキャッチフレーズにした小学校の新しい学習指導要領スタート
			4	道内に高校が5校開校 南陵高校開校
			11	道教委、56年度の公立高校適正配置設置計画を決めたが新設校ゼロで職業科中心に18校18学級削減
	3	会報第32号発刊 研究紀要第17号発刊		
	7	会報第33号発刊		

年	月	高　教　研	月	教　育　関　係
	12	昭和55年度会員登録者数（6,450名）		
1981 (昭56)	1

年	月	高　教　研	月	教　育　関　係
1984 (昭59)	1	第21回北海道高等学校教育研究大会（厚生年金会館） 参加者（4,061名） 講　師　外山滋比古 （お茶の水大女子大学教授） 『新しい人間像と教育』 伊藤　隆一（北海道教育大学教授） 『北からの出発』	1	「札幌芸術の村」原案出来る
			2	首相直属の「教育臨調」設置 道内の公立高校４年ぶりに授業料値上げ
	3	会報第40号発刊 研究紀要第21号発刊	3	旧有島武郎邸芸術の村に移転決定
	7	会報第41号発刊	4	札幌稲雲高校・大麻高校開校
	12	昭和59年度会員登録者数（6,245名）	9	「道高校長期収容対策検討協議会」、中卒者増に対する対策を道教委に答申
			12	全国の公立高校で中退者が10万人の大台を上回る
1985 (昭60)	1	第22回北海道高等学校教育研究大会（厚生年金会館） 参加者（4,054名） 講　師　黒羽　亮一（日本経済新聞論説委員） 『なぜ　今　教育改革か』 岡田　宏明（北海道大学文学部教授） 『北方民族における伝統と近代』	3	北大の学長に有江氏再選
			6	小樽に道内初の職訓大学設置決定（61年開校の予定） 「臨時教育審議会」第１次答申まとまる「共通テスト」案が浮上する
	3	会報第42号発刊 研究紀要第22号発刊	9	校内暴力が下火になる一方「いじめ」が社会問題化する（９月までに自殺者が５人も出る） 「教育課程審議会」が12年ぶりに福井謙一氏を会長に発足
	4	尾崎会長退職、小柳六郎氏会長就任		文部省全国の小・中・高校へ入学・卒業式における「国旗国歌」について通達を出す
	7	会報第43号発刊		北海学園が創立100年式典を挙行
	12	昭和60年度会員登録者数（6,231名）		
1986 (昭61)	1	第23回北海道高等学校教育研究大会（厚生年金会館） 参加者（4,012名） 講　師　加藤　秀俊（放送大学教授） 『生涯教育の将来』 石黒　直文 （北海道拓殖銀行常務取締役） 『これからの企業の求める人間像』	1	道内の高校進学者人数３年連続で増加（道教委間口増に大童） 札医大学長に菊地浩吉氏選出される
			2	全国で「いじめ」の発生は２校に１校と文部省発表
			4	「臨時教育審議会」第２次答申案を発表（生涯学習体系への移行を主軸とする教育の見直しを行う） 「国語審議会」40年ぶりに「現代仮名遣い」を改定 札幌篠路高校開校
	3	会報第44号発刊 研究紀要第23号発刊		
	7	会報第45号発刊		
	12	昭和61年度会員登録者数（5,859名）	9	藤尾文相、７月と９月の日韓関係についての発言で罷免される
1987 (昭62)	1	第24回北海道高等学校教育研究大会（厚生年金会館） 参加者（3,972名） 講　師　江藤　　淳（東京工業大学教授） 『ことばとこころ』 岡村　正吉（北海道虻田町長） 『地方自治と教育』	3	北大学長に伴義雄氏選出される 国公立大入試初のＡ・Ｂ日程で開始
			4	「臨教審」（岡本道雄会長）が第３次答申（９月入学に向けて条件整備の必要性を力説） 札幌平岡高校開校
			5	道内の高校生の総数史上初めて24万人台になる
	3	会報第46号発刊		

年	月	高　教　研	月	教　育　関　係
		研究紀要第24号発刊 4 小柳会長退職、高畠惇彦氏会長就任 7 会報第47号発刊 12 昭和62年度会員登録者数（5,729名）		文部省の「児童生徒問題行動実態調査」により登校拒否と自殺が過去最高と判明。同時に学習塾の過熱がみられる 6 国大協、63年度入試における２次試験出願を共通一次以降に繰り下げることを発表
1988 （昭63）	1	第25回北海道高等学校教育研究大会（厚生年金会館） 参加者（4,114名） 講　師　野坂　昭如（作家） 『近ごろ思うこと』 小松　作蔵（札幌医科大学副学長） 『心臓移植をめぐって』 3 会報第48号発刊 研究紀要第25号発刊 7 会報第49号発刊 12 昭和63年度会員登録者数（5,645名）	2 4 8 10 11	国大協　64年以降の入試は「分離・分割方式」採用を発表 道教委と北教組12年間もめ続けた主任制問題で「主任は中間管理職でなく主任を固定しないこと」で合意 札幌拓北高校開校 旭川北高同窓会4,000万円の基金で海外留学財団を設立 「入試センター」は65年からの「新テスト」を12月ではなく１月中旬に移すことを決定 北大、65年度以降「分離・分割」制度を導入と発表 道教委、62年度の公立高校の定員枠を30学級増と発表 文部省「共通一次試験」に代わる「新テスト」を65年から実施と発表
1989 （平１）	1	第26回北海道高等学校教育研究大会（厚生年金会館） 参加者（3,972名） 講　師　多湖　　輝（千葉大学教授） 『日本人と創造性』 美濃　羊輔（帯広畜産大学教授） 『バイオテクノロジーの現状と問題点』 3 会報第50号発刊 研究紀要第26号発刊 7 会報第51号発刊 12 平成１年度会員登録者数（5,586名）	1 3 11	西岡文相「主任は中間管理職とせず」との道教委と北教組の合意案を強く批判（国庫補助の停止をにおわす） 「共通一次試験」今回でその歴史に幕をおろす（受験者37.4万人） 沢教育長「主任制の北海道方式」の白紙撤回を発表 文部省教科書検定図書調査審議会」は40年ぶりに基準を改正（３段階審査を２段階に、文相に訂正勧告権を与える） 文部省、小・中学校の新指導要領移行措置を告示 道教育大が大学院新設構想を発表
1990 （平２）	1	第27回北海道高等学校教育研究大会（厚生年金会館） 参加者（4,118名） 講　師　金田一春彦（文学博士） 『日本語の心』 高橋　良治 （釧路市丹頂鶴自然公園園長） 『タンチョウの四季』 3 会報第52号発刊 研究紀要第27号発刊 7 会報第53号発刊	1 9	「共通一次」に代わって登場した「大学入試センター試験（新テスト）」が、43.5万人の参加を得て行われる 寺山教育長「主任制の北海道方式」の平成３年度実施を表明

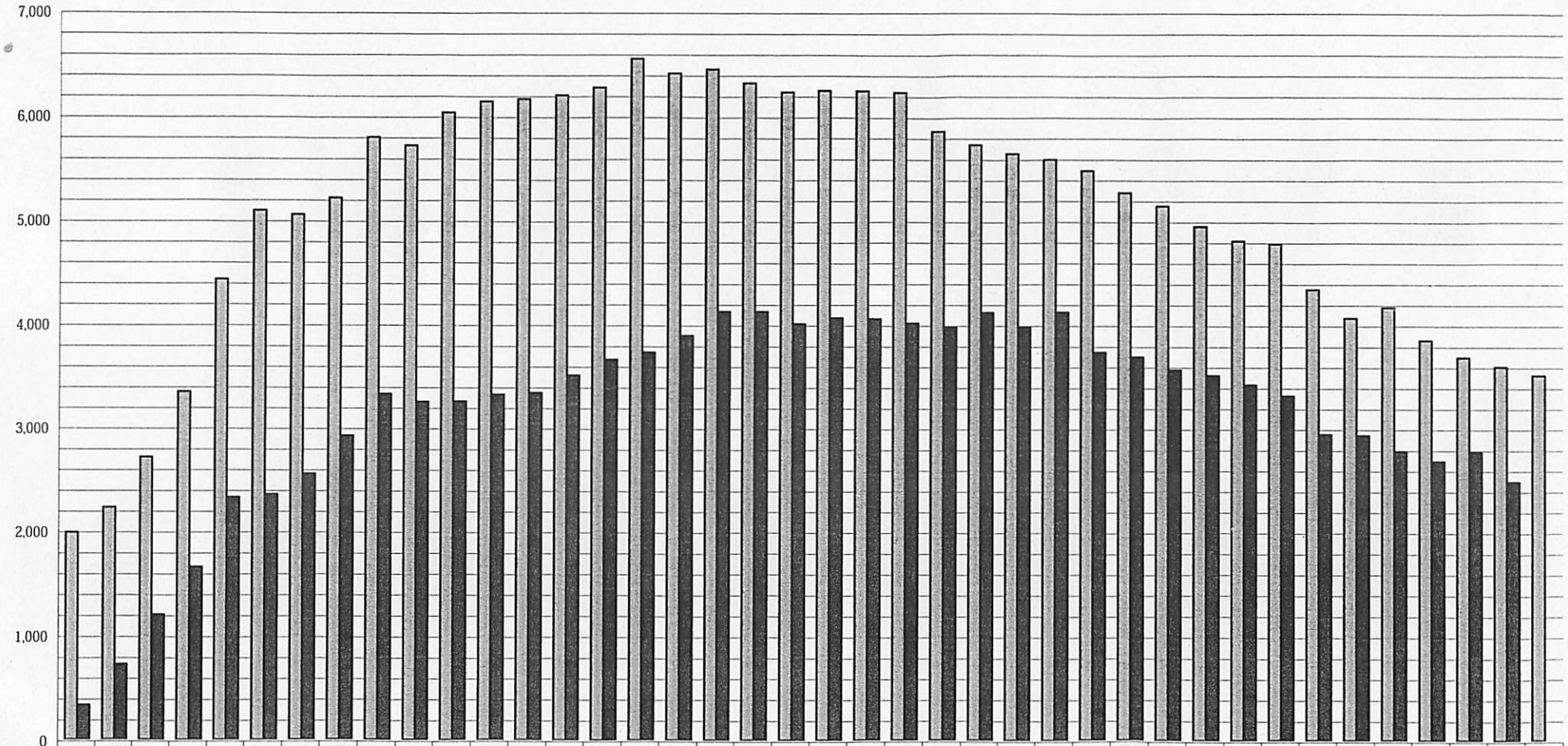
年	月	高　教　研	月	教　育　関　係
	12	平成２年度会員登録者数(5,482名)		
1991 (平３)	1	第28回北海道高等学校教育研究大会（厚生年金会館） 参加者（3,734名） 講　師　菊地　元一（青山学院大学法学部長） 『経済法秩序における公正としての正義』－日米構造協議を中心に－ 高畑　直彦 （札幌医科大学神経精神科教授） 『心の危機と反応』 3　会報第54号発刊 研究紀要第28号発刊 4　高畠会長退職、本間恒太氏会長就任 7　会報第53号発刊 12　平成３年度会員登録者数（5,269名）	1 2 3 4 6 11	「入試センター試験」で国公立離れが目立つ 「国語審議会」外来語の表記法について答申 兵庫県立農業高校で91年度入試答案の改ざん事件が発覚 「中教審」が特定高校の有名大学寡占化の是正を答申 明大で替え玉受験発覚 文部省「日の丸は国旗」「君が代は国歌」と92年用教科書で明記 「入試センター試験」の受験者、史上最多の47.2万人
1992 (平４)	1	第29回北海道高等学校教育研究大会（厚生年金会館） 参加者（3,690名） 講　師　なだ　いなだ（精神科医・作家） 『心の底をのぞく』 坂本　与一 （北海道文理科短期大学学長） 『オスとメスのエソロジー』 3　会報第56号発刊 研究紀要第29号発刊 4　本間会長退職、染谷昌志氏会長就任 7　会報第57号発刊 12　平成４年度会員登録者数（5,142名）	1 2 3 4 6 7 8 9	センター試験47万人受験で行われる 高校中退者12.3万人にのぼる 筑波大学学長に江崎氏選出される 文部省学校５日制で通達出す リクルート事件担当の堀田検事、慶応大学の教壇にのぼる 姉妹校提携大はやり（全国で1,200校） 指導要録の全面開示問題裁判請求へ（大阪） 大検志願この10年で４倍に（全国で２万人台にのぼる） 不登校中学生100人に１人の割合－学校嫌い過去最高に 学校５日制…毎月第２土曜日休業になる
1993 (平５)	1	第30回北海道高等学校教育研究大会 第30回記念大会 同30周年記念祝賀会（厚生年金会館） 参加者（3,563名） 講　師　伊東　光晴（放送大学教授・京都大学名誉教授） 『技術革新の現在と社会の変容』 古葉　竹識（野球評論家） 『耐えて勝つ』 3　会報第58号発刊 研究紀要第30号発刊 7　会報第59号発刊 12　平成５年度会員登録者数（4,945名）	1 3	入試センター試験51.2万人受験・史上最高 最高裁「家永教科書裁判第１次訴訟」で文部省の教科書検定制度を「合憲」と判断
1994 (平６)	1	第31回北海道高等学校教育研究大会 （1.12,13）（中島体育センター） 参加者（3,510名）	1 2	大学入試センター試験志願者過去最高（53万１千人） 高校中退者10万１千人

年	月	高　教　研	月	教　育　関　係
		講　師　C．W．ニコル（作家） 「自然と人間」 若井　邦夫（北海道大学教授） 「子供が発達するとき－必要と遊びの間に－」	5 8 9 12	福岡県教委が指導要録を全面開示 国立大学入学辞退率過去最低（17.1%） 女子生徒の２割、４年制大学へ 入学式での日の丸掲揚率95%超、君が代斉唱率は小中８割、高校７割 「学校が楽しい」中・高で急減
	3	会報第60号発刊 研究紀要第31号発刊		
	7	会報第61号発刊		
	12	平成６年度会員登録者数（4,807名）		
1995 （平７）	1	第32回北海道高等学校教育研究大会 （1.11,12）（厚生年金会館） 参加者（3,420名） 講　師　中村雄二郎（明治大学名誉教授） 「共通感覚と自己実現」 杉岡　昭子 （札幌国際プラザ専務理事） 「『故郷忘じがたく候』の旅」	4 ※	第15期中教審がスタート（有馬朗人会長） 学校５日制（月２回、第２、第４土曜日） 道内公立高校学級定員43名へ スクールカウンセラー派遣（いじめ、不登校問題） 初めての新学科集合型の高校開校（北海道札幌国際情報高等学校） 道内96年度教員採用試験は狭き門
	3	会報第62号発刊 研究紀要第32号発刊		
	4	染谷会長退職、綾井健二氏会長就任		
	7	会報第63号発刊		
	12	平成７年度会員登録者数（4,777名）		
1996 （平８）	1	第33回北海道高等学校教育研究大会 （1.10,11）（厚生年金会館） 参加者（3,314） 講　師　河合　雅雄 （京都大学名誉教授、日本福祉大学教授） 「人間－進化の道からずれた動物」 山中　燁子 （北海学園大学人文学部教授） 「世界の中の日本と日本人」	3 4 6~ 7 8 ※	道内公立高校合格者氏名発表取り止め 道内公立高校学級定員40名へ 全国で学校給食で集団中毒（O157）多発 中教審、「生きる力」の提唱 教育課程審議会発足 全国高等学校総合文化祭の開催 道内97年度教員採用試験は史上最高倍率
	3	会報第64号発刊 研究紀要第33号発刊		
	7	会報第65号発刊		
	12	平成８年度会員登録者数（4,338名）		
1997 （平９）	1	第34回北海道高等学校教育研究大会（1.8,9） （厚生年金会館） 参加者（2,942名） 講　師　佐原　　真（国立民族博物館福館長） 「大むかしと現代」 横湯　園子（北海道大学教授） 「子供を観る眼」－教育臨床心理の立場から－	3 4 ※ ※	公立高校入試でミス続出（英語、数学、社会） 97年度教育予算6,432億円 初めての総合学科の設置（北海道清水高等学校）（平成15年度までに７校設置） 道内98年度教員志願者は過去最高 不登校全国で10万人突破
	3	会報第66号発刊		

年	月	高　教　研	月	教　育　関　係
		研究紀要第34号発刊 4 綾井会長退職、武田泰明氏会長就任 7 会報第67号発刊 12 平成９年度会員登録者数（4,064名）		
1998 (平10)	1	第35回北海道高等学校教育研究大会 （1.7,8）（厚生年金会館） 参加者（2,932名） 講　師　浅井　信雄（神戸市外国語大学教授） 「国際化と私たちの暮らし」 中野　武房 （北海学園北見大学教育学部教授） 「カウンセリングを体験してみませんか」 （昼休みに「ミニコンサート」を実施） 3 会報第68号発刊 研究紀要第35号発刊 7 会報第69号発刊 12 平成10年度会員登録者数（4,167名）	2 4 5 7 ※ ※	道教委と北教祖、主任制基本事項で一致 道立高校入試で観点別評価を中止 道教委が職員倫理綱領を施行 教課審答申 少年によるナイフ事件発生 98年度教育予算6,632億円
1999 (平11)	1	第36回北海道高等学校教育研究大会 （1.10,11）（厚生年金会館） 参加者（2,779名） 講　師　梶田　叡一 （ノートルダム女子大学学長） 「変革期の高校教育を考える」 （午後） 《シンポジウム》～問題行動の背景を探る～ 「今のこどもの心は」 パネラー　渡部　正行 （札幌医科大学神経精神医学講座講師） 小菅　正夫（旭川市旭山動物園長） 檜田　英樹 （札幌市立中央中学校教諭） 中村　廣治（浦河高等学校教諭） 坂口由美子 （札幌東高等学校養護教諭） コーディネーター 宮森　正勝 （札幌啓北商業高等学校長） （昼休みに「ミニコンサート」を実施） 3 会報第70号発刊 研究紀要第36号発刊 4 武田会長退職、田村勸氏会長就任 7 会報第71号発刊 12 平成11年度会員登録者数（3,849名）	3 6 8 ※	高等学校学習指導要領の改訂 99年度教育予算6,217億円 国旗、国歌法が成立 全国の学校でセクハラやわいせつ事件多発

年	月	高　教　研	月	教　育　関　係
2000 (平12)	1	第37回北海道高等学校教育研究大会 (1.13,14)(厚生年金会館) 参加者(2,681) 講　師　養老　孟司 (東京大学名誉教授、北里大学教授) 「からだと脳」 3 会報第72号発刊 研究紀要第37号発刊 7 会報第73号発刊 12 平成12年度会員登録者数(3,686名)	3 10 12	道内公立高校の入試改革実施(学力点、学習点の配分) 白川英樹・筑波大名誉教授にノーベル化学賞 教課審答申、「評価」について
2001 (平13)	1	第38回北海道高等学校教育研究大会 (1.10,11)(厚生年金会館) 参加者(2,711名) 講　師　河合　隼雄 (京都大学名誉教授、国際日本文化研究センター所長) 「青春の夢」 3 会報第74号発刊 研究紀要第38号発刊 4 田村氏退職、島隆氏会長就任 7 会報第75号発刊 12 平成13年度会員登録者数(3,595名)	10 11	野依良治・名古屋大教授にノーベル化学賞 遠山敦子文科相、中教審に教育基本法の全面改正を諮問
2002 (平14)	1	第39回北海道高等学校教育研究大会(1.9,10) (厚生年金会館) 参加者(2,482名) 講　師　阿部　謹也(共立女子大学学長) 「日本社会の構造と教育」 3 会報第76号発刊 研究紀要第39号発刊 7 会報第77号発刊 12 平成14度会員登録者数(3,513名)	4 10	完全学校週5日制スタート 小柴昌俊・東大名誉教授にノーベル物理学賞 田中耕一・島津製作所分析計測事業部ライフサイエンス研究所主任にノーベル化学賞 初めての連携型中高一貫教育の実施(北海道上川高等学校、上川町立上川中学校)(平成15年度3校で実施)
2003 (平15)	1	第40回北海道高等学校教育研究大会 (1.8,9,10) 第40回記念大会(厚生年金会館) 講　師　五木　寛之(作家) 「日本人のこころ」 3 会報第78号発刊(予定) 研究紀要第40号発刊(予定) 7 会報第79号発刊(予定)	4	高等学校新学習指導要領施行

北海道高等学校教育研究会登録会員数および大会参加者数の推移



	1963 昭和38	1964 昭和39	1965 昭和40	1966 昭和41	1967 昭和42	1968 昭和43	1969 昭和44	1970 昭和45	1971 昭和46	197 2昭和4	1973 昭和48	1974 昭和49	1975 昭和50	1976 昭和51	1977 昭和52	1978 昭和53	1979 昭和54	1980 昭和55	1981 昭和56	1982 昭和57	1983 昭和58	1984 昭和59	1985 昭和60	1986 昭和61	1987 昭和62	1988 昭和63	1989 平成1	1990 平成2	1991 平成3	1992 平成4	1993 平成5	1994 平成6	1995 平成7	1996 平成8	1997 平成9	1998 平成10	1999 平成11	2000 平成12	2001 平成13	2002 平成14
□会員数	1,985	2,228	2,710	3,343	4,426	5,090	5,052	5,213	5,792	5,714	6,031	6,143	6,164	6,201	6,272	6,549	6,411	6,450	6,317	6,230	6,246	6,245	6,231	5,859	5,729	5,645	5,586	5,482	5,269	5,142	4,945	4,807	4,777	4,338	4,064	4,167	3,849	3,686	3,595	3,513
■参加数	335	725	1,200	1,656	2,323	2,352	2,551	2,921	3,326	3,249	3,255	3,321	3,338	3,508	3,660	3,731	3,891	4,121	4,121	4,004	4,061	4,054	4,012	3,972	4,114	3,972	4,118	3,734	3,690	3,563	3,510	3,420	3,314	2,942	2,932	2,779	2,681	2,771	2,482	

本部事務局の歩み

本部事務局のこの10年間は、「会員の減少に伴う会の運営はいかにあるべきか」というテーマに取り組んだ時期といえる。

平成６年度に4,807名（大会参加者3,420名）を数えた会員数は、年々減少の一途をたどり、同13年度には3,595名（同2,482名）となったのである。

その原因として、役員会や本部事務局において、「会員の高教研に対する意識の変化」、「会員と非会員の参加料の差とメリット」、「各教科ごとの研究組織の充実」、「広報活動の不足」等が検討されたが、「著名人による情報の伝達」として一定の役割を果たしてきた講演（第４回大会（昭和41年度）から人文科学系と自然科学系の二本建てとなった）のあり方についても、午後には参加率が激減するなど、マンネリ化の傾向にあるのではないかとの反省が出された。

午後の講演を廃して、第35回大会（平成９年度）には「カウンセリングの事例研究」を、第36回大会（平成10年度）には「教育問題のシンポジウム」を実施し、昼休みには会員有志による音楽会：「ミニコンサート」を実施したのも、そうした反省の声に配慮したものであったが、諸般の事情により、第37回大会（平成11年度）から、第１日目の全体講演は、中央講師一本とすることになった。このことはこの10年間の歴史の中で、最も大きな変化であるといえよう。

一方、このような中で、全体講演の講師に、初の外国人講師として、Ｃ．Ｗ．ニコル氏（第31回大会（平成５年度）午前の部）を、また、初の女性講師として、杉岡昭子氏（第32回大会（平成６年度）午後の部）を起用する等、特色ある全体講演を目指してきた。

以来、女性講師については、山中燁子氏（第33回大会（平成７年度）午後の部）、横湯園子氏（第34回大会（平成８年度）午後の部）と３年連続でお招きする機会を得ている。

また、本会の会員登録料は1,500円、大会参加費は2,000円（合計3,500円）であり、非会員の大会参加費は3,000円であったが、これについてもいろいろと検討した結果、平成７年度からは両者を同額にし、会員と非会員の格差をなくしたのである。

さらに、運営の効率化のために、本部事務局にＦＡＸを設置し、郵送料の節減を図るとともに、平成13年度からは、年３回（６月上旬、９月下旬、翌年２月上旬）の「役員会」を年２回（６月上旬、翌年２月上旬）とし、11月下旬の「運営会議」も、時期を全道教頭会に合わせて実施することの他にも役員会の会場を学校にする等、さまざまな対策を講じたのである。

加えて、第36回大会（平成10年度）から、「全体講演の司会者を２名から１名に減ずる」、「各教科部会の旅費支給対象者を４名とし、司会者は市内在住者で手当てする」、「大会要項の原稿をフロッピーで提出する」、「参加者名簿を自前で作成する」等のほか、旅費の算定基準や支出項目を見直して、徹底した予算の健全化、効率化を図ってきた。（その後、平成14年度からは道費補助金も停止された。）

ところで、この10年間、事務局の運営面での思い出はいろいろあるが、第31回大会（平成５年度）では厚生年金会館が改修工事のため使用できず、やむなく中島体育センターに会場を設定した。

午前の講師が作家のＣ．Ｗ．ニコル氏で、3,510名の参加があったが、前日のうちに、パイプ椅子の設置を行わなければならず、一部を札幌旭丘高校から運搬するとともに、同校の教職員が総出で対応することになったが、改めて厚生年金会館のありがたさを実感させられた年であった。

また、昔から「本研究大会当日は大雪に見舞われる」というジンクスがあるが、第33回大会（平成７年度）では見事にそれが的中した。

大会前日、本部事務局員による最終チェックにも、豪雪のため昼までに集まれたのは2,3名。さらにその日の午後３時ごろまでには、厚生年金会館に河合雅雄先生をお迎えし、最終打ち合わせを行う手はずが、５時になっても７時を過ぎても一向にお見えにならず、連絡も取れないまま、時間ばかりがどんどん過ぎていく有様であった。最悪の場合は、午前と午後の講演を入れ替える案まで考えたが、その夜10時を過ぎてようやく姿を見せていただいたときには本当に一同安堵の胸をなでおろした。

お聞きしたところ、関西空港に向かう高速道路が悪天候で通れないため途中から引き返すというハプニングがあり、予定の便に乗れなかったとのこと。雪が峠を越えていて、飛行機が飛べたのが本当に不幸中の幸いであった。

平成15年度からの新学習指導要領の実施にあわせて、これまでの13教科部会に、新しく「情報部会」が加えられ、第40回大会からその研究成果が発表されることになった。

会員減の中にあってもなお３千数百名の会員を擁する本研究会は全国的にも注目されており、今後も各教科・地区支部が一体となって21世紀という新しい時代に即応したあり方を追及していかなければならない。

（文責・佐藤　公征）

編　集　後　記

「高教研と共に本格的な冬が来る」とあちらこちらで挨拶言葉に使われるほど、例年、大会当日は不思議なほど悪天候になりますが、第35回大会が開催された１月７日、８日も寒波と猛吹雪に襲われ、高速道路が何ヶ所か寸断されました。

冒頭の文章は、高教研会報・第68号の引用で、1998（平成10）年のものです。確かに、大会当日に会場の受付をしていると、「例年悪天候」の印象があります。そこで、過去10年間の大会当日の札幌の天気を気象庁のWebサイトで調べてみた結果が下の囲みです。

93年１月７日は、「曇一時雨」で、お昼過ぎから小雨。二日目は、「雪」。14cmの降雪。
94年１月12日、13日は、ともに真冬日で「雪」。初日14cm、二日目８cmの降雪。
95年１月11日、12日も、両日真冬日で「雪」。二日とも９時ころに降雪がありました。
96年は、記録的な豪雪の年で、大会二日前に18cm、前日にはナント41cmもの大雪に襲われました。幸い大会当日の１月10日、11日は、５～６cm程度の降雪ですみました。
97年１月８日は、真冬日で、「晴のち曇」。１cmの降雪でした。
98年は冒頭で触れたとおり、最高気温マイナス7.8℃の寒波に見舞われ、天気「雪」。
99年１月12日は、「雪あられを伴う」で、午前中に16cmの降雪。二日目も降雪19cm。
2000年１月13日は、「雪」。二日目、「曇時々雪みぞれを伴う」。
01年１月10日、最高気温プラス8.1℃の陽気で、「雨のち晴」。午前中５ミリの降水。
そして02年１月９日は、「曇一時晴のち雪」。お昼過ぎから雪模様となり、８cmの降雪。

このような例年の悪天候のなか、また地理的にも距離の長い全道各地から、熱心に大会に参加してくださる会員諸氏に、事務局として改めて感謝いたしたいと思います。

さて、この40周年記念誌を編集するにあたり、基本的には30周年記念誌の編集スタイルを踏襲しつつ、一部に変更を試みました。判型をＡ４サイズとしたこと、グラビアページを設けたことなどです。また、地区支部・教科部会の「この10年の歩み」を各支部・各教科ごとに原則１ページずつとさせていただきましたが、そのため、字数の制約によって、思うような執筆ができなかった支部・教科もあろうかと思います。協力していただいた支部・教科の方々に改めて感謝申し上げます。末筆ながら、この記念誌の発刊にあたって祝辞ならびに寄稿をお願いし、快く引き受けてくださった方々に厚くお礼申し上げます。

2002年11月２日（文責・屋敷　健一）

編　集　委　員（50音順）
佐藤　公征
佐藤　由佳
関　　孝志
千葉　順世
西井　雅宏
能勢　　裕
屋敷　健一

40 周 年 記 念 誌

発 行 日　2003年1月8日
発　　行　北海道高等学校教育研究会
〒064-8535　札幌市中央区旭ヶ丘6丁目5－18
（北海道札幌旭丘高等学校内）
TEL／FAX（011）513－2238
発 行 者　島　　隆（会長）
印刷・製本　株式会社　さんけい

芸術
情報
英語
保体
国語
商業
家庭
工業
数学
農業
理科
地歴・公民
養護
水産